

日本醫史學雜誌

第 17 卷 第 2 号

昭和 46 年 6 月 30 日発行

原 著

江戸時代に作製された木製人体骨骼模型（木骨）

- について……………蒲原 宏…(1)
加賀藩最初の人体解剖……………酒井 恒…(24)
「鶴斎遺稿」について (-)……………大鳥蘭三郎…(34)
明治前北海道疾病史 (-)……………松木 明知…(50)
秋田藩医斎藤養達—とくに白鳥雄蔵との関係—……………松木 明知…(61)
The Role of Organized Research Units in Development
of the Neurosciences……………H. W. Magoun…(5)

資 料

- 堀内文書の研究 (-)……………片桐 一男…(69)
例会記事……………(78)
昭和45年度医史学関係論文目録 (2)……………(91)
第72回日本医史学会総会追加討論……………(89)
雑 報……………(92)
-

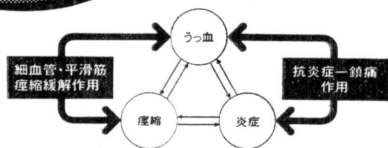
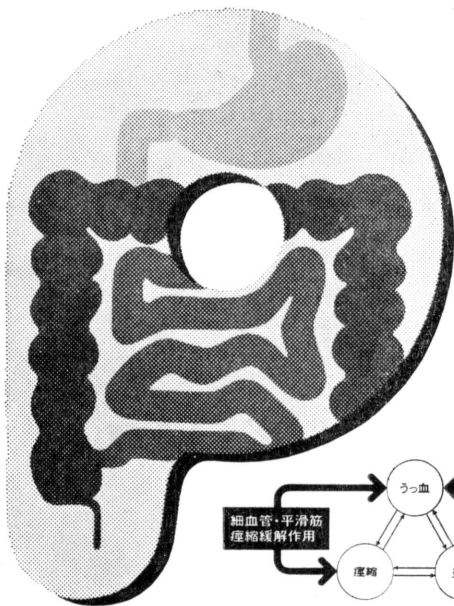
通 卷 第 1384 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷2~1~1
順天堂大学医学部医史学研究室内
振替口座・東京15250番
電 話 (813) 3111 内線 544

細血管・平滑筋の痙縮緩解作用、 抗炎症—鎮痛作用を併有し

胃炎、胃・十二指腸潰瘍などの
病態改善に有用な…



★新しいタイプの細血管・平滑筋痙縮緩解剤

ピレン[®]錠

●本製品のコード番号はY-PIXOです。

一般名＝クエン酸プロキサゾール

本剤は異常緊張亢進状態にある平滑筋臓器
や細血管の痙縮を選択的に正常化し、強力な
抗炎症—鎮痛作用と相まって、

●疼痛など自覚症状の改善とともに胃腸粘膜
の浮腫、うっ血、びらんなど他覚所見の改善
が内視鏡、X線検査、生検などで認められて
いる。

●胃・十二指腸潰瘍においては、潰瘍の縮小
消失が内視鏡およびX線検査で認められて
いる。

●胃液の分泌を抑制せず、ムチンの産生のみ
を選択的に増加させる。

なお、本剤は神経系を介さず、平滑筋に直接
作用し、忍容性がよい。

〈包装〉 錠(100mg) 120錠(12×10) 600錠(12×50) 1000錠(200×5) 1500錠(12×125)

〈薬価基準〉 100mg 1錠当り 23円80銭

●文献送呈：お申し込みは大阪市東局区内 吉富製薬学術課へ



製造＝吉富製薬株式会社 販売＝武田薬品工業株式会社
提携＝アンジェリーニ・フランチェスコ社(イタリア)

原著

江戸時代に作製された

木製人体骨骼模型(木骨)について

蒲原宏

まえおき

日本の実証的で自然科学的な医学の発達に関する重要な資料として、江戸時代に人体骨骼標本をモデルとして実物と違わぬよう忠実に作製された木製の人体骨骼模型は貴重な医学的文化財である。

星野良悦の身幹儀、各務文獻の模骨作製はきわめて重要な業績であり、すでに呉秀三、富士川游両氏の「木骨考」(明治二十六年)、原田謙太郎氏の「星野良悦の身幹儀(木製人体骨骼)作製について」(日本医史学雑誌一三二四号・一三二五号昭和十九年)の詳細な論考と資料の紹介が行なわれている。

また小川鼎三氏は日本解剖学史の立場から木骨について精細に論究されているが、なお不明確な問題点があるとされている。先人の業績と、新たに披見することができた資料にもとずき、現在まで知られている江戸時代に作製された木製骨骼模型について、改めて検討を行なったので報告し、御批判をおおきたい。

〔一〕 江戸時代作製の木骨数

星野良悦が細工師原田孝次に作製させた「身幹儀」をはじめとし、江戸時代を通じて、日本人の手によって作製された

日本医史学雑誌・第十七卷
第二号・昭和四十六年六月

昭和四十六年四月四日受付

人体骨骼模型（以下木骨）は一体いくつ存在したのであろうかという問題を検討してみた。

報告や文献にみられる木骨、現在まで直接その所在と実物について調査できた木骨などを一応整理分類してみると、表(1)のごとくである。すなわち当時実際に作製され、存在していたと考えられる木骨九組、作製を依頼されてはあったが完成されたか否か不明のもの三組となる。

このうち星野良悦の「身幹儀」系に属するものが六組であるが、現存を確認されているものは後藤文彦氏（広島市）の所蔵されている星野良悦の「身幹儀」のオリジナル一組にすぎない。

表(1) 江戸時代に作製された木骨一覧表

7	6	5	4	3	3	1	
(模)各務木骨 (骨)	星野系木骨	星野系木骨	星野系木骨	星野系木骨	〃 〃	星野木骨 (身幹儀)	木製骨骼 模型名
各務文献	佐々木中沢	足立 長雫	杉田 立卿 西道朴 (立卿 道朴 寿)	二代目星野良悦 ?	星野良悦	星野良悦	発案者
田中 (某 大阪)	岡本斧三郎 (江戸)	岡本斧三郎 (江戸)	指物屋喜伝次 (広島)	指物屋喜伝次 (広島)	原田 孝次 (広島)	原田 孝次 (広島)	製作者 (居住地)
幕府医学館	佐々木中沢 仙台↓ 藩医学館	足立 長雫	杉田 立卿	新宮 涼庭	星野 良悦	幕府医学館	旧所蔵者(処)
東京大学医学部	仙台中学南校↓ 仙台医学学校↓?	?	?	?	後藤 文彦氏 (広島)	ナ シ	現所蔵者
模骨呈案	人様木骨縁起 宮城県学校諸綴	人様木骨縁起	広島西道朴紹介 人様木骨縁起	驅齋齋入門日誌 (不求堂 雑記)	身幹儀附説	文化三年焼失 大沢玄沢より各務文献への書翰	備考(典拠)

12	11	10	9	8
	星野系木骨		各務系 奥田木骨	各務小木骨
長谷川宗仙	小此木玄智	大槻 玄幹	奥田 万里	各務文献
岡本斧三郎 (江戸)			池内 (某 大阪)	田中 (某 大阪)
	完成か未 完 か 不明?		奥田 万里 ↓ 名古屋医学館	各務吞龍 石黒忠應
	?		?	↓ 武見太郎氏(東京)
	人様木骨縁起		尾張名所図会	釣玄堂四科全書 整骨編自序

各務文献の「模骨」系に属するものは三組が知られているが、そのうち東京大学医学部所蔵の各務文献「模骨」一組
武見太郎氏（東京都）所蔵の各務文献の座右常備用模骨一組の計二組が現存している。

星野系木骨は、広島において時代が少し下ると、原田孝次作製のオリジナルののりによって指物屋喜伝次によって木骨が
作製された。

さらに喜伝次の作製した木骨をモデルとして、江戸では岡本斧三郎が木骨を二具作製している。

各務文献の「模骨」はまず大阪の細工師田中某によってオリジナルが作られ、またそのほかに座右研究用の小木骨が作
製されていた。

各務文献の門弟奥田万里（周道）所蔵の木骨は細工師池内某によるものであるが、いずれも製作者の姓は知られてい
るが名が明かにされていない。

製作が不確実な木骨としては、大槻玄幹（江戸）、小此木玄智（奥州・二本松藩）長谷川宗仙（常陸・笠間藩）が細工師岡
本斧三郎に作製を依頼したものがある。もし出来上っていたとすれば三組が追加されたのであろうが、製作未完に終った

公算が大である。

このほか入手経路に多少の明確さを欠く木骨としては、新宮涼庭旧蔵の星野系木骨と推定される一組がある。これらを入れると、確実に江戸時代に存在した木骨は九組となるので、この九組の木骨の系譜を考証し、現在まで疑問とされていた問題を若干整理してみたい。

〔二〕 星野系（広島系）木骨について

(1) 寛政十年（一七九八）江戸携行身幹儀（木骨）

星野良悦が原田孝次に作製させ寛政十年（一七九八）九月二十八日に江戸へ携行した木骨は江戸の漢蘭の医家を驚かせ、帰路京阪の医家に賞讃されたが、星野良悦はこれを郷里広島に持ち帰った。

このオリジナルの木骨は寛政四、五年頃（一七九二—一七九三）に完成したと原田謙太郎氏は推定されているが、呉秀三、富士川游両氏は寛政元年頃（一七八八）とされている。

そしてこの最初に作製された木骨は初代星野良悦から二代良悦に伝えられ、現在は後藤文彦氏（広島市）のもとに所蔵されているが、これは奇しくも第二次大戦中疎開されて、原爆の災を免がれることができた。

(2) 星野良悦の幕府医学館献納木骨

広島にいったん帰郷した星野良悦が、原田孝次にもう一組の木骨を作製せしめ、寛政十二年（一八〇〇）十一月に献納した木骨はその後どのような運命をとったであろうか。

呉、富士川両氏は「木骨考」（明治二十六年）において「其後如何になりしや今伝らず」と述べられている。

原田謙太郎氏は「不求堂雑記」のなかにある「京師新宮涼庭駈豎齋入門日誌」の記載から、医学館献納木骨が新宮涼庭の手に移ったかも知れぬとの推論を立てておられる。

果して呉、富士川、原田氏らの説が正しいであろうか。

私は呉、富士川両氏の「木骨考」の中に収載されている「文政二年三月十三日付、大槻玄沢より各務文献あての書翰写し」から、星野良悦が幕府医学館躰壽館に献納した木骨は文化三年（一八〇六）三月三日芝・車町から出火し三月五日昼四ツ時に至ってようやく鎮火した江戸大火のさいに、幕府医学館とともに焼失し、現存していないと解したい。

すなわち前記の大槻玄沢から各務文献あてた木骨献納に関する書翰に「先年御所蔵之品御類焼此度宜出来之品献備に相成誠に不朽被成御伝候事御大慶之段尊御座候云々」とある。

この文中の「先年御所蔵之品」というのは多紀安長、杉本忠温が責任者であった幕府医学館に所蔵されていた「星野良悦献納の身幹儀（木骨）」と前後の文章から判定しうる。（資料①）

文化三年（一八〇六）三月三日の江戸大火は焼失面積長サ二里半幅平均七町半、諸侯藩邸八十三、寺院六十六カ寺、神社二十余社、町数五百三十余町、焼死溺死者千二百人余という悲惨なもので、幕府医学館も三月四日に類焼の厄にあつた。

すなわち大槻玄沢の手紙の内容は「文化三年（一八〇六）の大火に医学館所蔵の星野木骨も同時に焼失したが、今度は出来のよい木骨が献納されたので大変よろこばしい事であるとお噂申している云々」と解さねばならぬであろう。

したがって原田謙太郎氏が星野木骨と解された、文久三年（一八六三）八月十九日「医学館薬品会物目録のなかに見られる「木造人骨」は、文政二年（一八一九）に各務文献によって献納された「各務模骨」と解するならば、医学館の木骨については別に疑問とするところはなくなってくる。（資料②）

(3) 新宮涼庭旧蔵の星野系木骨

新宮涼庭が広島製の木骨を所蔵していたという資料を原田謙太郎氏に教示されたのは山崎佐氏である。これは「不求堂雑記」の中にある「京師新宮涼庭驅豎齋入門日誌」に「驅豎齋木骨を蔵す工匠安芸の人なり。或年罪人を乞て肉を蒸し骨を貯え、秤にて分量を計り木に比べ、星霜を歴て全く成る。安芸に一基を存す……」とあるのが據証の概要である。

この新宮涼庭旧蔵の木骨の行方は現在全く不明であるが、原田謙太郎氏は幕府医学館献納の星野木骨が何等かの系路を経て新宮涼庭のもとに入ったと解されてもいる。

すでに前述したように寛政十二年（一八〇〇）献納の星野良悦の木骨が、文化三年（一八〇六）に医学館とともに焼失しているのが、原田謙太郎氏の推論は一応否定されねばならない。

また新宮涼庭は文化七年（一八一〇）西游の途中十月七日から翌文化八年（一八一二）八月一日まで広島に滞在し、文化八年（一八一二）一月十七日初代星野良悦の門人中井厚沢と二代目星野良悦に会い「身幹儀説」を作っている。また涼庭は厚沢の疾病の治療や蔵本の写本も行っている。

このような新宮涼庭と広島星野一門との親密な関係と、涼庭の「身幹儀」に対する深い関心は星野系木骨の模造品を購入する機会を得ることとなったであろうと推定される。

新宮涼庭が順正書院を経営する時点では、経済的にも充分木骨の模造品を入手できる状態にあったので、広島から直接オリジナルからの模造品を購入することができたのではなからうか。

新宮涼庭旧蔵の木骨は医学館献納のものとは全く別の経路で入手したものと考えたい。

しかしこの新宮涼庭旧蔵の星野系木骨が、そのオリジナルの作者原田孝次ではなくて、指物屋喜伝次の可能性が大である。

石田憲吾氏によると、初代良悦は享和二年（一八〇二）三月一日四十九才で病没し、原田孝次は良悦と相前後して死亡したという。新宮涼庭の広島滞在が初代良悦没後八年の文化七年（一八一〇）であることと考え合せると、新宮涼庭所蔵の木骨は後述の杉田立卿旧蔵の星野系木骨製作者指物屋喜伝次ではなからうかとの推定がなり立つ。

しかし確実な証拠資料のない現在、推論の域を出ない。

(4) 杉田立卿旧蔵の星野系木骨

これは大槻玄幹の「人様木骨縁起」によると、杉田玄白が星野良悦に木骨一具の製作を依頼していたが、この約束を果さぬうちに良悦は没した。たまたま杉田玄白の没した文化十四年（一八一七）に江戸に学んでいた広島藩医西道朴（人様木骨縁起には西道寿とある）が杉田立卿から木骨の入手方を依頼され、帰郷後指物屋喜伝次に模作させた。文政三年（一八二〇）四月十七日、あたかも杉田玄白の祥月命日にあたる日に立卿に贈られた。

その後これをモデルとして足立長傳が自己所蔵分と佐々木中沢所望分を、江戸の細工師岡本斧三郎に依頼して各々一具づつの木骨を作製したのである。

しかし現在この杉田立卿旧蔵の木骨と足立長傳旧蔵の木骨の所在は不明である。

(5) 佐々木中沢旧蔵の星野系木骨

大槻玄幹の「人様木骨縁起」によると佐々木中沢は仙台藩医学館用に木骨を所望しており、その旨を大槻玄沢と足立長傳に申し入れてきたので大槻玄沢は杉田立卿から前記の木骨を借出し、足立長傳に作製を依頼した。

そこで足立長傳は江戸の細工師岡本斧三郎を招き、自己所蔵物とも二具を作製せしめ、一具は佐々木中沢の手に渡った。

この木骨は佐々木中沢から仙台藩医学館に納められたが、明治維新後、仙台県医学館が一時廃止されたときに、中学南校に保管転換された。しかし明治五年医学校再建の際再び中学南校から医学教育用に返還されている。（資料③）

これが東北大学医学部に伝承されているか否かは今後の調査にまたねばならないが、昭和四十五年十一月一日までの同大学解剖学教室における実地調査では発見することができなかった。

「人様木骨縁起」によるとこのほかに大槻玄幹と小此木玄智（二本松藩医）、長谷川宗仙（笠間藩医）の三人が岡本斧三郎に木骨作製を依頼したが、それが完成を見たか否かは確認する資料を現在のところみることができない。

(6) 星野系（広島系）木骨についての小括

星野系（広島系）木骨について考案してみたところをまとめてみると次のようである。

① 星野良悦が原田孝次をして作製せしめた最初の木骨「身幹儀」をモデルとして五具の人体骨格模型が作製されたので、オリジナルの「身幹儀」を含めて星野系木骨は六具が存在していたと考えられる。

② 幕府医学館に献納された原田孝次製作の木骨は文化三年（一八〇六）三月四日、江戸大火のため焼失した。

③ 広島指物屋喜伝次が作製した木骨は杉田立卿に贈られ、これをモデルとして江戸の細工師岡本斧三郎が二具の木骨を作製した。

そのうち一具は足立長傳、一具は佐々木中沢の手をへて仙台藩医学館の所蔵に帰した。

④ 新宮涼庭旧蔵の木骨は指物屋喜伝次作のものではないかと推論される。

⑤ オリジナルの「身幹儀」は現在広島市の後藤文彦氏のもとに現存している。

〔三〕 各務系（大阪系）木骨について

各務文献は正骨術研究用として木製の骨格縮小模型を所持していたが、実物大の全身骨格模型の作製を細工師田中某に命じ、二年余を費して文政二年（一八一九）に完成し、これを「模骨」と命名した。

星野系（広島系）の木骨に対し、これを各務系（大阪系）の木骨として分類してみると、この系統には三組の木骨が存在したことが知られている。

(1) 各務文献の幕府医学館献納模骨（木骨）

各務文献が細工師田中某に作製させ、門弟の中山少仙に携行させて幕府医学館に献納した木骨は現在東京大学医学部に保存されている。この木骨の一部は戦前ドイツの展覧会に出品したさいに数カ所が紛失している。

この木骨について呉・富士川両氏の「木骨考」（明治二十六年）の編された時点では、「之ヲ献納シタルノ干支、及コレヲ

製造シタル年月ヲ詳ニスルコト能ハズ、其他、記録ハ未ダ之ヲ見ル事ナキヲ以テ、之ヲ探索スルニ由ナシト雖モ、コノ木骨ニ附属シテ著ハサレタル、整骨新書ハ文化庚午（七年）ノ刊行ナレバ、木骨ノ成リシモ恐ラクハ此年ノ前數年ナリシナルベク、之ヲ医学館ニ献納シタルハ此年頃ナルベシ。」としてゐる。

しかし文献が医学館に木骨を献納したときに添付した小冊子「模骨呈案」（杏雨書屋蔵）および、杉本忠温、多紀安長より大槻玄沢あての書翰に「各務相ニ細工の人骨明二十八日四ツ時過相ニ御同道医学館へ献納可然と存候」、とあるように医学館への模骨献納は文政二年（一八一九）二月二十八日のことである。（資料④）

褒賞金の二十両が三月十一日に下賜されていることから、従来の文献は献納を文政二年三月とされているが訂正を要すると考える。

しかし木骨が作製された年月日については明かでないが「模骨呈案」によると二年間を費していることだけは確實である。

また各務文献の著「整骨新書」の序文に「余乃命良匠以木作全骨骸置之坐側使諸生問業於余者按而知焉撫而得焉」とあるので、小川鼎三氏も指摘されているように、整骨新書の出版された文化七年（一八一〇）にはすでにオリジナルの木骨は完成していたと考えられる。各務文献の「模骨呈案」「整骨新書」、門弟奥田万里の「釣玄四科全書卷三十一整骨編自序」からみると原寸大のオリジナルの木骨が医学館に献納されたと考えられる。（資料⑤）

(2) 各務文献座右用小木骨

この木骨は現在武見太郎氏の所蔵に帰しているが、もとは石黒忠恵氏が明治二十二年軍談師各務吞玉なるひとから購入されたものであって、霽落した各務文献の子孫がこれを伝えていたと考えられる。

これは人体骨格の縮少模型であり、きわめて精巧に作られているが、この製作年代は残念ながら明らかではない。

(3) 各務系（大阪系）奥田木骨

各務文献の門弟奥田万里（周道）は、各務文献がその「模骨」を幕府医学館献納の後、木骨がないために整骨術修学に不便なので細工師池内某に命じて、木骨一具を作製させている。（資料⑤⑥）

この木骨の正確作製年代は不明であるが、この奥田木骨の存在の証拠となる、奥田万里の「釣玄四科全書卷之十一整骨編」の「自叙」が「文政三年（一八一〇）冬日」とあり、またその文中に「閱年而初成」とある。

また奥田万里の「奉整骨術及木制人骨全形文」に「工モ亦心力竭シテ此ニ従事シ凡テ二十余月ニシテ刻全ク或リヌ」とある。

したがってこの奥田木骨は文政二年（一八一九）二月以後各務木骨の医学館献納のことが決定した直後間もない頃から文政三年（一八一〇）十二月までの間に作製が完成されたと解したい。そしてこの木骨は文政五年（一八二二）十月二十二日奥田万里の旧友で名古屋在住の吉雄俊蔵が尾張藩々医浅井紫山と相談の上、尾張藩医学館にその著書とともに献納された。さらに治療技術を尾張藩々医中沢専蔵に伝授したのである。

岡田啓、野口道直編「尾張名所図会」所収の小田切春江が画いた「医学館薬品会」の図の中に展示されている「木像人骨」はこの奥田木骨そのものである、と考えて差支えないであろう。（資料⑥）（写真①）

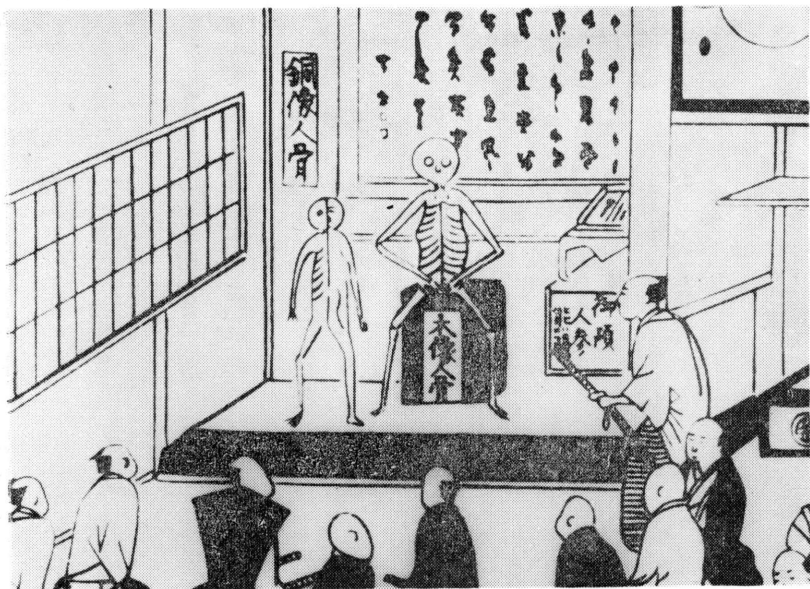
しかし現在この奥田木骨の行方は残念ながら知る由もない。星野木骨のオリジナルのように戦火を免れていずれかに保存されていてほしいものである。

(4) 各務系（大阪系）木骨についての小括

各務系（大阪系）木骨について考察してきたところをまとめてみると次のようである。

① 各務木骨は大阪の細工師田中某が作製したが、正確の製作年月日はいまだに明かでない。文政二年（一八一九）二月二十八日幕府医学館に献納され、その一部は若干失われているがこれは現在東京大学医学部に保存されている。

② この木骨のほかに各務文献は座右用にミニチアの木骨を所有しているが、現在武見太郎氏のもとに保存されてい



写真① 「尾張名所図会」医学館薬品会の図にみられる木像人骨と銅像人骨（部分拡大）

る。

③ 各務文献の弟子奥田万里も文献の使用した骨と同じものをモデルとして細工師池内某に木骨を作製させたが、これはのちに奥田万里の著書と共に尾張藩医学館に献納された。「尾張名所図会」の医学館薬品会の図にみられる「木像人骨」がこの各務系の奥田木骨であるが現在その所在は不明である。同図会に見られる銅像人骨については後考をまちたい。

むすび

わが国において一八世紀末から十九世紀中ばにかけて作られた木製の人体骨骼模型（木骨）は九具あった。この系統には星野系（広島系）と各務系（大阪系）があったが、星野系六具、各務系三具である。そのうち星野系（広島系）一具、各務系（大阪系）二具の計三具が現存している。

これらはいずれも整骨術の研究と教育に使用する目的をもって作製されたものである。人体骨骼標本を所蔵することを困難にした日本の封建社会の精神風土が

このような精巧な実物大、またはミニチュアの木製模型を作製する背景になつていたことを忘れてはならぬであらう。

しかしこれらの木製骨骼模型の作製は、すでに先学の士が述べておられるように、自然科学的な西洋医学をわが国導入し、実証的合理的な医学と治療体系の樹立に影響するところがきわめて大であった。また模型そのものはこれらの歴史的事実を証明する日本医学史上の貴重な文化財である。

原田謙太郎氏の星野系木骨に関する研究（昭和十九年）以後に調査し得た二、三の資料をもととし、呉・富士川両氏の「木骨考」以来疑問とされていた二・三の問題を解明するとともに、多少重複はするが、既刊の資料もあわせて紹介した。

資料① 大槻玄沢所蔵書翰写し（木骨考による）

去月朔日同廿五日兩度の御錦翰相違拝見被相托候一件始末相調の上可及御報と段々延引致候、先以此節稍春暖相成候処愈御安全奉遥賀候随而拙老依旧候乍慮外御安意可被下候、御製造之一品御門人中山生御持越無滞被致參着其後の次第御同処より逐々被仰遣御承知と存じ候得共尚又有始末左に申遣候中山氏去月十五日到着翌十六日私宅へ被參御状並御口上之趣も委細承知先以兼て得御意置候石坂宗哲老へ発着之届及懸合尚何々御都合被下度段頼遣置候処翌十七日同人直に拙宅へ御出早速其筋へ御届被成候由いづれ献納御内見被下度段并御日取の義も及御直談候処廿日御閑日の由尤御品深川藏元土藏へ被通納置候事故於同処取ひらき入内見可申上段義兵衛へ懸合候処当日差支無之由にて同日私共罷越石坂氏御出を通待居入来の上少仙組立私共までも致一覽候処石坂氏にも精巧御丹誠の程殊之外被致称美拙老等尤致感服斗候に御座候具被通添候小冊早速拝見之処一二愚意も御座候故校正致置候処右の書差添出し候ても苦しかるまじきや并御覧の上訂正も被下度旨共に御頼申候所随分可然尚又熟覽可被致旨にて被持帰候当日御同処御門人等被召連私方よりも弟子共同道為致拝見大勢之人数に御座候処義兵衛心配にて夫々饗応等有之甚都合も宜く通済申候義兵衛始終の世話一方ならざる事にて御座候石坂氏内覽之趣向にて可被通達旨にて御帰にて候其後右小冊一二訂正いたし被越候故読書申付通備置候処同廿五日左の封状私留守中到来受取差出置候由

写

大槻 玄沢様

杉本 忠 温
多紀 安 長

以手紙致啓上候然者各務相二献納の人骨御都合次第医学館へ御廻可被成候此段可得御意如此御座候以上

二月廿五日

右掃宅の上被見の処返書も不致候事故右御請且献納の日取伺旁即日杉本多紀兩御氏へ直に罷越候処御兩処共に御不在に付弟子中へ相頼置引取申処此日原沢文仲罷越初而段々の咄合も承申候其後廿七日左の写の通封状到来致候

大槻 玄沢様

杉 本 忠 温
多 紀 安 長

以手紙得御意候者各務相二細工の人骨明二十八日四ツ時過相二御同道医学館へ献納可然と存候依之此段得御意度如此御座候以上
二月廿七日

依之中山へ通談義兵衛へ懸合夫々支度通調持夫等深川にて取後つり台持にいたし少仙に而は麻上下着用供召連れ私は平服にて罷越候
当朝原沢文仲も参り差添可参故之義申開候に付愚意も有之候に付召連罷越候上学館俗事役へ対面申談候は此度大阪より罷下り候相二門人為組立今日召連候外に御当地に罷在候右門人原沢文仲と申者追々右木骨御組立等の義に付為御聞召不苦候は右の者も御坐敷へ差出可申哉と聞合候処差支無之旨に付同人義も十徳着用私被通通候処へ兩人并に同席差扣右二箱并被通添候御著書此度の御小冊共に右俗事役大野茂三郎と申仁へ差出宜敷御取斗被下度旨申し委細承知之旨にて早速講席と申広き坐敷へ持出し直組立にいたし候様申候に付私付添候少仙組立文仲手伝も致し大体通済候処にて多紀氏御詰所へ私被召出面会にて御座候其上にて組立之処被致一覽尚又右組立伝受置候様外御医師中へ被申渡右掛り一兩人被出段々少仙より被伝受其上にて取仕舞まで被習受候夫より通扣居候処共三人ハ昼支度被通出候九年頃至杉本法眼御出に付此節御講席御用に通成於別御座敷御伝申候御医師中一兩人少仙差添被組立尤私付添罷在通済候処杉本氏御出御見分宜出来の旨殊之外被致称美候、

其上にて御当人内々私へ被申聞候は今日無滞献納通済候段向々へ可被成御届尤右為手当御金被下置候御取調兼而有之候処御金藏御渡日に無之候ては辨兼候間来月中旬迄は通罷り申間敷尤貴様御呼出御渡申事に候共彼地より参候者心得にも可通成内々に御通置候旨御座候右通済勝手次第引取可申筈に付直様退散少仙同道此節正藏と改名を致候杉本多紀兩氏へ首尾好通済難有仕合せと申趣意を以て御礼廻り御著書一部つつ通ニより差上度旨を以て差出置申候、

当日御請合の医師中大勢被致一覽皆々感心先年星野良悦献備の品とは大に勝り候様口々評判致され誠に御本望御同慶に御座候

一、前々申候通最初より石坂氏厚く心配御座候故御著書一部私持参段々の礼謝申述候上差出申候右之書は私へ被相贈候本にて御座候於家には先年橋本宗吉より相贈所蔵いたし候故此度の御贈本御遜り申事にて御座候、此上別段被遣候に不及候

一、一昨十一日左の写の通封状到来

大槻 玄沢様

多紀 安長
杉本 忠温

御達申義有之候に付明十二日五ツ時過医学館へ御出席可被成候以上

三月十一日

多紀 安長
杉本 忠温

大槻 玄沢様

依之昨朝内々正藏召連御同処へ罷出候処杉本多紀両御氏御列坐被申渡候

其許門人各務相二製作の木骨医学館へ献納仕候につき為御手当此金二十両被下置候此段可相違旨被申候

先年御所藏之品御類焼此度宜出来之品献備に相成誠に不朽被成御伝候事御大慶の段御嚙御座候目録台にのせ前へ置被申渡候処私頂戴難有仕合当人へも早速可申聞旨申上候処礼廻りの義相伺候処去冬被御立候若年寄内藤紀伊守様へ可罷出最も堀田撰津守様御添処も御座候間御同処様へも可罷出旨被申候夫より真に引取杉本多紀の両氏へ御礼罷出丸の内へ出入藤堀田御両家様へ参上十徳着用手札左の通

私門人各務相二製作仕候木骨医学館へ献納仕候に付為御手当御金二十両頂戴被仰付難有仕合奉存候右為御礼参上 大槻 玄沢

右之通相済し九ツ時過致帰宅候右御目録直様少仙へ相渡申同処より申参候半と存候右前後相調申始末進候御家譜等へ御記可被相残事と逐一相認如此御座候委細の義は少仙帰阪の上御間に被成候先は昨日までに相済候段中遣度如此御座候以上

三月十三日

大槻 玄沢

各務 相二様

資料②

「文久三年癸亥八月十九日医学館薬品会物目録

銅人

銅人明堂之図四面

木造人骨

銅人

竹田法印昌慶遊于西土」

資料③

宮城県史(6) 厚生・衛生史 一九〇頁 昭和三十五年

相任被下度願之事

一人体骨骸 骨組

右者医学修行仕候ニ欠べからざる之品ニ御座候間何卒当医学校江御廻被下候様奉願候

以上

申ノ五月二十三日(明治五年)

医学校内 氏家 敷

上野 成海

宮城県御庁 (明治五「学校諸綴」)

権参事 庶務課

元仙台旧医学校江相備置候人体骨骸中学校江相預置候処今般医学校御再立ニ付御渡相成度云云氏家敷等別紙之通申出候間御渡相成可然哉相伺申候

御所決案

書面之趣聞届候中学南校教授江申談可受取事

(明治五 学校諸綴)

中学南校教授江御達案

元仙台県ニ而旧医学館廢止之節其学校江相渡置候人体骨骸医学学校江下渡管に付同校御申談次第可引渡候也

壬申五月二十三日相違

宮城県

中学南校

教官江

(明治五年学校綴)

資料④

「模骨呈案」 (杏雨書屋藏本による)

蓋人身ハ造物主殊ニ無量ノ智巧ヲ逞フシ以テ斯ノ如キ形体ヲ造為シ以テ百爾ノ機転運用ヲ為シム、今夫レ皮膚ハ固ヨリ形軀(ノ浅キ四支)ノ端末ナリトイヘトモ、少カニ常(平)ヲ失スル事アレハ、輒チ其機転運用意ノ如ク自由ナル事能ハス(自ラ懺フスル事能ハサルヲ覚ユ)、之時ニ当リテ又誰カ速ニ之ヲ救療シテ其用ヲ全フスル事ヲ欲セザラン。

コレ医方ノ因テ起ル所以ナリ、況ヤ骨殖ハ一身ノ本幹ニシテ内外諸器咸クコレニ依頼シテ成サルハナシ。故ニ凡ソ医タル者先コレヲ実測シテ研究セスンハ有ルベカラズ。

殊ニ整骨ノ科ヲ修ムル者ハ預メ能クコレヲ講明スルヲ以テ最モ其要務トス。

蓋骨ハ一身ノ幹立ヲ為シ筋膜コレヲ緊韋韋統シテ以テ運転屈伸シ各自ノ機用ヲ為事ヲ得セシム。

故ニ筋骨ニ少カ(損)傷害ヲ被レハ勇悍剛(□□)シテ能ク苦楚ニ堪ル)人ト云ヘトモコレカ為ニ(強ヒテ)其本力ヲ逞フスル事能ハス。

(又)投能曲范ノ徒モ(優ニ其妙ニ詣ル者トイヘトモ)亦コレカ為ニ其(方)能ク盡ス事ヲ得ス。人誰カコレヲ以テ憂トセザル者アラシヤ。

夫打撲閃挫墮墮跌仆ノ変ニ因テ筋骨ヲ(損)傷害ヲ被ムル事ハ、人ノ或ハ免レザル所、況ヤ常ニ重ヲ挙ケ、堅ヲ破リ、或ハ負担輓推、又其筋力ヲ勞役スルモノニ於テヲヤ。

故ニ之ヲ整理スルノ術、豈一日モ之ヲ闕クベケンヤ。古今□□□□ヲ唱フルモノナキニ非ストイヘドモ、尋常輕易ノ技術トシ思ヲ斯ニ覃フスル者ナキハ慨嗟スヘキ事ナリ。

豈一日ヲ闕クヘケンヤ、漢土古人其人ニ令シク其説伝ラス、後世ニ至テ始テ整骨科ヲ立、其説考フシ。然レトモ其議スベキモ

ノ亦手□□ニ居ル。本邦近代正骨ヲ以テ代々其家ヲ世々ニスルモノアリ。然レトモ徒ニ家技ヲ斬秘シ師説ヲ守株スルヲ以テ自ラ足レリトシ、自ラ憤發シテ其本ヲ明ニスル事ヲ（付箋）

方今文運日ニ闡ケ衆技百工一トシテ備ラサルハナシ。亦一トシテ其妙ニ詣ラザルハナシ、而唯リ整骨科ニ於テハ猶未タ其奥ヲ極ル者アル事ヲ見聞セズ。豈濟生ノ一大缺事ナラズヤ。文献少壯ヨリ深ク此術ニ心ヲ刻シ、多年思ヲ斯ニ苦メ、凡ソ骨骸ニ係ル所ノ諸患ハ盡ク之ヲ救セン事ヲ欲ス。

然レドモ屢々其術ヲ試テ容易ニ功ヲ収ル事能ハザル者ハ脱曰ノ一□□若クハナシ。

遍ク世ノ専門整骨家ニ就テソノ法術ヲ訪求スルニ、（皆）唯拔伸ノ一法ニ止ルノミ、漢土ノ諸書ヲ搜索スルニ亦復然リ、但西洋諸家ノ研究スル所未タ如何トイフ事ヲ知ラス。

コレ世ニ未タ其整骨諸書ヲ翻訳スルモノヲ見（聞セ）サレバナリ。

コレヲ思ヒ（〜）、コレヲ思フ、又シテ悟ル、善ク此科ヲ修ント欲スル者ハ先真骨骸ニ就テコレヲ按撫シ其各骨ノ本形ヲ熟識シ其主用ノ常ヲ推明シ、以テ其變ヲ察シ、其自然ニ本イテコレヲ復□□ニ在ノミトイフ事ヲ。於是乎真骨骸ヲ求テ専ラコレニ徴シ、以テ其術ヲ考ヘ施シテ功ヲ得ル事少カラズ（取レル事數十人ニ及ナリ）。

因テ又從來世ニ不治ノ者多キハ思ヒヲ斯ニ致ササルカ為ナリトイフ事ヲ發明（察知）セリ。（□□骨骸ヲ實驗スル□□文献此理ハ整骨科ノ要務タリトイフ事ヲ發明シテヨリ）爾後累年或ハコレヲ刑余ノ屍ニ取リ或ハコレヲ草野古墳ノ間ニ拾ヒ（積年ノ久□□）終ニ一身幹支百骸ヲ全ク集メ辨スル事ヲ得タリ。

コレヲ算フルニ凡人身天然具有スル所□骨數總計二百有七、而シテ其□八種アリ。

關節ヲ為ス者二十有四又コレヲ細分スレバ二十有八アリ。其部分ニ随テ各骨異状ヲ為シ、其状ニ随テ又各自ノ主用アル事ヲ辨シ其常ニオイテ其變ヲ推シ、以テ治ニ臨ミ術ヲ施スニ脱曰ノ諸患從前難治ト云ヒ不治ト云フ者十二八九ヲ起ス事ヲ得タリ。ココニ於テ之ヲ整スノ術唯（獨）リ拔伸ノ一法ニ止ラサル事ヲ知り、只真骨骸ヲ以テ模範トシ日夜心ノ思ヲ整シテ以テ治術ヲ巧思ス。久シテ益自得スル所アリ、私心竊ニ以為ラク、和漢千古ノ未タ發セザル所ヲ發スル事ヲ得タリト。

學者苟モ篤ク斯術ニ志ス者ハ文献□□本ク所二本キ其常ヲ究テ其變ヲ整ヘハ往トシテ悖ル所ナク、病者ヲシテイタツラニ痛苦セシムルノウレヒ（ワツライ）無ク医モ亦力ヲ費ス事少フシテ心ヲ勞スルノ惑ナシ（累ニ）、而シテ其功ヲ収ムルノ速ナル事從來ノ諸法ヲ施ス者ニ百倍センカ故ニ文献居恒徒從（弟）ニ示スニ、整骨術ヲ修ムル□□真骨骸ヲ得テ其本形連続關節主用ノ常ヲ熟識辨明スルノ

要ナルニ如ク事ナキヲ以テス。然レドモ真骨容易ニ得ヘカラス。仮令偶廢骨ヲ拾ヒ得ル事アルモ、其各部連続ノ順次ヲ失フモノハ其全ヲ曉云スヘカラス。是ニ於テ良工ヲ得テ模骨ヲ造ラシメント欲スル（構思スル）事久シ。□□幸ニ田中某ヲ得テ年来聚メ貯フル所ノ真骨ヲ授ケテコレヲ模造セシメ、文獻日ニ其側ニ在テコレヲ監視（守）ス、エモ亦心力ヲ尽シテ此ニ従事シ、凡二年許ヲ經テ全ク成ル事ヲ得タリ。

其巧妙宛然トシテ真ニ逼ル、試ニ真骨ヲ取テ其側ニ置クニ殆ト辨スヘカラス（而後）文獻カ喜ヒ（可）知ル可キナリ。

文獻才劣ニ識陋、交ヲ深クスル益友ニ乏シ、數年ノ間約數年コノ拳ニ奔走シ精神ヲ勞費スル事筆舌ノ尽ス所ニアラズ、骨節ノ諸患唯折傷脱臼ノ二途ノミナラス、或ハ生レナカラ反附ノ者アリ、或ハ足八字状ヲ為ス者アリ、或ハ手指鈎曲スル者アリ、或ハ産後、或ハ痛風ノ諸症ニテ跛躄トナル者アリ、或ハ蠱毒ニ因テ四支緊急シ（及）頸項彊直ヲ為ス者アリ。

此等ノ類方業ノミヲ以テ治スル事ヲ能（得）ハス、コレニ整骨術ヲ兼ネ施シテ効ヲ取ル者少カラス、否ザレハ終身不具ノ廢人トナル者多シ。博濟ニ志深キ者宜ココニ意ヲ留ムヘシ。

又世俗筋骨損傷害ト泛稱シテ治ヲ整骨家ニ乞フ者三種アリ。

其一ハ瘀血凝滯ニ因スル者ナリ、其一ハ骨骸折傷、其一ハ關節脱失ナリ。瘀血凝滯ノ者ハ俗ニコレヲ筋違ト呼フ。コレ本本ト骨ニ關係スルモノニ非ストイヘドモ其機關ノ便ヲ失フニ至テハ其状全ク骨骸ヲ損害スルモノニ似タリ。（故ニ世俗ニ斯ク稱スルナリ）別ニコレヲ救フノ手術アリ、吾門コレヲ理筋ノ法ト稱ス。

□折傷ト脱失トノ二症ハ專ラ整骨科ノ司ル所、固ヨリナリ、共ニ能ク骨節ノ本形主用ヲ推考シ、其自然ニ本イテコレヲ整理スルニ在リ。施術竊ニ中レハ、立ニ復故セストイフ事ナシ。但日數ヲ經ル者ハ助ルニ器械ヲ以テシ、或ハ藥物ヲ兼用シテ全功ヲ取ムル事ヲ得ベシ。故ニ骨骸ノ本形主用ヲ熟識スル事ハ整骨科ノ要務ニシテ正法ノ本ク所治術ノ由テ生スル所ナリ。

コレ文獻ガ多年斯ニ眼勉シテ遂ニ模骨ノ拳アル所以ナリ。唯末タ西洋医家内景ノ精説ヲ学ヒス、是ヲ以テ遙ニ書信ヲ江戸ノ大槻先生ニ通シテ、略々其説ヲ与リ聞ク事ヲ得タリ。

憾クハ文獻晚年宿痾日ニ加リ其精義ヲ悉ス事ヲ得サル事ヲ。但積年此術ニ刻苦シテ独得スル所アル者ハ其圖説ヲ収載シア整骨新書ト命ケ以テ業ヲ吾門ニ問フ者ニ授ク。而シテ

（付箋）

以テ自ら足レリトシ未タ嘗テ一人モ憤ヲ發シテ其本ヲ明ニスル事ヲ勉ムルモノアラズ（ナシ）實ニ慨嘆スルニ堪タリ、方今文運日ニ闕ケ良医輩出シ、各述作スル所アリ、其他ノ投術モ亦皆完備巧妙ナラサルハナシ、而唯リ其妙ニ詣ラサルハナシ

模骨ノ拳ニ至リテハ久年ノ刻苦スル所ニシテ文献カ精神ヲ害スル所、豈コレヲ自ラ私ヲシテ永ク陋巷ニ溷滅セシムルニ忍ヒンヤ。冀クハ広ク天下ノ同志ト共ニセン事ヲ（国恩ヲ若シ）鄙悞窃ニ願フ、或ハ恭クコレヲ官府ニ献（□）シ（其）医学館ノ蔵ト為シ、天下ノ医生ヲ訓導シタマフノ一助ニモ供セハ（ニ備ヒタマハハ）余死トモ朽ス。

大槻先生コレヲ聞テ大ニ文献カ志ヲ感シ、為メニ此事ヲ以テ学館列位ノ諸公ニ告ス、諸公相謀テコレヲ官ニ聞ス、遂ニ模骨ヲ学館ニ献備スル事ヲ許サル。先生速ニ其命ヲ以テ文献ニ大阪ニ伝フ。

文献命ヲ蒙リ感戴ノ至リニ堪ヘス以為ク我業ノ荣幸（ニシテ素心莫變焉）大ナルハナシ。乃盍漱東向シテ稽首遥拜シ、門人中山少仙ヲシテ模骨ヲ齎シテ東（下）行セシメコレニ拙著一部ヲ附シテ大槻先生ニ致ス。

請フ宜ク（献□□）是事ヲ謀リタマハシ、今幸ニ永ク医学ノ蔵トナルヘキ事ヲ得如シ教授諸公万一モ斯ニ取ル事アツテコレヲ以テ天下ノ医生ヲ訓導シタマヒ（へ）。

コレニ因テ廃ヲ起シ痾ヲ愈スノ微功ヲ奏スル事アラバ、文献カ積年ノ寸衷達スル所ナリ
文政二年己卯春正月

大阪

各務文献子徵謹識

資料⑤

釣玄四科全書卷之十一整骨篇（杏雨書屋藏本による）

「自敘」

骨骸者人身之幹各処位置百節連続所以坐臥行住也。若其機關有所脱失而不整理之則

四肢廢運軀臟器失官能、蓋諸臟器尽係着于也。而自外貌察内景亦必有標準焉。

整骨術余釣玄堂所以備四科也。上古邈矣、秦漢以來只論其内未聞整其外乃視其脱失機關者曰其臟令然多端術尽謬諸天賦有涯舛陋寡稽承譎踵謬幾千年于此矣。宋元始立其認未伝。本邦整骨家固不足論也。先師各務翁居恒憂之一日顧余慨然曰。先点檢真骨骸哉。於是相共併刀拾集於草野古墳之間一身計之二百四十有八骨度星霜都三回始得全備焉。就論其内以脩其治術而著整骨新書以載録骨図名敷療法裏布器械等公諸四方又使工人田中某者模刻骨骸以審視機関之理於是乎明如觀火可謂其業千古卓絶矣。既而有人以問於東都官命徵其所刻模骨遂献納諸躋寿館長鏑於秘府自非官医不得見無幾。師逝所謂人琴共凶矣。於此余再按旧骨扱工模之得工人池内某者。執刀絶世実当今之公輪子也。余施療之暇在側鑿視工。亦竭心力從事焉。閱年而初成開闢離合大小長短突起陷没剖割分析以便点檢至妙極工覽觀

会真余之喜可知也。近者集録新書中遺漏者及余積年所試驗之新術新論器械等以補其闕乃入門學整骨術者左新書右此篇而按撫模骨此則此術尽于此

皇和文政庚辰（三年）冬日

浪華

奥田 周道

拝撰併書

資料⑥

鈞玄四科全書卷之十一整骨篇（杏雨書屋藏本による）

「奉整骨術及木制人骨全形文」

蓋人身ハ造物主殊ニ無量ノ智巧ヲ逞フシ、斯ノ如キ形体ヲ造為シ、以テ百爾ノ機転運用ヲ為サシム。

若夫皮膚ハ固ヨリ形軀ノ端末ナリトイヘドモ少ク常ヲ失スル事有レバ輒チ其機転運用意ノ如クナル事能ハス。是時ニ当テ人誰カ速ニ是ヲ救療シテ其用ヲ全フスル事ヲ欲セザラン。是医方ノ因テ起ル所以ナリ、況ヤ骨殖ハ一身ノ本幹ニシテ内外諸器咸ク之ニ依頼シ筋膜之ヲ繫草連続シテ以テ運転屈伸各自ノ機用ヲ為ス事ヲ得セシム。然ルニ打撲閃挫墮墮跌仆ハ人ノ不意ニ出テ貴ト無ク賤トナク平常或ハ免ルル事能ハサル所ナリ。況ンヤ馬ヲ馳セ劍ヲ試ミ、或ハ非常軍陣鬪争ノ時ニ臨ムヨリシテ、民間奴隸重ヲ提ケ、堅ヲ破リ角力負担船脚車夫等ノ筋力ヲ勞役スル徒ニ至ル迄モ少ク之カ損傷ヲ被レハ、勇悍剛強ノ質トイヘドモ、乍其本力ヲ逞フスル事能ハス。投能曲芸ノ徒モ亦其能ヲ尽ス事ヲ得ベカラズ。

其憂外邪内回ノ疾病ト又何ノ異ナラン、故ニ之ヲ整理復白セシムルノ術上王公貴人ヨリ、下庶夫隸人ニ至ル迄豈一日モ闕ベケンヤ。医モ亦之ヲ実測シテ研究セスンハ有ヘカラス。

然ルニ古來漢土其医ニ乏シク其全説伝ラス。聞ク迄古ニ至テ整骨科ヲ立ツト其説果シテ如何ソヤ。其議スヘキ者半ニ居ル。

本邦モ亦進古以來民間ニ於テ整骨ヲ以テ其業ヲ世々ニスル者有リトイヘドモ、大率皆無學ノ俗士ニシテ徒ニ家技ヲ斬祕シ、師説ヲ守株シテ膠柱刻舟ノ比ナルヲ自ラ足レリトシ、人亦之ヲ許シ、未タ嘗テ一人モ憤ヲ発シ、其源ヲ究メ其本ヲ明カニスル者無キカ故ナリ。

実ニ慨歎スルニ堪タリ。方今天運日ニ闢ケ、良医輩出シ、各述作スル所アリ。其他ノ投モ亦完備巧妙ナラサルハ無シ。而ルニ唯リ此一科ニ於テ猶未其奥ヲ極ル者有ル事ヲ聞サルハ豈濟生一大缺事ナラサヤ。周道不肖少壯ヨリ、師授ノ在ル有テ深ク此術ニ心ヲ刻シ、多年思ヲ斯ニ若シメ、凡骨骸ニ係ル所ノ諸患尽ク救療セン事ヲ企テ、欲ス、然レドモ屢其術ヲ試ルニ容易ニ効ヲ収ル事能ハサル者ハ、彼脫臼ノ一症ナルヲ以テ、和漢従前ノ術ヲ遍ク採リ求ルニ皆唯拔伸ノ一法ニ止ルノミ。

竊ニ疑ラクハ此術精義ニ非ル事ヲ、只彼西洋医家ノ研究スル処未如何ト云事ヲ知ラス。

是本邦未タ其書ノ翻釈スル者ヲ見サレバナリ。是故ニ周道師ト心ヲ一ニシテ謀議スラク、善ク此科ヲ脩ント欲セバ、先真骨骸ニ就テ其本形ヲ熟識シ、其機関ヲ研究シ、其主用ヲ講明シテ而シテ後衆多ク現症ニ照シテ以テ的当ノ新術ヲ創意スルニ如クハ無シ。

爾後累年骨骸ヲ刑余ノ屍ニ取り、或ハ草野古墳ノ間ニ拾ヒテ終ニ幹支百骸初テ全ク集メ備ル事ヲ得タリ。

之ヲ算スルニ凡人身天然具有スル所ノ骨數總計二百四十有ハ、其實ヲ分テハ八種其関節ノ如キハ七十有ハ、其異常ヲ為ス者二十有四、之ヲ座右ニ備テ以テ模範トシ、日夜心ヲ潛メテ之ヲ構思スル事茲ニ又年アリ。

其部分異常ニ随テ各自ノ主用ヲ辨ジ、其常ニ本ツイテ其變ヲ推シ以テ症ニ臨ミ、治ヲ施ス事理筋法ヨリ初テ復曰ノ諸術ニ至ル迄モ、從前難治ト云モ不治ト云フ者十二ハ九ヲ起ス事ヲ得タリ。

其術タル天造ノ自然ニ悖ル所無キヲ以テ医ハ心力ヲ盡ス事少ク、病者ハ徒ラニ痛苦セシムルノ煩ナク、其收効ノ速ナルニ至テハ、從來諸法ノ能企及ブベキ所ニ非ズ。

是ニ於テ豁然トシテ覺悟スラク、古ヨリ伝ル所ノ拔伸ノ一法、果シテ其定規トスルニ足ラサル事ヲ而シテ竊ニ以為ク、周道力輩ノ固陋謬劣断々トシテ他ノ投ナキモ、独此術ニ於テハ自得發明スル処有ルニ似テ、実ニ和漢古今ノ人ニ愧ル事無シト。是他ナシ、全ク多年真骨骸ニ就テ辨明スルヲ以テナリ。

今ヨリノ後願ハクハ整骨科ヲ修ル者預メ先之ヲ講明研思シテ、其常ヲ究テ變ニ臨テ踟躕セサルヲ要務トセン事ヲ。然レドモ骨骸ハ不潔ノ者ニシテ、且容易ク得ベカラズ。

仮令偶糜骨ヲ拾ヒ得ルモ各部ノ連続順次ヲ失フ者ハ関節果シテ晚会スベカラズ、又且世医ニ遍クスベカラザル物ナルガ故ニ、周道ガ師各務文献匠工ヲシテ模骨ヲ造ラシム。

数年ニシテ業成ル、又文献、周道ガ亡父直行ト相謀テ整骨新書四卷ヲ著シテ、骨度各數、整理ノ術等ヲ録シテ已ニ世ニ公ニス。

爾後周道モ亦嘗テ模骨ヲ製造セン事ヲ欲シ、遍ク世ノ良工ヲ探リ求ム。天其意ヲ憐ムニ似テ偶爾トシテ其人ヲ得タリ、実ニ京撰ノ間ニ比類ナキ良工ナリ。之ヲシテ年來聚メ貯ル所ノ真骨骸ヲ授テ之ヲ模擬セシム。

周道日ニ其側ニ在テ之ヲ鑿視ス、工モ亦心力ヲ竭シテ此ニ従事シ凡テ二十余月ニシテ刻全ク成リヌ。其巧精妙宛然真ニ逼ル、試ニ真骨取テ其側ニ置クニ更ニ復辨スベカラズ。

而シテ其喜知ヌベシ。周道等數月ノ間此舉ニ奔走シ造次顛沛念々斯ニ在テ各自ニ精神ヲ勞費スル事筆舌ノ能尽スベキ所ニ非ズ。

試ニ其施療スル所ノ大略ヲ云フニ、古來世俗ノ筋骨損傷ト泛稱スル者三ツ、其一ツハ瘀血凝滯其一ツハ骨骸折傷、其一ツハ関節脫

失之瘀血凝滯、俗ニ之ヲ筋チガイト云。

是本骨ニ関係スル者ニ非ズトイヘドモ、其機関ノ便利ヲ失フニ至テハ、其状骨傷ニ似タリ。之ヲ救フノ術、前ニ所謂筋法ト称ス是ナリ。折傷ハ折枝ヲ再接合スルガ如ク、断口齟齬スル事無キトキハ愈テ後其折処ヲ失スルニ至ル者其法ヲ得タルナリ。

脱失ノ一症ハ左此科ノ関鍵タリ、其肯紫ヲ得テ整理スルニ非レバ立地ニ復故セシメ難シ。

況ヤ年月ヲ經過シテ治セザル者ハ助ルニ必器械ヲ施シ兼ルニ方藥ヲ用ルニ非レバ全効ヲ取ル事難シトス。又且脱臼ノ症タル一時損症ノ者ノミナラズ、或ハ生ナガラニシテ反附ノ者アリ、或ハ脚跗八字反ナル者アリ、或ハ手指鈎曲スル者アリ、或ハ産後、或ハ痛風、麻木、微毒、小兒胎毒、痘余毒等ノ諸症ヨリ變ジ來テ、某ノ毒某処凝結シ終ニ緊急、腫直漫腫頭結屈伸スル事能ハズ、或ハ弛緩軟弱ス、若其胸背ニ着ク時ハ龜胸龜背ト成リ、手部ノ機関ニ着ク時ハ運轉ノ作用ヲ廢シ、脚部ニ着クトキハ輕ハ跛疾トナリ、重キハ瘻トナル。

此等ノ症独リ方藥ノミヲ以テ治スル事能ハズ、必整骨術ヲ兼施シテ奇効ヲ取ル者十中八・九ニ居ス。否サレバ終身不具ノ廢人トナル、世譽テ然リ、博濟ニ志深キ者宜ク茲ニ意ヲ留メザルベケンヤ。故ニ周道等ガ整骨術ヲ修ルニ於テ、多年真骨骸ニ就テ本形ヲ辨識スルニ眼勉トシテ以テ此模骨ノ挙有ル所以ナリ。

前ニ文献ガ模刻スル所ノ人骨全形ハ既ニ東武官医ノ諸公之ヲ官ニ聞シメ躋壽館ニ献納セシム。後ニ模刻スル所ノ者ハ周道ガ家ニ収ム。今ヤ文献已ニ没シ、其徒弟衆多散在ストイヘドモ、文献ガ微意ヲ頗ル伝ヘ得ル処ノ者ハ固陋ナリトイヘドモ、實ニ周道一人ナリ。

今ニ於テ不幸ニシテ木ニ就カハ周道ガ友弟ノ其人ニ乏キ、誰カ憐テ其意ヲ継ギ之ヲ後世ニ伝ル者アラシヤ。

今茲、吉雄俊藏周道ガ旧交在ル有ルヲ以テノ故ニ、其久年刻苦精神ヲ尽ス所ノ數術數歳ノ後或ハ必廢絶セン事ヲ憐ミ之ヲ其医官ノ長浅井氏ニ謀ル。先生其言ヲ是ナリトシテ又且本藩ノ一科ニ備ン事ヲ聞ス、遂ニ其術ト共模骨トヲ献備セン事ヲ許サル。

周道辱ク台命ヲ蒙リ感戴ノ至リニ堪ヘズ、我業ノ荣幸之ヨリ大イナルハ無シト、乃チ退テ師父ノ靈ニ告テ、今茲來テ模骨一具、整骨新書全部玲瓏図一筐、自著鈎玄四科全書中整骨篇二卷、筋骨療治目次一卷、泰ク之ヲ医学館ニ献備ス。其手術ノ如キハ医官中沢專藏ニ伝授ス。是亦辱ク台命ヲ蒙レバナリ。

幸ニシテ願クハ此術此模骨ト長ク大藩ニ留リ伝リテ、医官諸公万カ一モ取ル事有テ濟生ノ一助ト為テ廢ヲ起シ病ヲ癒スノ微効ヲ奏スル事有ラバ、周道等ガ積年ノ寸草達スル所以也

文政壬午(五) 歳十月二十三日

大阪

奥田万里之進周道恭録上

参考文献

- ① 原田謙太郎…星野良悦の身幹儀（木製人体骨盤）作製について、日本医史学雑誌一三三—一三四—一三五 昭和十九年
- ② 石田 憲吾…星野良悦、広島医学、十卷一号、三五頁、昭和三十三年
- ③ 呉 秀三・富士川 游…木骨考、明治二十六年
- ④ 小川 鼎三…明治前日本解剖学史（明治前日本医学史第一卷）昭和三十年
- ⑤ 森潤三郎…多紀氏の事蹟、日本医史学会、昭和八年
- ⑥ 齋藤 月嶺…武江年表
- ⑦ 各務 文献…模骨呈案、文政二年（杏雨書屋蔵）
- ⑧ 奥田 周道…鈞玄四科全書卷之十一整骨編 安政五年藤浪龍筆写本（杏雨書屋蔵）
- ⑨ 岡田啓・野口道直…尾張名所図会…弘化元年
- ⑩ 山本 四郎…新宮涼庭、ミネルバ書房 昭和四十三年
- ⑪ 青木 大輔…宮城県衛生史（宮城県史六）昭和三十五年
- ⑫ 蒲原 宏…日本の近代整形外科が成り立つまで（七）整形外科、十三卷八号、昭和三十七年
- ⑬ 中野 操…皇国医事大年表、南江堂、昭和十七年
- ⑭ 大槻 玄幹…人様木骨縁起（原田氏論文資料による）
- ⑮ 不求堂雜記中「馭醫齋入門日誌」（原田氏論文資料による）
- ⑯ 新宮涼庭…「身幹儀説」

（県立ガンセンター新潟病院整形外科部長）
新潟大学医学部講師

加賀藩最初の人体解剖

酒 井 恒

日本医学雑誌・第十七卷
第二号・昭和四十六年六月

昭和四十六年三月二十五日受付

加賀藩最初の人体解剖は明治三年（一八七〇）に行なわれた。その記録は少なく、わずかに松田壬作の手記があるだけである。

松田壬作の人体解剖に関する手記は二通の存在が確認されている。その一は金子治郎により紹介されている。すなわち、「……第一回は明治三年七月で、一人の贓金犯が斬に処せられたのであった。之は松田壬作翁の手記にかかる記録があり、此処では蛇足ではあるが事実保存の為原文の俣を左に、

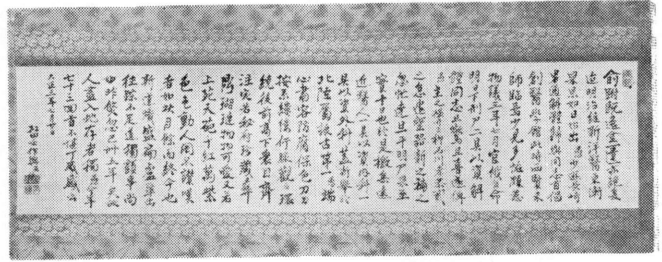
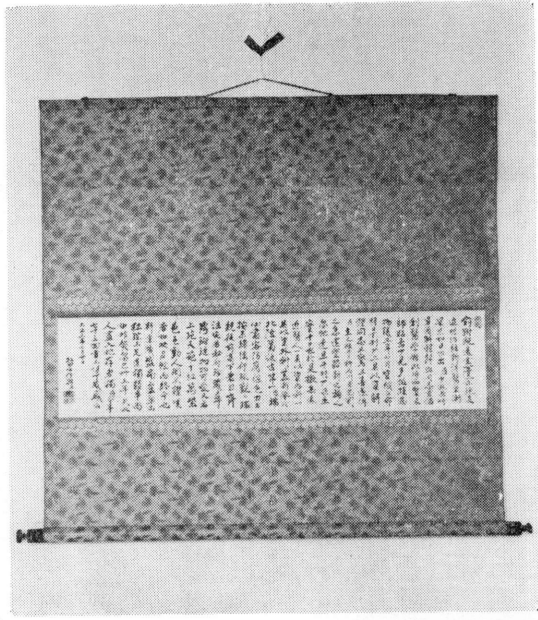
明治三年秋老拙主任トシテ金沢医学館内ニ於テ始メテ人体二個ヲ解剖セル大略ヲ記スヘシ

明治三年秋（月日ハ忘レタリ）突然金沢断獄ヨリ明日所刑人ノ死体二個解剖用トシテ下渡スヘク通知シ来タ依テ医学館ニテハ意外ナ出来事ニシテ先老拙ニ向ッテ俄ニ解剖主任ヲ命シ横井三柳石川孝恭ニ助手ヲ命ス（外国教師未来任前年ノ事ユヘ解剖学ヲ教授セル学生ナシ只市内等一般開業医師ニ見学セシムル為ナリ）何分俄ノ事故一夜ノ中ニ不完全ナカラ解剖室及台等ヲ仮設ス翌朝死体二個ヲ持来テ不取敢先ツ防腐処置ヲ為シテ一体ハフレス氏系統記載解剖ヲ為スヘク動脈管へ赤色膠質ヲ注入シ静脈管ニハ青色膠質ヲ注入シタ後先胸部ヨリ呼吸道一般ヲ教示シ次ニ腹部ヲ開キテ内臓等ヲ示シ漸次泌尿道等脳脊髓系統筋系統血管系諸器骨膜骨等ニ及ンテ示シ他ノ一体ハ「アンピタシー」「レセクシー」等ヨリ漸次外科博士ホンフレ^イ氏ノ外科術大要ノ手術ヲ施術シテ示セリ

右両体ニ付テ殆ント一ヶ月余ニ及ヘリ（日々熱心ニ參觀見学セル人々ニハ方今全ク世ヲ去リテ老拙ノ記憶ニテハ只タ独り浅井協氏未タ生存シ居ラルト思考ス後浅井氏ニ此コトヲ問ヘハ慥ニ七月ナリト云フ之ニ故アルコトナリ旧藩七月十二月ハ所刑日ナリ）

因に曰ふ、此松田翁は十年ほど前に物故されたが、浅井翁は八十八歳で尚豊録存世である。」と記されている。この手記が現在どこに保存されているかは不詳である。

第一、二図 松田壬作の手記。金沢大学医学図書館蔵。



他の一は筆者が金沢大学医学図書館書庫の一隅においてたまたま発見したもので、巻き紙に書かれ、表装された一幅の軸である。本文は二六九字よりなる白文で、松田壬作七十三歳の折り書かれたものである。その全文を左に記す。

愈附既遥金匱亦絶爰治明治維新洋医東漸杲杲如日始出愚少遊長崎略通解体帰与同志首倡創医学館此時西賢未師臨焉少見多怵頗惹物議三年七月官俄有命明日下刑尸二具以資解体同志且驚且喜遂俾愚主之横井三柳石川孝恭武之急遽整器新之補之匆忙達且平明尸果至衷十日也於是檄集遠近医人一具以資内科一具以資外科蓋斯举於北陸属振古第一愚端心肃容防腐保色刀刀按系縷縷行脈觀者

環繞後前高下衆目齊注宛若秘府珍藏彛鼎瑚璉物物可愛又若上苑天葩千紅万紫色色動人罔不讚嘆者如此月余而終今也斯道熾盛扁盧輩出往踪不足道独顧事尚如昨倏忽已卅五年矣故人尽入地存者独愚今年七十三回首不堪丁威感云

大正三年七月廿日

松田壬作與并識

両手記のうち、後者はその日付が明らかであるが、前者のそれは全く不明である。しかし両手記の内容を比較し、前者

は大正三年以前に書かれたものと判断される。すなわち文中に「……明治三年秋（月日ハ忘レタリ）……」と記し、文末に「……後浅井氏ニ此コトヲ問ヘハ慥ニ七月ナリト云フ……」とあることより、初めに手記を書いた時には月日を明らかにすることができず、のちに浅井氏に質問し、その月日を確認して文末に（ ）内に追加したのである。したがって大正三年七月廿日付の手記は解剖実施の月日を明らかにして書くことができたと考えられる。

次に両手記の内容についていささか触れてみることにする。

この時解剖された刑死体が贖金犯であったことは松田壬作の手記からは知ることができない。金子治郎が「……二人の贖金犯が斬に処せられたのであった。……」と記しているが、引用した史料は不詳であり、石川^二県史、加賀^三藩史料にもその記録は全くみられない。藩政時代に贖金犯が斬刑に処せられたことは、^四検使方勤方帳の「死骸咎方」の項に

一 賊并ニ謀リ贖金等

の一条があり、また石川^二県史の司法の項に「斬刑を科せらるるものは、窃盜、取逃、謀書、謀言、貨幣贗造、殺人等、……」とあり、これらの記載により明らかである。

藩より医学館への死体引渡しについての記録は未だ見あたらない。刑死体を解剖のために下付することについての医学館より藩に対する願書の記録も、死体解剖についての記録も見あたらないのは、おそらく人体解剖が公式には認められていなかったからではなからうか。公式のものであれば、加賀藩最初の人体解剖であり、前述の手記に示されるように一ヶ月余を要したものであれば、当然解剖図なり記録なりが存在するはずであり、石川^七県史、または加賀藩史料に何等かの記録が残されるべきであると思う。また黒川^五良安、松田^六壬作、石川^七孝恭の由緒書の中にも記録されるべきものであると思われるが、全く記載されていない。従って非公式のものであり、記録その他公式のものは一切許されず、後になって松田壬作が懐旧談として記録したものと思われる。ちなみに患部^八解剖が法律により許可されたのは明治九年七月廿九日内務省達により、また全身^九解剖は明治十八年七月廿一日内務省達により許可されたのである。

この時解剖に従事したのは、松田壬作、横井三柳、石川孝恭の三氏であった。由緒書より、松田壬作は当時二十八歳、石川孝恭は二十四歳であったことが判明する。横井三柳の由緒書は見あたらず、その年令は不詳である。

以上三氏の人体解剖学についての知識および蘭書読解の可否をみると、松田壬作はその由緒書によれば、「…慶応元年（二八六五）七月為医学修行肥前国長崎表江罷越……明治二年（一八六九）帰国仕候明治三年三月より当国於医学館文学訓導分課薬局監察解部掛文学四等教師迄相勤罷在申候明治三年七月士族ニ被指加隠居等一家ニ不相立者一統給禄御廃止相成父家族ニ罷成申候明治五年……」とあり、石川孝恭は長崎には出張していないが、その由緒書によれば、「……同（明治）三年（二八七〇）二月医学訓導被命製造人体并書籍器械方相勤同年三月医学館監正被命寄宿仕相勤罷在候処同年七月二日今般御改正ニ付士族被指加医学館監正等如元相勤罷在候し処同年十一月……」とあり、いずれも医学館の指導者であり、しかも人体解剖については触れていない。横井三柳の由緒書は見あたらないが、黒川良安の由緒書によれば、明治元年より同二年まで黒川良安と共に長崎に出張し、製造人体の伝習を受けている。帰藩後製造人体解剖学について、石川孝恭に詳しく伝授したものとと思われる。その結果、石川孝恭の由緒書に「……同三年二月医学訓導被命製造人体并書籍器械方相勤……」とあり、石川県医学沿革記の「明治四年ヨリ同十七年迄ノ間教鞭ヲ執シ者ノ概略」の中にも「石川孝恭 解剖学、外科学……」とあるごとく、人体解剖学についてのかなり詳しい知識を有していたものと思われる。

また蘭書読解は充分可能であったと考えられる。すなわち以上三氏は蘭医黒川良安の門下であり、そのうち松田壬作、横井三柳は長崎に出張し、医学修行およびキュンストレーキ購入に関係している。また後述のごとく死体に防腐注入操作を実施していることより、蘭書読解には精通していたものと思われる。

したがって以上三氏は人体解剖を実施するのにふさわしい人物であった。医学館の当時の職員はいずれも人体解剖未経験者であった。したがって刑死体下付の突然の通知による驚きが相当に大きかったことが松田壬作の大正三年七月の手記より察せられる。さっそく死体解剖の担当者として前記三氏が任命され

た。加賀藩最初の人体解剖であり、しかも未経験者によるものであるにもかかわらず防腐処置を施していることより、かなり具体的な相談がなされ、またそれ以前に蘭書を詳しく読んでいたことが察せられる（後述）。

この時急造仮設された解剖室および解剖台については不詳である。解剖に使用した器械類は、前年黒川良安、横井三柳が長崎よりキュンストレーキとともに持ち帰った医療器械をも使用したものとと思われる。しかもそれらの器械類の使用法はアガーツの外科手術書により知ることができたはずである。また使用した薬品については後述する。

手記の中にそれぞれ「……不取敢先ツ防腐処置ヲ為シテ……」、「……防腐……」とある防腐処置は如何なるものであったか。医学館の職員がこの術式を如何にして知ったかを調べるために、筆者は金沢大学医学図書館所蔵の一八七〇年以前の史料を調べ、フレスの解剖書によるものと判断した。同書五三四頁脚註に防腐注入法が記されている。人体解剖が全く未経験なことであつたので、人体を詳しく解剖するために防腐処置を試みた事実より判断し、同書の脚註にある防腐処置の術式を既に知っていたと推測される。したがって少なくとも同書はかなり詳しく読まれていたものと考えられる。しかも一八六六年発行の書であることも考慮すれば、同書を購入してからの期間も短いので、蘭書読解は充分な域に達していたと判断される。

フレスの解剖書の脚註に記載されている薬品が当時存在していたか否かを知るために和蘭字彙^{十三}により調べると、

wit was

白蠟

terpentijnolie z. m. olie van terpentijn

「テルペンティン」ノ油

kaars z. r. keers, of kaers

蠟燭

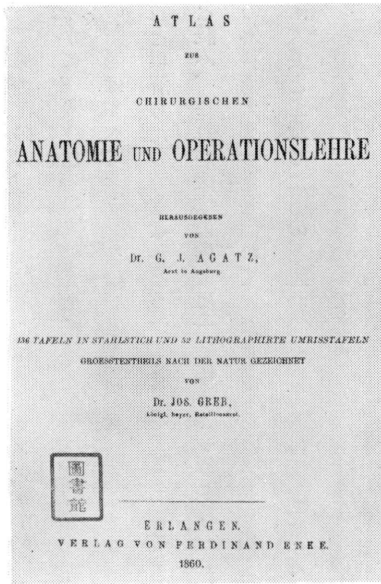
lijnolie, zie lijnzaadolie z. r.

荳油

vermijloen, z. g. zekene schoone roode verwe

朱

とあり、いずれも当時わが国に存在していたと考えられる。



手記の中に「……動脈管へ赤色膠質ヲ注入シ靜脈管ニハ青色膠質ヲ注入シタ後……」とある。赤色色素は朱であるが、青色色素は何であつたかは不詳である。^{十二} フレスの解剖書には

……, in beide gevallen met vermijoen tot kleurstof, te bezigen.

とあり、朱の使用のみを述べている。^{十四} 鈴木文太郎は群青を、^{十五} 石川喜直はウルトラマリンを青色色素として使用していること、および群青、^{十六} 紺青は江戸時代中期には既に日本画において着色材料として使用されていたこともあわせ考えると、この時使用された青色色素は群青、あるいは紺青であつたと推察される。

注入処置を施すに当り、あらためて血管をさがす必要もなく、頸動靜脈から薬液の注入をすれば注入操作もさして困難ではなかつたものと思われる。すなわち頸動靜脈は比較的太い血管であり、また^{十七} 斬刑死体の切り口の様子はボンペが驚異の目をみはつた程であつたことから容易に考えられることである。

^{十一} 第三圖 アガーツの外科手術書の扉。金沢大学医学図書館蔵。

松田壬作の手記にみられる参考図書のうちフレスの解剖書は明らかであるが、ホンフレイ氏の外科術大要とは何か。金沢大学医学図書館には現在フレスの解剖書五冊の存在が確認されているが、ホンフレイ氏の外科術大要なる書は見いだしえなかつた。筆者はさらに医学図書館の蔵書カード、図書原簿を調べたが、本書を見いだすことはできなかった。そこで同書庫において一八七〇年以前の外来古医書をたんねんに調べ、ついに発見することができた。^{十一} 本書の背には「アガーツ 外科解剖及手術書」と記され、ホンフレイの名は見られない。本書はドイツ語で書かれ、その扉には写真の様に印刷されている。当時医学館の医師は全員黒川門

下であったので、外国語はもっぱらオランダ語が用いられていたものと思われる。医学館開設に参加した人物のうち、明らかにドイツ語を読解しえたのは大熊^{十八}春吉^{十九}であり、鈴木儀六もドイツ語をかなり解した様であるが、医学館のその他の医師はすべてオランダ語を学んでいた。そこで本書の著者（編集者）と図譜画家とを取り違えて Dr. Jos. GREB を著者と誤解したのではなからうか。そこで von Dr. Jos. GREB をオランダ語風の発音により初めは「ホン フレープ」と読み、これが医学館内では一般に「ホンフレ」^{二十}と呼ばれ、G. J. AGATZ の名は使用されず、もっぱら「ホンフレ」の外科術大要」と呼ばれていたと考えられる。松田壬作も医学館内の一般的な呼称に従い、手記の中でホンフレの外科術大要と記載したものである。本書は図譜であるので、当時ドイツ語を読解することができなかったとしても、本書を利用することはできたのである。しかも本書の中のドイツ語用語をオランダ語風に発音していたことが手記の中にも認められる。すなわち「アンピタシー」、「レセクシー」の用語は本書の中ではそれぞれ Amputation, Resection と記載されている。これをオランダ語に訳せば amputatie (アムピタシー)、wegnijding (ヴェグスネーディング) であるはずである。すなわち、「レセクシー」なるオランダ語はないが、Resection をオランダ語風に発音し「レセクシー」と手記に書いたものと思われ、医学館ではドイツ語の書を使用しながら用語はもっぱらオランダ語を用いていたので、von Dr. Jos. GREB をホンフレと読んだものと判断される。ちなみに当時医学館には^{二十一}独蘭辞典が所蔵されていたので、ドイツ語はオランダ語に翻訳されたのち日本語に翻訳されたものと判断される。ただし前記両語は本辞典および和蘭字彙のいずれにも記載されていない。当時、外国語は可及的日本語に翻訳されるのが通例であり、翻訳しえないときはその発音に従って漢字をあて、あるいはかたかなで書かれた。また翻訳しえないドイツ語はオランダ語に翻訳し、あるいはオランダ語風に発音し、そのまま使用されていたものと思われる。

解剖の見学者が一般開業医であったことは両手記の文面より明らかであるが、その多くは書物により人体の構造を知っていたに過ぎなかった。すなわち加賀藩のキュンストレーキが金沢に到来したのが前年の明治二年であったので、それ以

前は模型すらも存在しなかったのである。またキュンストレーキの分解、組立についての説明ないしは解説をうけた者は、当時医学館に在籍した少数の職員のみであった。そこで人体の内部構造を初めて目の前に眺めた時は、見学者のみならず、術者も驚異の目をみはつたものと思われる。その様子は第二の手記の中に述べられている。すなわちその驚きと喜び、ならびに人体の内部構造の多彩な色に目をみはつた様子がその行間ににじみ出ており、「秘府珍藏彝鼎瑚璉物物」あるいは「上苑天葩千紅万紫色色」の言葉によつても伺われる。

解剖の順序は文中に明らかである。安政六年（一八五九）九月九日より三日間にわたつて行なわれた長崎におけるポンベの解剖は、第一日は腹部内臓、第二日は神経、血管、第三日は脳を示説した。したがつて加賀藩の人体解剖は必ずしもポンベの術式の踏襲ではなく、解剖しやすい順に解剖を進めたようである。また解剖には一ヶ月余を要していることから、前記両書を参照しつつ、かなり詳しい解剖を行なつたものであり、解剖図としては両書の図を参考にしたものと考えられる。

見学者の一人である浅井協氏は、^{二十三}、医師並薬剤師名簿によれば弘化四年（一八四七）三月生であり、当時二十三歳であった。^{二十三}、明治二十六年（一八九三）には既に金沢市浅野新町で内科を開業していた。^{二十四}、翌明治二十七年（一八九四）一月には金沢市横安江町七十七番地に居住し、^{二十五}、明治四十三年（一九一〇）の金沢医学会の名簿にも同住所にその名をとどめている。

稿の終りに臨み、本稿の御校閲、御助言を賜わつた小川鼎三先生に、また史料、文献に関して御教示下さつた稲坂謙三、倉知与志、津田進三、中尾喜保、芦塚隆、五十嵐有行の諸氏に深く感謝の意を表する次第であります。

参考史料、文献

- 一、金子 治郎…解剖に就ての懐旧 犯罪学雑誌 第三卷 二二〇—二二三、三二二—三二四 昭和五年（一九三〇）。
- 二、石川県史…第三編 四六一—七三 昭和十五年（一九四〇）再版 石川県。

- 三、加賀藩史料：藩末篇 上卷 下卷 昭和三十三年（一九五八）前田育徳会。
- 四、検使方勤方帳（写本）（筆者、年月不認）。
- 五、黒川 良安：先祖由緒并一類附帳 明治三年（一八七〇）十月。
- 六、松田 壬作：先祖由緒并一類附帳 明治六年（一八七三）七月。
- 七、石川 孝恭：先祖由緒并一類附帳 明治三年（一八七〇）十月。
- 八、後藤新平閣：飯尾次郎編纂 帝國衛生法令 六〇七—六〇八 明治二十九年（一八九六）丸善株式会社書店 東京。
- 九、同右 六〇八。
- 十、石川県医学治革記（手記）（筆者、年月不詳）。
- 十一、G. J. AGALTZ: Atlas zur chirurgischen Anatomie und Operationslehre. Ferdinand Enke Verlag, Erlangen, 1860.
- 十二、J. A. FLEIS: Handleiding tot stelselmatig beschrijvende Ontleedkunde van den mensch. Tweede druk, B. Dekema, Utrecht, 1866.
- 十三、桂川 甫周：和蘭字彙 安政二年（一八五五）山城屋佐兵衛 日本橋。
- 十四、鈴木文太郎：解剖術式手訣 四三—四九 明治四十二年（一九〇二）蒼虬堂書店 東京。
- 十五、石川 喜直：人体解剖実習法 一〇八—一一一 明治四十二年（一九〇二）吐鳳堂書店 東京。
- 十六、小口 八郎：日本画の着色材料に関する科学的研究 東京芸術大学美術学部紀要 第五号 第一部 二七—四五 昭和四十四年（一九六九）および中尾喜保（私信）。
- 十七、古賀十二郎 西洋医学伝来史 三〇四—三〇七 昭和十七年（一九四二）日新書院 東京。
- 十八、田中梅吉：総合詳説日独言語文化交流史大年表 五〇八—五一四 昭和四十三年（一九六八）三修社 東京。
- 十九、津田進三氏の御教示による。
- 二十、芦塚 隆：私信。
- 二十一、N. S. CALISCH: Neues Deutsch-Holländisches Wörterbuch. 2. Auflage, K. Fuhri, Haag, 1855.
- 二十二、小川 鼎三：明治前日本解剖学史 日本学士院編 明治前日本医学史 第一卷 二二六—二二九 一九五五 日本学術振興会 東京および小川鼎三 医学の歴史 一六六—一七〇 昭和三十九年（一九六四）中央公論社 東京。
- 二十三、石川県衛生第八次年報附録 医師並薬剤師名簿 十一 明治二十六年（一八九三）二月 石川県。

二十四、會員交名簿 医会第六部 明治二十七年（一八九四）一月。
二十五、金沢医学會會報 第一号 九十二 金沢医学會會員名簿（明治四十三年一月三十一日調）明治四十三年（一九一〇）三月。

（金沢大学医学部解剖学第二講座）

「鶴齋遺稿」について (一)

大 鳥 蘭 三 郎

杉田玄白が学究人としてすぐれ、また臨床医としてもきわめて多忙であったことは比較的よく知られているが、趣味人としてもまた相当造詣が深かった。このことは玄白の日記、随筆、その他によってうかがうことができるが、私は北里医学図書館所蔵の「鶴齋遺稿」と題する二冊の写本によって玄白が詠んだ詩や和歌を紹介し、できればそれ等の一つ一つについて注解を加えてみたいと思う。

○
もっともこの二冊の写本のうち、題簽の下部に『詩之二』と記されている方はすでに『古名医^末鶴齋詩集 其一。杉田玄白先生鶴齋遺稿』と題して大正三年一月から八月に発行された「刀圭新報」に発表され、また昭和十九年に刊行された「杉田玄白全集」第一巻に収載されている「鶴齋日録」にその大部分が公表されている。

○
後述する理由により「鶴齋遺稿詩之二」の方が「鶴齋遺稿歌之一」よりも先きに来たものであると考えられるので、順序として詩編の方を先きにあげることにする。

「鶴齋遺稿詩之二」は和綴本淡青表紙二二・五×一五・五。四十三葉から成り、一葉は枠付きの十行の罫があり、版心に

は惜陰齋と刷られている。各詩篇の冒頭には大多数の場合題がつけられていて、それによって数えると全部で百六十八題が収められている。但し同一題で何首も詠んでいることが多い。

これ等のものはいつ頃詠まれたものであろうか。この詮索の手懸りとなったものは、第七十題に当るものに『寛政三九月三日海笑大至因賦』とある記載であった。手許にある「杉田玄白全集」に載っている『鶴齋日録』について見るとこの詩は寛政三年辛亥九月四日に詠まれたものであることが分明する。これを手懸りとして調べてみると、この詩の前後に詠まれて『鶴齋日録』にのせられているものは殆んどすべて「鶴齋遺稿詩之二」の中に見える。結局、「鶴齋遺稿詩之二」の冒頭にある『生隱亭謾興五首』は天明七年（一七八七）十月十七日に詠んだもので、『遺稿』にのっている最後の詩篇八月「既望投清曠樓以詩代記」は「日録」の文化元年（一八〇四）九月六日の項に記してある。

ただ、「日録」にのっている最後の詩篇『帰雁』は同書の文化二年三月四日の項に記してあり、「遺稿」記載の最終詩篇と「日録」に収載の最終の詩篇とは必ずしも一致しない。これは一体どういふことなのか、その辺のことは未考である。

○
つぎに一首づつ掲げる。

生隱亭謾興五首。(1)

池亭多_三樂事。豐興在_一園林。霜葉隨_レ籬滿。寒花映_レ水深。

科頭時散步。擁_レ膝或微吟。似_レ出_二風塵外。偏能生_三隱心。

愛此林泉裡。蕭然一草亭。彈_レ琴人莫_レ聽。伏_レ枕如_レ醒。嶽

雪当_レ窻白。江天入_レ戸青。興來供_二濁酒。応_レ勝_三五侯鯖。

自棄青雲志。偏憐物外情。虛名人所_レ惡。多病俗相輕。止_レ

酒交遊改。耽書感慨生。後園堪養拙。一任鎖柴荆。
辜負彈冠約。心中已覺閑。偶然消白日。豈別買青山。附
驥非吾願。登竜無意攀。浮名終可逃。唯恥住人間。
人間長閔尽。漸与世情違。病癩常高枕。倦遊未扞衣。
故旧交多變。行藏老益非。何年掛冠去。深掩白雲扉。
右の五首は「日録」の天明七年十月十七日の項にのせてある。因に「日録」の第一句中の『幽興』は『豊興』、『斜頭』
は『科頭』である。

○

賀遠州峨山翁七十寿 (2)

君家高倚上池隈。喜客相逢興輒催。菜圃供餐三秀草。寿
筵頻醉九霞杯。河流水暖天竜下。巖壑雲晴靈鳳來。借問桑
田為海日。仙遊何所且徘徊。

『日録』の同年十月廿三日の項に記載されている。遠州峨山翁は未考。因に『日録』には『寿遠州磯山翁七十』とあり、
『磯山』は『峨山』の誤り、欠字の箇所は『上』をいれる。

生隱亭即事 (3)

老來常早起。岸幘歩庭陰。烟靄含寒水。朝陽上樹林。潛
魚知水薄。乾草見霜深。綰因幽意愜。爽然生隱心。

『日録』同年十月廿八日の項に記してある。玄白のこの頃の日常、心境を詠んだもの。

○
賦_ミ得_ル君恩如_ニ雨露_ニ奉_ニ村山君_一 (4)

君恩如_ニ雨露_ニ。此語尤信然。請君不_ニ忘却_一。応_レ不_レ下_ニ先賢_一。

『日録』同年十一月七日の項に記されている。村山君は未考。

鉄如意銘 (5)

老驥伏_レ櫪。志有_ニ千里_一。烈士暮年。壯心不_レ止。每对_ニ唾壺_一。
感嘆頻撫。

『日録』同年同月廿二日の項に収む。

蒼松篇賀_ニ糟子梁六十一_一 (6)

蒼松千尺古。庭際緑盈々。勁節凌_レ霜固。秀姿含_レ氣清。年寒
無_ニ改色_一。風過有_ニ余声_一。寿席君看取、偏依雨露盛。

『日録』同年同月廿五日の項に収む。糟子梁は未考。因に『日録』に『疊々』とあるのは『盈々』の誤り。

○
漫作 (7)

凶年已飽食。寒夜且暖衣。難忘主恩厚。子孫其無_レ違。

『日録』同年十二月八日の項に収む。

偶作 (8)

天子不_レ得_レ臣。諸侯不_レ得_レ友。人生正可_レ然。何則論_二身後_一。

『日録』同年同月九日の項に収載。

○

悼内作 (9)

噫吁汝是糟糠妻。事我举案与眉齐。初来謹慎終不_レ改。十有六年能雙栖。何事一朝作_二沈痾_一。千百余日伏枕過。可_レ憐半死歛娛少。可_レ憐一身憂苦多。大姊小妹持凡杖。相慰相助聊為_レ養。時对_二前庭_一看_二花開_一。纔出_二後園_一望_二月朗_一。前庭後園風雨浸。忽歸_二夜台_一長蕭森。匣中書草余_二手沢_一。牀頭針線思_二容音_一。大姊解_レ情吞_レ声哭。小妹覺眠悞探_レ衾。老夫对_レ之兩難_レ忍。相哀相悲淚不_レ禁。起向_二空房_一祝_二無事_一。強唱当日白頭吟。

『日録』天明八年二月十三日の項に載っている。この日玄白は宿直であった。そのつれづれなるままに亡き妻トエを悼む詩を詠んだのであろう。玄白の妻とゑはこの年一月二十日の六つ時頃四十三歳で死んだ。玄白との結婚生活は十六年、とゑは三年余り病床にあって没したことがこの詩によって分る。尚『日録』に所載のこの詩篇中の欠字の所は『举』であり、十三句目の『侵』は『浸』、十八句目の『誤』は『悞』、二十句目の『哀々恋々』は『相哀相悲』、二十一句目の『慨』は『祝』である。

○ 答糟子梁 (10)

親朋有_二贈詩。句々成_二感傷。反顧少壯時。同舍且並_レ牀。焚_レ
魚筋_二醴酒。説_レ心一尽_レ觴。中似胡与越。官跡有_二殊方。日月
漸代謝。復幸非_二參商。交情雖_レ無_レ異。互驚雙鬢霜。年命元
已定。豈結憂中腸。名利終可_レ廢。富貴難_レ為_レ常。君遂采薇
志。相隨隱_二首陽。

○ 『日録』同年四月十六日の項に載っている。『日録』には『答頼子果竜云々』と題記にあるが、『遺稿』に記されている所とは異なる。また『日録』には第一句が欠けている。『日録』中の第一句中の欠字は『成』、第六句中の欠字は『越』、第七句中の欠字は『跡』、第九句中の欠字は『非』である。

○ 盆中植_二三浦松

雖松纔寸余。移從_二三浦_一得。不_レ関白雪高。聊含芙蓉色。

『日録』の同年六日七日の項に見える。『日録』中の第二句の『三保』は『三浦』である。

○ 玉川作 (12)

夏雲遙接玉川流。水緑砂明空翠浮。兩岸蕭条両三戸。能遣_二

吾儕_一意愈幽。

この詩篇は『日録』には載っていない。

○
中秋公宴 (13)

高台風雨氣雄哉。無_レ謂中秋雲不_レ開。何恨月明天上晴。主
恩時賜夜光杯。

『日録』同年八月十五日の項に見える。『日録』中には『席上作』と題記されている。
品川舟行作 (14)

細雨無声秋水寒。扁舟遙上暮雲端。江村山閣連_レ窓出。兩岸
風光次第看。

『日録』同年同月廿一日の項に見える。『日録』中の第三句中の『山容』は『山閣』。
聞雁 (15)

空齋曉不_レ眠。擁_レ褐對_二殘燈_一。隔_レ戸聞_二過雁_一。凄然嘆_二暮年_一。
『日録』同年同月卅日の項に見える。『日録』中の題記は『鴻雁來』とある。

○

このつぎに『遺稿』には大槻玄沢が故郷へ歸るのを送る長詩が載っているが、『日録』には見えていない。

送_二大子煥婦_一看_二一関_一 (16)

奥羽兩州半_二天下_一。嶮峻之山千里野。河海無_二処不_二相通_一。城
邑豪族連_二大廈_一。聞道人物出_二於茲_一。就中卓犖知是誰。磬井

河辺大子煥。通我從遊年幾福。日居月諸將ニ五歲。朝論ニ太
玄ニ夕問レ奇。々字伝得出レ藍器。英名早成聞ニ一時。諸侯邸
第縉紳宅。相迎相逢日追隨。問汝何為故郷婦。汝云桑梓不
敢違。高堂雙親今已老。婦省欲レ裁五彩衣。正知彩衣兼昼
錦。々々人稱古來稀。此日臨レ別我何説。丈夫処レ世須ニ雄
飛。自レ今但待趨レ庭後。再遊ニ東都ニ倍ニ光輝。

「磐水年譜」によれば天明七年秋に玄沢は帰郷しているので、玄白のこの詩はこの時に詠まれたものか。「日録」の天明七年九月廿一日の項に『大槻玄沢発足』との記事がある。この詩と関連があると考えられる。

○

偶作 (17)

空齋何処送ニ鐘声。眠覚凄然奈ニ老生。耳熱瘡痒再難レ寐。東
窓頻窺待ニ天明。

『日録』の天明八年九月十日の項にある。『日録』の躰は『空齋』、はじめの欠字二字は『鐘声』、あとの欠字二字は『頻窺』である。

本莊作 (18)

寒雨蕭条一望遥。乘レ閑行過ニ第三橋。丹楓翠柏蔭ニ江水。詩
就応レ逢隱者招。

『日録』の同年十月二十一日の項にある。

屈子業旧居有書齋曾約ニ与余ニ詩以促之 (19)

白雲君厭去。書屋鎖幽哉。懸_レ檻蜘蛛下。浸_レ窻蝙蝠回。苔

榜_三徑_二滿。塵樓_三四隣_二堆。早使_三樁_二兄住。長無_三猿鶴_二哀。

『日録』の同年十一月廿八日の項にある。『日録』の第四句の『侵』は『浸』。

○

早春雪 (20)

茅樓雨雪望漫々。倚_レ檻披裘鶴筆寒。春動瑞花開_二樹抄_一。風

休白雁下_二江干_一。老來久廢剡溪興。病起叩誇鄙調難。世上紛

紛紛不_レ菅。新年高臥擬_二袁安_一。

『日録』の酉年(寛政元年)一月六日の項にある。『日録』の第八句の『哀』は『袁』。

又 (21)

草堂高臥憂為_レ漫。雨雪養_レ痾避_二春寒_一。忽見園花覆_三砂石_二。

還疑柳絮滿_二欄干_一。興同_二剡曲_一舟何在。歌入_二陽春_一和已難。

莫_レ笑人間不_レ如意。泥中誇馬遍_二長安_一。

『日録』にも前の詩句に続いて載っている。『日録』の第三句の『覆砂石』は『覆砂石』、第七句に(蠹)とあるのは不要。

追悼内人 (22)

空房設_レ牌照_二青燈_一。語尽往時淚眩然。女兒近來漸解_レ事。

学_レ人今夜供_二清饌_一。

『日録』の同年一月廿日の項にある。『日録』中の第一句に（護）とあるのは『設』。

○ 送文仲 一 (23)

芙蓉天半色。摘得贈_二郎君_一。帰国能須_レ見。其如_二鬼獄雪_一。

送玄深 一 (24)

岐蘇十三駅。行々山氣清。此中何所_レ在。白雲似_二我情_一。

二十三、二十四の両句とも『日録』の同年六月廿七日の項にある。『日録』の第一句にある欠字は『色』、文仲、玄深については未考。

苦熱日 (25)

万里長天不_レ見_レ雲。輕風無_二少動_二塵氛_一。家々苦熱総難_レ忍。

陌上行人日暮群。

この詩句は『日録』中には見えない。但し

『日録』の同年卅日の項に「廿一日より今日に至、炎暑如焼十年來不覺所。」とあり、この詩篇と関連があるように思われる。

○ 画竜鱗 (26)

古今靈物何所_レ宗。有_レ鱗有_レ鳳又有_レ竜。鱗兮鱗兮死_二西狩_一。

鳳兮風兮再難逢。竜中神竜無_二比肩_一。千變万化一自便。揺
翹奮_レ羽秋降_レ水。升_レ虚凌_レ冥春登_レ天。鱗々直次八十一。五
彩九色望燦然。費子竹杖飛_レ陂上。雷家宝劍潜_二深淵_一。化_レ魚
誤觸予且射。学_レ屠徒老漫倅賢。五花樹林得_レ食集。千金方
法承_レ恩伝。由来靈怪不_レ可_レ極。寛政改元己酉年。上毛州中
既橋北。馳_レ風駛_レ雨起_二雲煙_一。謂是此物躍々過。処村落皆
所_レ破。此時誰撲領下珠。雨収驚見髻毛隨。常福上人得_二
鱗_一。携去向_レ人示_二其真_一。可_レ觀元非_二池中物_一。最恐難_レ及綱
与_レ繪。縱不_レ似_二張僧繚画_一。漫学_二葉公_一為_二家珍_一。

『日録』同年八月十八日の項にある、『日録』第二十句の『過雨』は『驟雨』、第二十四句の『髻毛墮』は『髻毛隨』。

中秋無_レ月侍_レ宴 (27)

高堂賞_レ月々何懸。月色隱_レ天々暗然。鳥鵲閑栖庭際樹。驪
竜眠熟岸辺洲。金樽半夜連_二銀燭_一。彩菊清秋映_二綺筵_一。不_レ羨
南樓当日興。恩領玉醴小臣伝。

同 (28)

高堂賜_レ宴共相親。月色空濛雨露新。莫_下向_二今宵_一動_中秋思_上。
鴻恩誰又不_レ生_レ春。

この兩詩篇はともに『日録』の同年八月廿三日の項にある。

送_下糟子梁奉_二使勢南_一兼之_中故郷_上 (29)

神州一望氣殊雄。使者乘_レ秋發_ニ海東。自愧老聃臨_レ別語。人
称王式誦_レ討風。興来好宿明星店。奉命遥朝天照宮。行矣回
輶向_ニ鄉里。親朋応_レ説買臣回。

『日録』同年同月卅日の項にある。糟子梁は未考。

○

九日我世子宴_ニ山壯_ニ有_レ故不得_レ陪賦_レ
之奉_レ呈_ニ座右_一

(30)

滿林楓葉望紛々。綠酒黃花更醉_レ君。借問山亭高会所。風流
誰是孟參軍。

又

(31)

平台九日醉流霞。翠柏丹楓返景斜。余興好將黃菊酒。移_ニ来
秋色_ニ及_ニ陶家_一。

この兩日はともに『日録』の同年九月十一日の項にある。

送_ニ覚端帰郷省_ニ祝大人病_一 (32)

思親千里向_ニ雲端。此去何論行路難。聞道鄉関氷雪早。帰時

応_レ作_ニ王詳看_一。

『日録』同年同月廿四日の項にある。第四句の『祥看』は『詳看』。

陪_ニ水雲亭_一 (33)

世子耽_ニ幽趣。開_レ亭賜酒杯。閑雲当_レ楹出。秋水傍_レ筵廻。日
落丹楓映。天寒白雁來。醉中争_レ賦客。各自梁園才。

『日録』同年同月廿八日の項にある。『日録』の第四句の『傍筵』は『傍筵』。

陪_レ宴席上作 (34)

陪_ニ宴高堂雨色寒。一憐黃菊發_ニ秋闌。落英摘得供_ニ杯酒。
謂是風流楚客餐。

又 (35)

黃花紛々帶_レ雨開。清香深処幾啣_レ盃。主恩最喜青樽滿。
不_レ羨陶家載_レ酒來。

この兩句はともに『日録』の同年同月廿九日の項にある。『日録』に第三句を『落莫』とあるのは『落英』。

○

盆松 (36)

愛此盆中樹。仙郎手自栽。歲寒不_レ改_レ色。烟靄坐堪_レ催。

丁子纔通夢。孫家未_レ成_レ材。願長凌雲氣。竜鱗一自開。

『日録』同年十月三日の項にある。

観打毬 (37)

棚分齊走五驪驅。回_レ轡翻_レ身争_ニ打毬。共向_ニ科門_ニ恐相失。

無_ニ人不_レ欲_ニ奪頭籌_一。

第三十七篇は『日録』には同年十一月四日の項にある。『日録』の第三句に『斜門』とあるのは『科門』。

偶作 (38)

先生茅屋隔紅塵。秋去園林望又新。風落垂楊當檻亂。霜

深殘菊傍籬親。誰憐疎懶好違俗。自愧虛名動怪人。

多病殊由恐寒威。偶然迎客著綸巾。

『日録』同年同月十七日の項にある。玄白はこの日宿直であった。

陪二世子遊長松院 (39)

江城十月訪竜宮。詞客相携車馬同。木落疎鐘伝三方壑。風

高清楚入一層空。地近色界炊烟白。海接諸天夕照紅。乘

興須談玄理妙。傲然振麈對林公。

『日録』同年同月廿八日の項にある。

過大杉村田家 (40)

東岸放舟去。行尋野老家。霜深橘橙樹。風散荻蘆花。迎

客童炊黍。見雞嫗績麻。幽情無限好。不覺夕陽斜。

『日録』同年同月卅日の項にある。

○

冬至前一日侍二世子 (41)

梁田賓客本彬彬。此夕相迎賜酒新。授簡風雲催白雪。

含_レ杯天地似_二青春。纔知密室飛灰動。未增深宮功線新。好
值_二明朝一陽至。揮毫同作_二和歌人。

『日録』の同年十一月十一日の項にある。『日録』の第三句にある『授』は『授』、第六句にある『巧弥』は『功線』。

醉後作 (42)

世人生_レ子析_二聰明。蘇子聰明誤_二一生。余亦為_レ之多所_レ誤。
態願愚直子孫榮。

『日録』同年同月廿一日の項にある。『日録』の第二句にある『痴子』は『蘇子』。

登_二吉祥閣_一 (43)

吉祥高閣秀雲端。日暮登臨積雪寒。下界樓台三十万。酷
然絵作_二月中看。

『日録』同年同月廿二日の項にある。『日録』の第四句にある『皓』は『酷』。

冬日観水亭避暑凶限仄韻 (44)

道観相植意幽哉。昼裡乾坤四壁開。岸噴同臨雲樹座。浮
瓜長向_二水亭_一廻。霓屏隔_レ所凌_レ寒色。雪檻偏疑避暑來。
然有_二君家為_二異術。誰知伏臘一時催。

同 (45)

雪裡誰凶避暑台。漱_レ石枕_レ流幾含_レ杯。醉人不_レ識三冬
日。応為_二仙翁_一吐_レ火來。

『日録』同年同月廿三日の項にある。『日録』所載の第四十四題第四句中の『瓜』は『爪』。

○
歳暮德鄰堂集 (46)

山子書齋隔_レ世情。相逢抄歲共相親。江湖春近烟霞動。丘壑寒高冰雪新。玉腕頻傾耽_レ酒客。彩筆爭映賦_レ詩人。亡論天上聚星事。此地從來德有_レ鄰。

『日録』の同年十二月十三日の項に見える。

燈火書思 (47)

燈前独座思凄然。形影相憐奈_二暮年_一。嗟爾風流旧知己。當今屈_レ指半歸_レ泉。

『日録』の同年同月同日の項にある。

歳暮有感 (48)

窮陰維蔽節。憚慄北風吹。中夜何難_レ寢。心中多_三取思_一。十九出初仕。幸值太平時。晏然養_二拙婦_一。無事育_二豚兒_一。君未_三曾報酬_一。今年又如_レ之。慷慨志無_レ改。如_レ何筋骨衰。

『日録』の同年同月廿一日の項にある。

(未完)

明治前北海道疾病史 (一)

松 木 明 知

日本医史学雑誌・第十七卷
第二号・昭和四十六年六月

昭和四十五年十月一日受付

I 序言

II 明治前北海道疾病史

- 1 痘瘡の流行
- 2 痘疫以外の疫癘流行
- 3 飢饉と疫癘流行
- 4 鳥獣の疫癘流行

III 蝦夷地越冬兵と壊血病

- 1 蝦夷地越冬兵と「蝦夷地誹諧歌仙」
- 2 諸藩越冬兵と陣歿者
- 3 本症の名称と原因
- 4 本症の症状と治療法
- 5 日本における壊血病

IV 結語

I 序言

蝦夷地つまり現在の北海道における疫癘の流行史に関しては未だまとまった報告がない。

ただわずかに痘瘡の流行史のみについては、断片的ながらも二・三の研究が知られている。これは痘瘡がアイヌ民族衰亡の一要因であり、安政年間の江戸幕府による桑田立斎らによるアイヌの強制種痘施行の誘因となったことと相俟ってロシアで種痘法を学んだ中川⁽⁵⁾五郎⁽⁸⁾治が文政年度に松前地方で種痘を施行したという本邦医学史上極めて注目すべき事蹟が背

景にあつたためでもあらう。

筆者は蝦夷地における疫癘の流行を諸種の史料から抄出したが、単に人の疫病流行ばかりではなく鳥獸間の流行についても抄出した。例えば文政元年の江差における犬に関する記事は東漸してきた狂犬病が津軽海峡を渡って松前地方に入つたことを示唆するものと思われるからである。

従来の疫史は⁽⁹⁾やもすれば編年史的に中央における疫病の流行のみを対象としたものが多かったが、疫史であるからには疫病の伝播問題が非常に重要であり各地方における疫史を分明にすることが肝要であらう。本稿はこのような観点から草したもので日本疫病史の一部をなすものである。

II 北海道疫癘史

1 痘瘡の流行

疫病の流行について見るとやはり痘瘡の流行が最も多い。痘瘡の名が初めて蝦夷地関係の史乘に披見されるのは寛永元年（一六二四）であつたが、以後万治元年（一六五八）、元禄十一年（一六九八）、安永六年（二七七七）、安永八・九年（二七九・八〇）、寛政十・十一年（一七九八・九）、寛政十二年（一八〇〇）、文化二・三年（一八〇五・六）、文化六年（一八〇九）、文化十四年（一八一七）、文政元・二年（一八一八・九）、天保五年（一八三四）、天保十五年（一八四四）、弘化二年（一八四六）、安政二年（一八五五）、安政四年（一八五七）と計十六回の猖獗が知られている。

寛永元年以前の痘瘡の流行は知られていないが、応仁二年（一四六八）には大風、飢饉があつて「⁽⁹²⁾人死者甚多矣」と記録されて疫病の発生も考えられ、文明三年（一四七二）には「⁽¹²⁾疫疾」のため病死したアイヌが多かつたと伝えられている。⁽¹³⁾高倉新一郎博士はこの疫疾が痘瘡であると述べているが、しかしその可能性は大いにあるがこの記載のみで痘瘡の流行と断定するのはいささか早計であらう。

⁽¹⁴⁾筆者の調査では、津軽海峡を隔てた津軽地方でも元亀四年（一五七三）にすでに痘瘡の猖獗が見られたのであったから、当時津軽と繁鎖な交通のあった蝦夷地にもこのころ伝播していたことも十分考えられる。

十数度にわたる流行の中でも安永八・九年の流行は西蝦夷地石狩一帯に蔓延し留萌以北にまで及び病死者六百余名を数えた。

文化二年の天塩地方の流行は大規模なものであったらしく五〇九名の死者を算しているが次に記す如く疫学上非常に興味深い例である。

長崎からの帰途薪水補給のためノシャップ岬に寄港したレザノフ一行の中に痘瘡患者がおり、これから宗谷地方のアイヌに蔓延し、さらに翌文化三年には利尻、礼文のアイヌにまで伝染したのであったことが津軽藩士山崎半蔵の「宗谷詰合日記」によって知られる。すなわちこの痘瘡は船舶によって直接長崎から齎らされたものであった。

痘瘡流行の大部分は当時人口の稠密だった松前地方よりアイヌの多く居住する各場所に頻発したことは注目すべきであろう。そして一旦これが発生するやアイヌは山中に遁走したがため却って飢餓によって死亡する者が少くなかったことは最上徳内や松田伝十郎らの記録によっても明かである。そして安政二年の「仙北屋履歴」に見られるように山中に遁走したアイヌに対しては医師の派遣よりむしろ食料の補給が先決問題であった。

2 痘瘡以外の疫癘流行

痘瘡以外の疫癘として享保十八年（一七三三）の風邪、安永五年（一七七六）、文久二年（一八六二）の麻疹の流行が知られる。いずれも全国的な流行を見たもので蝦夷地といえどもそれを免れ得なかった。しかし麻疹の流行は本州に比して少なかったようで、大内余庵も「夷地に裳瘡は行はるけれども麻疹のことはまだ聞かず」と安政年度に記している。

風邪つまり流行性感冒については津軽地方だけでも江戸時代に十数度の流行が知られているが、これに比較して蝦夷地

における流行はわずか二度と極めて少なかったことは注目される。とくに享保十八年の流行は全国的な規模で津軽においては深山の猿まで咳を煩ったと伝えられている。天保九年（一八三八）の流行病については不詳である。

右に述べた以外にも諸種の疫病の流行があったことは当然考えられるが、とくに当時アイヌが最も恐れた痘瘡の流行が比較的多くの記録に留められている理由の一つとして、一旦痘瘡が猖獗を極めるやアイヌが病歿するいは又山中に遁走して労働力の不足を招ねき、これが漁獲高、狩猟高の激減となって和人が非常に困窮したことに拠るであろう。もっともアイヌが文字を有して記録を遺したならばさらに詳細な点までも判明したであろう。

3 飢饉と疫癘流行⁽¹⁹⁾

従来から飢饉に際してしばしば疫癘が流行することが言われている。栄養不良のため疾病に対する抵抗力が極度に低下しているのが要因であろう。

蝦夷地における飢饉で古記録に散見するのは応仁二年（一四六八）を嚆矢として寛文六年（一六六六）、延宝八年（一六八〇）、元禄八年（一六九五）、同十五年（一七〇二）、宝十五年（一七五五）、天明三・四年（一七八三・四）と続いたが、とくにアイヌの飢饉としては寛保八・九年（一七四八・九）に鮭の不漁で、文化三年（一八〇六）には鹿の不猟で多数の餓死者を算したことが知られている。右の諸飢饉と直接に関係があると考えられる疫癘の流行は筆者の調査では認められなかったが、間接的には何らかの影響を与えていることは否定出来ないであろう。

4 鳥獣の疫癘

鷹は桃山時代以来松前領の特産であった。とくにそれを豊臣秀吉に献上して好評を得てからこの傾向が著るしくなり、松前藩は鷹を捕獲して他藩に売却し、その売却高が一ケ年で三千両にも達したことがあった。このため鷹の疫病について

の記載が蝦夷地の史料に散見する。すなわち疫病が流行すると鷹が激減して捕獲数にも大きな影響を及ぼしたため注目を集めたものと思われる。

元和二年（一六二二）、慶安二年（一六四九）と再度にわたって大流行が見られたが宝暦年度以後は乱獲のためその数が極めて少くなり、したがって大流行も見られなくなった。

文政元年（一八一八）の江差における狗犬の記事は恐らく狂犬病を示唆するものと見て差し支えあるまい。

古記録に徴してもこれ以前に狂犬病が蝦夷地に侵入したという確証はなく、あるいはこれが蝦夷地における最初の狂犬病の発生を示す例であるかも知れない。文久年間にも松前、函館で「犬疫」が流行した。

しかし海峡一つ隔てた津軽地方にはすでに享保年間に狂犬病が西国から伝播していたからあるいは文政年度以前に蝦夷地に伝わっていたかも知れず、むしろこの方がより可能性が強いと言えよう。

享保年間の狂犬病の流行（人の）は全国的なものと推定されこれを契機として元文元年（一七二六）野呂元丈が日本で最初の狂犬病に関する成書「狂犬咬傷治方」を刊行したのであった。蝦夷地における狂犬病に関してはさらに新しい資料の出現を俟ちたい。

Ⅲ 蝦夷地越冬兵と壊血病

1 蝦夷地越冬兵と蝦夷地「誹諧歌仙」

江戸時代も後期の文化年間に至り北辺の事情が緊迫の度を増すや、江戸幕府の命によって津軽、南部両藩を主とする東北諸藩は松前及び蝦夷地に出兵して警備の任に着いた。しかし宗谷、利尻、択捉、国後などのいわゆる奥蝦夷地に越冬した守備兵が得体の知れぬ疾病のため多数陣歿するという悲惨な事件があった。

当時蝦夷地に越冬することがいかに困難を極めたものであったかは現在のわれわれには想像すら出来ないものであ

た。

箱館奉行羽太正養の句集「蝦夷地誹諧歌仙」の最後の句に「無事を歎ぶ越年の春」というのがある。

句集の編者であり、扱捉場所にも在動した経験を有する御雇医師愛松軒新楽閑叟はこの句に註して「夷地に行人は越年することを恐れるなり。冬春は中々寒気凌ぎかたく、譬は会所へ日用油受取に行いから手にて行なり。油受取りしとき繩に結び帰るなり。蠟燭の如し。伽羅の油の如く凍つく。年を越と相互に蘇生したる思をなすなり」と記して、寒気の極めて甚しく、従って無事年を越し得た際の喜びは非常に大きなものであったことを述べており、これによっても蝦夷地での越冬がいかに難渋であったかが十分に理解されるであろう。

2 諸藩越冬兵と陣没者

文化元年（一八〇四）八月津軽・南部両藩に初めて越冬の命が下され両藩合せて約六〇名の兵が扱捉島に渡った。しかし津軽藩士山崎半蔵の手記によれば翌二年の春までに生存し得た兵士は五十一名中わずか九名と伝え、「津軽歴代記類」に津軽藩兵三十名の中十一名が死亡し、残る者も廢疾同様であると伝えている。また文化五年の条には津軽藩越冬兵二百五十名の中実に一一九が本症その他で死亡した。南部藩兵については文化四年（一八〇七）から五年にかけて国後や扱捉に駐屯した兵士の中六八名、また会津兵については宗谷警備の任に着いた兵士の内五十余名が陣歿し、同じく国後、扱捉方面の仙台藩士六十余人も本症で斃れたことが知られている。

このように多数の死者を数えたこと、これに加うるに財政的困難の理由で箱館奉行服部定勝は文化十一年（一八一四）津軽・南部による奥蝦夷地の越冬兵による守備の免除を幕府に申し出て許可された。

これ以降冬期には奥蝦夷地に越冬することがなく、松前領及びその近辺に駐屯したが、例えば安政年度に増毛に越冬した秋田藩兵の中七十余名が陣歿しており全く本症の発生が見られなくなったわけではなかった。

本症による死者の総数は正確に把握し得ないが津輕藩士だけでも二八七名といわれ、文化初年から約十年間に少くとも数百名の死者を数えたことは確実であろう。

3 本症の名称と原因

本症の一呼称である「水腫病」は「新撰北海道史」の編者が便宜上用いたもので当時実際に使用された名称ではなかった。

「浮腫」⁽²⁴⁾「浮腫病」⁽²⁴⁾「腫病」の呼称は医家以外の人々によって用いられたものであった。すなわち「浮腫」⁽²⁵⁾は津輕南部藩の史料に散見し、「腫病」⁽²⁶⁾は津輕藩士山崎半蔵の手記及び幕府御用留に記載され、「浮腫病」⁽²⁷⁾は箱館奉行の「御諭書」に見られる。松前藩医桜井小膳の墓碑銘には「府腫」⁽²⁸⁾と刻されている。

一方医家例えば大槻玄沢⁽³⁰⁾は本症を「青腿牙疳」⁽³¹⁾と記し、太田南畝の「金曾木」にもこの名が見える。しかし現在用いられている「壊血病」⁽³²⁾がいつ頃から用いられたかは詳かでないが、大内余庵の「東蝦夷夜話」には「エケツビヨウ」の訓を施して「壊血病」⁽³³⁾が用いられていることによって、遅くとも守政末年までにこの語が清国からわが国に伝えられたと思われる。

本症の原因として「火毒説」と「野菜欠乏説」とが考えられた。「火毒説」とは暖房に際して炭火に脚を暖めるため脚の浮腫を来たし遂に死亡するに至るといふ最上徳内の説で、徳内は津輕藩兵を用い火辺を離れば「腫病」⁽³⁴⁾にならぬといふ実験を行ったが、しかし八名中三名死亡、二名重症という悲惨な結果に終った。箱館奉行所もこれとほぼ同様に考えており火氣中の「炭素」⁽³⁵⁾のため「浮腫病」が生ずるとした。

一方「野菜欠乏説」⁽³⁶⁾に関して山崎半蔵は数度にわたる蝦夷地越冬の経験から本症を野菜欠乏のために起ると考え、生大根が著効を顕すとした。

大槻玄沢一派は本症が「青腿牙疳」つまり壊血病であると診定し、その原因を「軍中備用方」から抄出して「専ら其起原トナルモノハ軍ニ從テ異地ニ役シ寒冬旱汗泥湿ノ地ニ往シ瘴癘惡氣ヲ蒙テ身体挙動スルコトナク或ハ食料園蔬菜菘ナク飲料腐敗ノ瀦水ヲ用ヒ或ハ炙肉炮魚淹藏ノ類洩敗ノ酥懲臭ノ麦餅ヲ食シ或憂悶愁鬱眠食アカラス或恐怖驚駭飽食勞役皆此病因トナル」と述べている。

4 本症の症状と治療法

症状の概要については「北海道疫癘史年表」文化六年の条に掲げた太田南畝の「青腿牙疳好薬」に尽されている。即ち「種々の症を顕はすといへども誰にも同じき所は皆必下部或は一身に紫黒色の斑紋を發し牙齦腫痛口中腐爛し飲食ともに下らすいかんともすべからざるに至るもの多し」と記されている。「原始漫筆風土年表」³²⁾にも「多くハ紅紫の寸点を顕し死に至らんとす」と記されており紫斑の出現が大部分の患者に見られたことは注目すべきである。

「新撰北海道史」の編者は浮腫を重く見て「水腫病」なる名称を与えたが、浮腫については飢餓つまり栄養不良による低蛋白血症の一症状と考えれば容易に理解される。

酷寒の奥蝦夷地に陣営して新鮮な野菜はもちろんのことその他の食料に欠乏し、しかも掘立小屋という極めて悪条件下に生活したわけであるから疾病に対する抵抗力も極度に低下して壊血病以外の疾病例えば脚気などを合併したことも十分推察されるところである。

大槻玄沢は第二次仙台藩の派兵に際して従軍医官に「寒地病案」³⁰⁾を配布し壊血病の治療と予防に資することとした。

その中の「軍中備用方」には血液が濃縮しているなら浄水を与え、緩下剤を用い、また芦荟、没薬、泪夫藍を処方用いている。発熱、頻脈、口渴などに対しては羊絨根、欖生根、酒石製剤などを用い壊血病性口内炎に対しては海精塩、薔薇蜜を用いる。「ハイステル内科書」からの抄出もほぼ同様でとくに柑橘類の生汁を奨め歯肉の炎症、潰瘍には食塩、没

葉を塗布し紫斑に対しては石灰石は竜腦を加えたもので温湿布すればよいとした。文化年間箱館に幽囚されたゴローニンは壞血病の予防にレモンなどを幕府から贈られているが、これは大槻玄沢らの指示によるものであろう。

一方民間においても新鮮な野菜が著効を奏することが経験的に知られており、山崎半蔵は「万里堂蝦夷日誌抜書」に「御役人より生大根甘本腫病の養生として被贈用意て驗有る事奇也。朝鮮人參の如く貴べり」と記してしており、新築閑叟は「犀角解毒丹」を処方し、南部藩兵はザゼン草を服し箱館奉行は安政年間コーヒーを輸入して治療と予防に効ありとしている。

また文久年間には山崎伝輔は片腦を焼酒に溶解し全身に塗布する方法を用いたという。

5 日本に於ける壞血病

日本においてはこれまで本症の多発例はほとんどなかったものとされており入沢の無人島漂流例、関場の石狩における実験例や竹田の新田における例など散発的なものが多かった。

オリザニンの発見者として知られる鈴木梅太郎博士はその著「ビタミン」の中で「昔から野菜や果実を好んで摂って来た日本人の間には典型的壞血病は殆んど発生しなかつた様である。従つて壞血病の概念も恐らく明治時代に外国から輸入されたものであろう」と述べている。

しかし実際には文化年間にいわゆる奥蝦夷地において東北諸藩の越冬戍兵の間にこれが多数を見たことは明かであり、これに対して文化五年（一八〇八）大槻玄沢はハイステル内科書その他から壞血病の項を抄出し「寒地病案」を編して医官に与えその予防に努めた。

従つてわが国において壞血病の概念が確立したのは文化五年（一八〇八）であるとしても何ら差し支えなからうかと思われる。

IV 結語

疾病史は医学史の中でも非常に重要な分野である。本稿によってほとんど未開拓であった北海道医学史の一部が解明されることとなった。しかし史料の発掘は未だ十分とは言えず今後さらに鋭意探索する予定である。なお本稿の一部は昭和四十五年の日本医史学会総会で発表した。

文献

- (1) 高倉新一郎…アイヌと痘瘡 医事公論 第一四八一号 昭和十五年十二月十四日
- (2) 同 アイヌと種痘 北海道帝国大学新聞 第一五三三号 昭和十年十一月五日
- (3) 高橋信吉…蝦夷痘瘡史考 南江堂 昭和十一年
- (4) 阿部龍夫…桑田立齋とアイチ種痘「函館の医事と医人」所収 無風帯社 昭和二十六年
- (5) 同 中川五郎治と種痘伝来 無風帯社 昭和十八年
- (6) 松木明知…中川五郎治研究最近の知見 日本医史学雑誌 第十三卷三号、昭和四十二年十二月
- (7) 同 中川五郎治の種痘法 日本医事新報 第二一六三三号 昭和四十年十月
- (8) 同 中川五郎治と中川家の埜域 蘭学資料研究会研究報告 第一九一号 昭和四十二年二月
- (9) 富士川 游…日本疾病史 杏林舎 昭和十九年
- (10) 藤井尚久…明治前日本疾病史「明治前日本医学史 第一卷」所収 日本学術振興会 一九五五年
- (11) 山崎 佐…日本疫史及防疫史 克誠堂 昭和六年
- (12) 「福山秘府」 「新撰北海道史 第五卷」所収 北海道庁 昭和十二年
- (13) 高倉新一郎…アイヌ政策史 日本評論社 昭和十七年
- (14) 松木明知…明治前津軽痘瘡流行史 医学史研究 第十号 昭和三十八年十月
- (15) 市立函館図書館蔵
- (16) 最上徹内…蝦夷草紙 北門双書 第一卷 北光書房 昭和十九年

- (17) 松田伝十郎…北夷談 北門双書 第五卷 北光書房 昭和十九年
北海道庁図書館蔵
- (18) 河野広道編 維新前北海道震災年表 蝦夷往来双書 第一編 尚古堂 昭和七年
松木明知…津軽疫部流行年表 津軽医史 第二号 昭和三十八年九月
- (19) 同 明治前津軽風疫流行史 医学史研究 第十九・二十号、昭和四十一年二月・五月
大内余庵…東蝦夷夜話 文苑閣 文久二年
- (20) 新撰北海道史 第五卷 北海道庁、昭和十二年
- (21) 山崎半蔵…万里堂蝦夷日記抜書 市立函館図書館蔵
- (22) みちのく双書 第八集 青森県文化財保護協会 昭和二十四年
- (23) マンケ詰日記 東山文庫 秋田県立図書館蔵
- (24) 北海道松前町法源寺門前の「旧津軽藩卒二百八十七名之碑」に拠る
- (25) 古事類苑…方投部 神宮司庁 明治四十二年
- (26) 北海道松前町専念寺
- (27) 大槻玄沢編 寒地病案 京都大学図書館富士川文庫
- (28) 太田南畝 金曾木「日本随筆大成 第三卷」所収 吉川弘文館 昭和二年
- (29) みちのく双書 第九・十集 青森県文化財保護協会 昭和三十五・六年
- (30) コロニー…日本幽囚記(上) 岩波文庫 岩波書店 昭和十八年五月
- (31) 入沢達吉…スコルブト病 皮膚及泌尿科雑誌 三ノ六 明治三十六年
- (32) 関場不二彦…石狩郡篠津村ニ発シタル壞血病患者報 東京医学会雑誌 十三ノ十七 明治三十二年
- (33) 竹田六郎…スコルブトニ就テ 東京医学会雑誌 十八ノ十六 明治三十七年
- (34) 鈴木梅太郎…ビタミン 日本評論社 昭和十八年

秋田藩医齋藤養達

——とくに白鳥雄蔵との関係——

松 木 明 知

- 1 序言
 - 2 齋藤養達の系譜
 - 3 齋藤養達の塾域
 - 4 齋藤養達の門人
 - 5 白鳥雄蔵の入門と種痘普及
 - 7 結語
- 文 献

1 序 言

(1)(16)
中川五郎治がシベリアからわが国に伝えた種痘法はただ単に北海道松前地方において文政年間から実施されたばかりでなく、彼の弟子の一人である函館の白鳥雄蔵⁽⁷⁾⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾によって天保末年に秋田地方にまで伝播普及された。白鳥は医学研究のため秋田に赴き藩医齋藤養達の門に入ったのであったが医学研修の旁ら中川五郎治から教授された種痘法を一般の医師に伝えたのであった。

全国的に見ても天保年間に種痘普及を企てこれを実施した藩は秋田藩を除いてなく、その榮譽の一端は藩外から入門した一医生白鳥雄蔵の提言を容れて藩医一統に当時最新の技術であった種痘法を習得せしめ、さらに藩当局にその普及を促進せしめた養達の先見の明によるものである。

本稿では齋藤養達の系譜を中心に二・三論考を加えたいと思う。

2 齋藤養達の系譜

秋田県立図書館に養達自身の手になる「新調齋藤氏系図（天保十二年閏正月成）」がある。これによれば養達は幼名与会五郎、諱は安克、蘭室と称した。渋江重兵衛の家臣矢口久七郎（本姓齋藤氏）の三男として寛政五年正月二十七日に生れた。母は関口氏である。文化七年十六歳で秋田の畑源助について医学を学び、文化十二年渋江和光に仕えたが、二年後の文化十四年江戸に登って嶺少翁に師事した。文政四年藩の医学館会頭を勤めて御目見医を仰付けられ、天保元年八月には一代限りの藩医となった。同年十月には医学頭となって御側医格に昇進し翌年六月には御側医を仰付った。

天保三年参勤交代に際して江戸に往き、同五年には藩主の仙北郡巡行の御供を仰付けられ、同八年再び江戸に勤番し、翌年には永代御医師を仰付けられた。妻は町家境田又吉の女である。安政五年歿、六十六歳。

子息は三人で長男は安定、幼名己之助、元益と称した。母は境田氏、文政四年二月九日生れで天保十年八月出仕し、妻は秋田藩医菊地康安の女である。

長女哲は文政六年正月に生れたが同九年に夭逝し、次女富は文政八年四月生れであるが、実は養女で渋江左膳の家臣三浦氏の女で天保十一年十一月間政清に嫁した。

3 齋藤養達の塋域

秋田市の日蓮宗塚原山宝塔寺は齋藤家の菩提寺である。度重なる火災のため過去帳などは一切失なわれており、塋域に残された墓碑が史料として重要である。

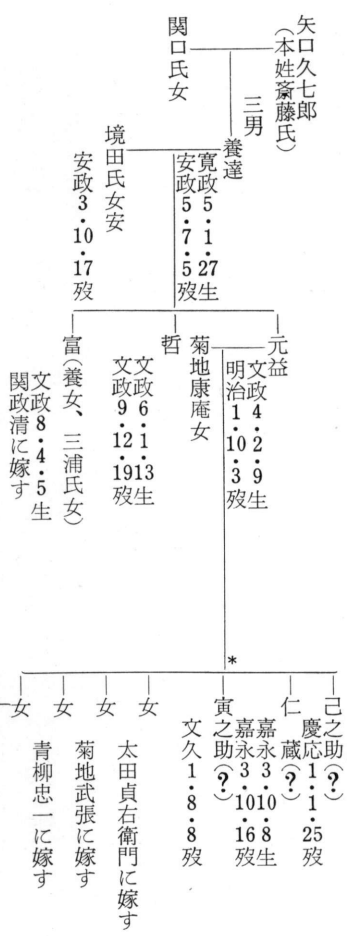
齋藤家の墓地に高さ三尺に満ため墓碑が七基ある。

左から四番目が養達の墓である。正面に「齋藤安克之墓」とあり、左側面に「君諱安克通称養達安政五戊午年七月五日卒享年六十有六法謚日声山院蘭室秀居士」と刻されている。

左から七番目は養達の妻の墓である。碑面に「齋藤安克妻之墓」と記され、左側面に「婦人諱安境田氏齋藤安克妻安政三年丙辰十月十七日卒享年五十四法謚日法室妙蓮大姉」とある。

左端の一基は養達の長子元益の墓である。碑面には「齋藤安定之墓」、右側面は「明治十年十月三日嗣子齋藤元頤建之」と刻されている。碑の左側面から後面にかけて「齋藤君諱安定称元益父諱安克母境田氏文政四年壬巳二月九月生以医術仕

別表 齋藤家の系譜



* 元益の子七人の順位は不詳で(?)は不確実

秋田藩為侍医兼医校学頭娶菊地氏生三男四女嫁長女於太田貞右衛門次女於菊地武張三女於青柳忠一男皆夭乃養齋藤三益之次子元頤以季女配之為嗣君明治元年戊辰十月三日歿享年四十七葬於八幡宝塔寺因記石表焉」と刻されている。これによれば養達の子元益も医師となり藩の中で重きをなしたことが知られる。仙北郡を廻郷種痘したのも元益である。

左から二番目には「齋藤己之助墓慶応元年乙丑正月廿五日卒」とあり、さらに左から三番目には「齋藤仁藏之墓文久元年壬戌八月三日天」とあってまた左五番目には「齋藤寅之助墓嘉永三年庚戌十月八日生同月十六日天」とある。以上の三人は元益の天逝した息と推定される。

この他「齋藤鉄女之墓」（文政九年丙辰十二月十九日）の一基があるがこれは養達の娘つまり元益の妹で前記した系図には「哲」となっており、文政六年正月十三日の生れである。

系図と墓碑から齋藤家の系譜を作製すると前頁の如くである。（別表）

4 齋藤養達の門人

文化末年江戸に登った養達は嶺少翁について医学を学んだ。少翁は吉益東洞の弟子であるから養達は東洞の古医方の流れを汲むことになる。彼は秋田藩の古医方の大家として活躍したが、一方では子弟の教育に極めて熱意を注ぎ多くの門人を世に送り出していることは注目されよう。

嘉永六年に改められた「齋藤養達門人名籍」によれば、最初の入門年月日は知られないが慶応元年三月までの間に二三名の入門者を数えている。養達は安政五年七月に歿しているからこれから慶応元年までの入門者は元益について学んだのであろう。専攻別に見ると内科（本道）が一三三名、内科兼外科二名、内科兼産科一七名、外科四名、産科一名、鍼科一名、不明七四名である。出身地を地方別に見ると秋田が二一三名と圧倒的に多く、次いで松前函館の北海道が九名を数え、青森、岩手、山形が各一名で不明のものが八名である。秋田と隣藩であった青森（津軽）、岩手（南部）山形が各一名

の入門者と少なく、逆にこれより遠方の北海道からの入門者が九名もあることは、秋田と北海道との人的交流がより密であったことを示す一つの証左でもあろう。

養達は内科を専門としたが、「門人名簿」の中では内科、外科、産科、鍼科が掲げられており、これは教授陣が少くとも複数であったことを物語っている。

門人の多くは秋田地方の人であり数年の業を終えてから各自その故郷に帰り地方の医療の向上に益する所が大であった。門人の中で有名なのは後に述べる白鳥雄蔵と後年江戸で種痘医とし活躍した大野松斎であろう。

5 白鳥雄蔵の入門と種痘の普及

「門人名簿」の第七十一番目が白鳥雄蔵である。「嶋雄造 年二十八」と誤記されているが、これが白鳥雄蔵であることはすでに論考した。

入門の年月日は記されていないが、前後の関係からほぼ天保十一年頃と目される。すなわち「門人名簿」の中で第六十三番から六十六番まで松前から池田敬祐、嶋田文郁、嶋田文恭、千葉文英の四人の医師が入門している。この年代は家老(10) 渋谷和光の日記に天保十年に松前から四人の医師が養達の門に入ったと記されているから天保十年に相違ない。雄蔵の前の入門者は「大野松斎」である。松斎は文政二年の生れであるから「年二十二」は天保十一年である。「門人名簿」では雄蔵の年令を二十八歳としているが阿部竜夫博士によれば雄蔵は嘉永四年に四十歳で歿したと推定されるという。これから逆算すると二十八歳は天保十年で一年の差が見られる。

雄蔵の次の入門者は「大森誠斎 年二十二」となっている。筆者はこの誠斎が後に種痘医として活躍した「大森誠達」と同一人物ではないかと考えているがこれに関しては後日を期したい。

京都に遊学したことのある白鳥が何故に北奥の斎藤養達の門に学んだかは疑問である。当時京都には雄蔵の知己も多く

さらに養達に優る人材が雲集していたからである。その理由の一つとして雄蔵より少し前に松前から四人も同時に入門している影響があったことも十分考えられる。

医学の教授を受けながら白鳥は藩医一統に種痘の卓効を説いた。その言を容れて最初に人体実験を申し出たのは藩医白井禎庵でありその娘に雄蔵の種痘を受けさせた。結果は良効だったので禎庵は改めて雄蔵から種痘法の詳細を習いその後は希望する者に兩人で種痘したという。種痘を受けたものは天保十四年夏の秋田における痘瘡の流行に際しても罹患しなかった。このように種痘の効果は絶大であったので秋田藩庁は天保十五年に藩内広く廻郷種痘をすることにしたが、担当医師は前述した白井禎庵の他養達の息元益や石川元長、それに白鳥雄蔵であった。この間の事情は吉成直太郎氏の報告に詳しい。

雄蔵の行った種痘法の詳細については不明であるが、わずかにその大要が「白鳥雄蔵種痘之書」⁽¹⁴⁾によって窺い知ることが出来る。これによれば中川五郎治が伝えた方法と大差のないものと思われるが、これに関してはすでに論考を加えてあるので省略する。

6 結語

本稿において幕末の秋田藩医斎藤養達についてその系譜を中心に述べた。彼は嶺少翁の弟子で吉益東洞の流れを汲む。藩医の重鎮として活躍する一方、子弟の教育にも大いに意を注ぎ、門人は二百三十三人を数え、遠く松前からも入門者を迎えている。

彼は「古医方」のみを信ずることなく門人の一人白鳥雄蔵の言を容れて種痘術の普及を認め、長子元益にもこれを学ばしめて他の藩医と共に広く廻郷種痘を行なわせた。天保の末年にすでにこのような形態を種痘を行ったのは秋田藩を以て嚆矢とするもので、その栄誉の一端は養達が荷うべきであらう。

文献

- (1) 松本明知：中川五郎治の系譜 蘭字資料研究会報告(蘭研)第一八四号、昭和四一年八月
- (2) 同 中川五郎治の系譜続、蘭研、第一九〇号、昭和四二年一月
- (3) 同 中川五郎治關係文書、蘭研、第一九九号、昭和四二年八月
- (4) 同、中川五郎治と中川家の鑿域、蘭研、第一九一号、昭和四二年二月
- (5) 同、中川五郎治研究最近の知見、日本医史学会雑誌(医史雑)第十三卷三号、昭和四二年十二月
- (6) 同、中川五郎治の系譜―補遺―、蘭研、第二六号、昭和四三年十二月
- (7) 同、白鳥雄蔵と白鳥家の鑿域、医史雑、第十三卷三号、昭和四二年十二月
- (8) 秋田県立図書館蔵
- (9) 松本明知：秋田藩医齋藤養蓮門人名籍の紹介、医学史研究、第二五号、昭和四二年十月
- (10) 秋田県立図書館蔵、吉成直太郎氏の御教示による
- (11) 吉成直太郎：佐竹藩医薬史の研究、其二 秋田県医師会雑誌 第四卷三号、昭和二十七年十月
- (12) 阿部龍夫：中川五郎治と種痘伝来、無風帯社、昭和十八年十二月
- (13) 吉成直太郎：佐竹藩の医薬史の研究・其四、秋田県医師会雑誌第五卷二〇号、昭和二十八年
- (14) 松本明知：中川五郎治の種痘法、日本医事新報、第二六三号、昭和四十年十月
- (15) 松本明知：白鳥雄蔵種痘之書について、医史雑、第十三卷二号、昭和四二年二月
- (16) 津軽地方にも伝播された形跡がある。拙稿「種痘法の移入と弘前藩の態度」医史雑、第十六卷三号、昭和四五年九月参照
- (17) 松本明知：秋田種痘史に関する史料、蘭研、第二二号、昭和四三年八月

なお本稿の要旨は昭和四六年度の日本医史学会総会で発表した。

(弘前大学・医学部・麻酔科)

＊日本医学史名著シリーズノ

〔好評発売中〕

人 蔘 史

全七巻

今 村 柄 著
定価 五五・〇〇〇円

古くから鹿茸と共に「蔘茸」と並称されて、最も代表的漢薬とされて来た人蔘は、人々の生活と密接なつながりを保持してきた。本書は編年記・思想篇・政治篇・経済篇・医学篇・雑記篇・蔘積量放稿の全七巻の大著で、凡そ人蔘に関する資料は悉くここに集積されている。しかし又、人蔘ばかりでなく、広く東洋文化史の研究資料でもある。

箕 作 阮 甫

吳 秀 三 著
A 5・総頁四三〇頁

定価五、五〇〇円(三三〇〇円)

日本の近代文明の発展に蘭学を修めた人々が大きく貢献したが、彼らの多くは又西洋医学も学んでいる。箕作阮甫もその一人であるが彼はオランダ書を訳述して医学書を出版し、更にその他の自然科学書のみならず地理・歴史の類書を翻訳している。本書はその阮甫の伝記であり、吳博士の名著の一つである。

〔最新刊〕

日本産科叢書 A 5 秀 三 著
定価 九・〇〇〇円

稿本日本眼科学史 小川 刺三郎 著
定価 三・三〇〇円

杏林叢書全二巻 富士川 一四游 他 編
定価 一〇・〇〇〇円

華岡青洲先生及其外科 吳 秀一 著・宗田 一補訂
定価 六・五〇〇円

東洞全集 吳 秀三・富士川 遊集校定
定価 六・五〇〇円

吳氏医聖堂叢書 吳 秀 三 編
定価 七・五〇〇円

京都市下京区中堂寺西寺町4 思 文 閣 振替京都8487・電801-2375(代表)

化 薬 医

告 告 代 理 店

専 門 取 扱
医 学 ・ 薬 学 ・ 化 学
専 門 雑 誌 ・ 業 界 新 聞



本誌広告取扱

合 資 会 社 日 本 医 学 廣 告 社
東 京 都 千 代 田 区 神 田 駿 河 台 2-9
日 本 医 事 新 報 ビ ル
電 話 (03) 292-6961 (代 表)

資料

堀内文書の研究 二

片桐 一男

第五三号文書 森平右衛門書状 堀内林哲宛

尚々いつ比御出府可_レ被_二相成_一哉、早々奉_レ待候、御便而已尚御左右奉_レ待候、以上、

追日寒冷ニ相成候、弥御清福被_レ成、御勤_二奉_三恭賀_一候、先達而ハ御状被_レ下、忝拜見仕候、先は御安寧御着座之旨何重奉_レ賀候、御願申上置候毛織御送被_レ下千万ニ忝奉_レ存候、遠路之所被_二是御面倒之御渡奉_三多謝_一候、早速含_二御請_一可_二申上_一所、被_二仰下_一候、ベン吟味仕候間、及_二大延引_一候段御海容可_レ被_レ下候、創式握進呈仕候、当地月池磐水子など何レも不_二相替_一罷在候、扱御発駕之砌ハ、御混雜中御馳走ニ相成、辱奉_レ存候、乍_レ去大賑て不_レ覺長座御邪魔仕奉_二恐入_一候、乍_二延引_一御礼旁如此御座候、尚奉_レ期_二後音_一候、恐惶謹言

十月十三日

森平右衛門

隣洲(花押)

堀内林哲様

参人々御中

註

・森平右衛門_二西雅九郎_一荒井庄十郎・行順。長崎の阿蘭陀通詞出身。母は吉雄幸左衛門の姉。杉田玄白の『蘭学事始』の中に登場している。詳細は片桐一男「阿蘭陀通詞西雅九郎と江戸の蘭学界」、『白山史学』第十五・十六合併号、昭和四六年三月)および、同「阿蘭陀通詞西雅九郎(荒井庄十郎_二森平右衛門_一)補遺」、『蘭学資料研究会研究報告』第二四七号、昭和四六年六月)を参照。

第九〇号文書 坪井信道書状 堀内忠龍(忠寛・素堂)宛

(端裏)
「上杉様御上屋敷
堀内忠龍様

坪井信道

書状風呂敷包一添
昨日マンス訳書相願候処、とじぬノヲ御遣し被_レ下候、先達而頂戴候通、乍_二御面倒_一、御としさせ御遣し被_レ下候様、以後奉_レ存候、即昨日ノハ返上仕候、御落手可_レ被_レ下候、右申上度、早々不具、

七月廿七日

九月廿一日之貴書先日到着薰誦仕候、先に勤履万福奉_ニ遣賀_ニ候、拙子大病後健康倍_ニ前日_ニ、從來之シユールも頓_ニ忘却仕候、此段安慮可_レ被_レ下候、撰生之事、縷々御高論被_ニ成下_ニ、万々奉_ニ感佩_ニ候、一旦ハ已_ニ黄泉之家トモ相成可_レ申候処、諸友之骨折_ニ而不思議に万死中之一生ヲ得申候、当地疫熱之流行、去冬以來仲秋比まで間断無_レ之、死亡尤夥敷御座候、レウマチーセ、シンキンフ、ガステリセ、ウォルム、ガルコーツ併行ハレ申候、拙子所患之症ハレウマチーセコールツ有_レ之、初發頭痛如_レ裂、中コロ腸胃不利、第十一日ニメ戰汗発黄一旦輕退ヲ覺へ、最後赤痢ニ変し候、痢稍々治スレハ驚口瘡ヲ発し、満口糊ヲ布クカ如ク、咽喉食道隱痛、菜餌共嚙下ヲ妨ケ、疲勞危極、皮骨相連申候、伏枕六十日、九月初旬初メテ膝ヲ離_レ申候、此節ハ疫熱流行ト申程ニハ無_レ之候得共、尚兩三人ツツ不_レ絶有_レ之、就_レ中、急症有_レ之多クハ下利ヲ兼子不_レ日ニ虚脱いたし、七八日ニモ鬼籍ニ上ル者往々御座候、貴藩中、長井音藏君并ニ長谷川源右衛門君、小子治療にてハ兩人共泉下ニ送り申候、不_レ堪_ニ遺憾_ニ奉_レ存候、長井君ハローデローブニ而、最初方煩悶甚敷、二三日ニモ疲勞虚脱、第八日ニメドードニ相成候、全クインゲワンデン之コウデヒュールト被_レ存候、如_レ此急症ハ多ク見ザル所ニ御座候、長谷川君ハ神經熱にて、尤スレーベンデニ而、小子受取候ハ、初發方第二十七八日メニ御座候、強神諸劑寸効無_レ之、五十日余ニ

メドードニ相成申候、何レも伊東と相談いたし、兩人大心配仕候得共、フリュクテロースと相成、汗顔之至奉_レ存候、高陽之佳計、拝吟仕候、尚病中野調一首入_ニ電覽_ニ候
和_ニ實作_ニ既甫_ニ中秋看月之作_ニ

弄風遙笛送新愁
一醉欲取向執謀
月照病顏涼透骨
獨憑江上最高樓

右之外病中作數首御座候得共、明年拜眉之上、可_レ入_ニ御覽_ニ候、尚逐日寒天ニ相向候、為_レ適_ニ御保養_ニ奉_レ祈候、右貴酬、草々頓首

十一月十六日夜

燈下 裁

坪井信道

堀内忠龍様

侍史

尚々、過日シキユータ葉御患投被_ニ成下_ニ千万奉_レ謝候、以上

註

・シユール＝Zuur 胸焼。

・レウマチーセ＝Rheumatiek リウマチス。

・シンキンフ＝Zinking カタル。

・ガステリセ＝gastisch 胃炎の。

・ウォルム＝worm 回虫。

・ガルコーツ＝galkoots 胆膿炎。

・ローテロープ＝発音通りならば roodeloop 赤キャベツのこととなるが、ここでは辞書にも接近して掲載されている rodelaub 赤痢のことであろう。

・ドード＝doed 死口。

・インゲワンデン＝ingewanden 腸。

・コウデヒュール＝koudvuur 潰瘍。

・スレーベンデ＝slepende 遷延性。

・フリュクテロース＝Vruchtloos 無効。

・箕作阮甫＝津山侯侍医。天保十年、天文台訳員。安政二年、蕃書調所教授。文久三年六月十七日歿、六十五歳。

・シキューター＝cicuta 蘭学者は失鳩答の文字を当てている。

毒人参のこと。

第九八号文書 坪井信道書状 堀内忠亮宛

(端裏)

「堀内忠亮様

病用

坪井信道

」

日野御奥様拜診仕候、最初方之御患状、逐一承候、愚按御産前方子宮之膨脹ニ由テ、水脈圧迫セラレ、小便不利之処、御産後ニ至リ、乳汁も排泄不レ得レ宜、又々水脈抑圧水気去リ兼候処、時節柄、流行之脚氣之御気味ハ益被レ成、益小便不利いたし、其中乳房嫩衝ニ而、御熱勢も強く被レ為レ在、今日ニ

至リ、織維次第ニ弛緩いたし、諸器ノ機転不レ得レ宜、荏苒經久いたし候事と奉レ存候、御乳房ノ腫病も破潰遊し、膿汁も多分出候へ共、御少服ニハ、尚余程閉塞被レ為レ在候様奉レ伺候、今少し解凝劑差上度、御容子次第ニ而ハ、御少服御腰部等ニ少し水蛭ニテも貼し候而、宜敷事も可レ有候与、

御煎劑

蒲公英根 茅根

杜松子 孕礬酒石

茴香或橙皮 甘草

御散藥

純精酒石 五分

チキタリス 五厘

ソイケル 適宜

右 為三包一日夜ニ

御用

先ハ、右様之事ニ而如レ何可レ有之也、愚按申上置候、此後善惡之処ハ固クハ申上難ク候へ共、格別気懸等之悪候不レ被レ為レ入候へ共、程能ハ利水共被レ遊候ハハ、逐々御快路へ御向ひ被レ遊候半と奉レ存候、併し此大病なる「ハ申迄も無レ之段ニ御座候、以上、

七月廿二日

註

・日野御奥様＝観月夫人、諱阿鍊。天保三年（一八三二）生嘉

永元年（一八四八）八月十一日卒、享年十七。嘉永元年五月八日、男子出産後、病腫によりついに八月十一日に死去せるゆえ、本状は嘉永元年七月二十二日の書状なること明白なり。
〔觀月夫人墓碣銘〕。

・蒲公英根 || キク科のタンポポ類の根。健胃・催乳薬。

・茅根 || イネ科のチガヤの根茎。利尿剤。

・杜松子 || ネズの果実。利尿剤。

・孕答酒石 || 綠礬（硫酸鉄）精液。解凝、清涼、驅熱剤。

・茴香 || 胃疾患・腹痛・疝痛に用いる。

・橙皮 || ミカン科のダイダイの成熟果実の果皮。芳香性苦味・健胃薬として用いる。

・甘草 || 胃痙攣・胃痛・胃潰瘍に用いる。

・ソイケル || suiker 砂糖。

第九九号文書 坪井信道書状 堀内忠亮宛

〔端裏〕

「堀内忠亮様

病用

坪井信道

兩三日ハ殘炎別而難レ凌御座候、函丈御清適奉レ賀候、然ハ日野御奥様、昨日門人差上申候処、兎角御同様御小水御不利、他ハ何も被レ為レ替候御事も不レ被レ在候由、昨日方御指定申上候丸子并ニアルニカ花差上置候、今日ハ午後七時ニ御伺申上

候心得ニ御座候、何率御縁合御枉駕被レ下候様仕度奉レ存候、何も其節可ニ申上二候、頓首
八月六日

註

・第九八号文書同様、本状は嘉永元年八月六日の書状なり。

・函丈 || 先生。

・アルニカ花 || *arnica* || *Arnica Montana* 桔梗 || 利尿・発汗剤。

第二〇一号文書 坪井信道書状 堀内忠亮（素堂）宛

〔端裏〕

「素堂先生

箭」

日野様御残念千万奉ニ恐入一候、長万御芳心奉ニ感佩一候、初又昨日塩谷へ立寄、豚兎事相頼候、同氏言葉に尊家方拙塾へ引移候而も、別ニ有益可レ有候にも無之候へハ、一応賢兄迄ハ御断申上候と申事ニ候、来ル十六日ニハ同居いたし居候人、他へ引越候間、其上而豚兎入塾いたし候様ニと申事ニ御座候、此段御承知可レ被レ下候、尚此後之処、嚴敷御慈諭被レ成下、怠惰ヲ御戒メ可レ被レ下候、且塩谷へ參候上も、貴家へ罷出候節ハ嚴敷御鞭策可レ被レ下候、来ル十六日夕刻方拙宅へ一宿がけて參り候様申聞置候、是又御聞濟可レ被レ下候、右相願度、草々、不具、

八月十二日

註

・日野夫人死去の翌日、すなわち嘉永元年八月十二日の書状なり。

・塩谷||塩谷甲蔵・宕陰。江戸の儒者。慶応三年九月没。年五十九。

・豚児||堀内忠淳・忠亮・適齋。

第一〇二号文書 坪井信道書状 堀内忠亮宛

去月三日之貴翰先日拝読仕候、如_二高論_一、遂日寒威相加候処、尊標清穆被_レ成_二御座_一、奉_二敬賀_一候、弊家無異に送光仕候、乍_レ憚御省慮可_レ被_レ下候、然は令郎先日来至極丈夫ニ御勉勵被_レ成候、過日小弟少々不快之事有_レ之、鴻ノ台まで遊行、其節、豚児輩一同御誘引申候、段々相試候処、進退周旋至極沈衷之才子と奉_レ存候、末葉もしく奉_レ存候、扱先達之貴書ニ今少し漢文章修行為_レ致而ハ如何と被_二仰下_一ニ付、忠益子始、寛輔へも相談、御当人へも承候処、先此節ハ純粹ニ西学ニ従事被_レ成乎との御事、皆も其方可_レ然申候ニ付、即其意ニ任セ申候、漢文字之事ハ何地ニ而も出来候すのなれハ、衆説之通、先三年ハ専心西文ヲ攻究被_レ成候方相考候、此段御承知可_レ被_レ下候、信良杯も未だ訳文ハ一向出来不_レ申候へ共、是ハ賢郎

と違ヒ年齢も余程長申候事ナレは、本業肝要之事ニ存候、広瀬西帰後ハ専ラ西書ニ相掛ラセ申候、兎角医者ハ療治上手ニ相成候ハでハ相叶不_レ申候事と奉_レ存候、賢郎ハ遂々ハ成業無_レ疑奉_レ存候、必御心配被_レ成間敷候、右乍_二延引_一貴答草々申上候、頓首

十月十日

坪井信道

堀内忠亮様

梧下

尚々、令闈君方野妻へ何方之御品沢山ニ御恵投被_二成下_一難_レ有奉_レ存候、宜敷御礼申上候様申出候、以上

註

・令郎||堀内忠淳・忠亮・適齋。忠寛・素堂の嫡子。坪井信道に修学。

・豚児輩||坪井信友や信良などであろう。

・忠益||大木忠益のちの坪井為春・芳洲。

・広瀬||広瀬旭莊。

・令闈君||貞、はじめたかといひ、高橋桂山の女。明治二十三年十二月三十一日歿、八十四歳。

第一〇八号文書 坪井信道書状 堀内忠寛(素堂)宛

八月廿日貴書只今拝見、如_二高論_一、秋冷御座候処、益御清寧被_レ

成御座ニ奉レ為ニ延祝ニ候、弊家無異送光仕候、乍レ憚御放慮可レ被レ下候、然ハ吟御事、本月廿日飛脚上程後物々拙躰へ御引越被レ成、研藏へ貴論之趣逐一承知仕候、豚児兼而不ニ一方ニ御思も蒙リ居候事なれハ別而油断ハ不レ仕候、此段御安慮可レ被レ下候、新来之生玄関取次、從來塾例ニ御座候へとも、令郎ハ格別之事ニ候へハ、此一条ハ相除申度存し、塾生共へも申聞、皆々同心之處、御当人より夫ニ而ハ却而迷惑致シ候間、常然衆人同様ニ致シ呉候様ニト申事ニ御座候間、本意ニハ無レ之候へ共任ニ其意ニ申候、夜中信良信友一同楼上ニ御寝かし申候、食事も台所ニ而御世話申度心得之處、是も衆と同様塾中にて同食いたし度との事ニ候、是も強而相止メ不レ申任ニ其意ニ申候、美質ハ不レ及ニ申上ニ随分弘毅之處も十分有レ之様ニ奉レ存候、遂々御成業無レ疑奉レ存候、詩文之事被レ仰下ニ候旨承知仕候、此段ハ熟考仕、尚又拙按可ニ申上候、御老母様并令闈へ宜敷御安慮被レ下候様被レ仰上ニ可レ被レ下候、荆婦両豚児へも貴論申聞候、尚宜敷可ニ申上ニ候様申出候、先ハ右不ニ取敢ニ貴酬申上度草々拝復

八月廿八日

坪井信道

堀内先生

机下

註

・令郎ニ堀内忠淳。

・研藏ニ青木研藏。

・豚児ニ坪井信友。

・御老母様ニ父忠意・林哲の配、志賀氏。

・令闈ニ忠寛の妻、貞、高橋桂山の女。

・荆婦ニ桑。青地林宗の長女。

・両豚児ニ坪井信友と坪井信良。

第一一〇号文書 坪井信良書状 堀内忠亮宛

(封上書)

「堀内忠亮様

坪井信良

簞品添呈

月迫御多用相察仕候、過日ハ參上御妨申上候、此乾躰乍ニ輕少ニ友師方到来ニ付拝呈仕候、御笑味可レ被レ下候、勿々、以上

十二月念七

第二二六号文書 大槻俊齋書状 堀内素堂宛

(端裏書)

「堀内様

大槻」

御発駕前嘸々御事多可レ被レ為レ入奉ニ察上候、扱今日矢尾板氏ヲ以長安身分之儀、伊東両人方奉レ願候處、早速御承知被レ成下、夫々思召之御細書被レ下置、御深情之程身ニ余リ難レ

有仕合ニ奉レ存候、もはや同人身分之儀者、尊君様ならてハ御托し可申上一人も無レ之、小子共大悦之余リ、早速当人呼寄伊東方も精く申含呉候処、何分不承知之由に付、尚又小生方も色々申聞候処、何分得心致し不レ申、扱々当惑仕候事ニ願可申様も無御座、捨切候仕合ニ御座候、可レ惜ハ湊家も此節断絶致候外無ニ御座ニ候、小子におゐても落涙に不レ絶事ニ御座候、強而申聞候ハハ、御国元へも参可申候得共、御老人の老母老人の方も路道に迷ひ候事ニ相成可申、扱々可レ嘆事ニ御座候、伊東も前文同意ニ付小子方此段申上置候、一御餞別之印迄、何歟呈上仕度奉レ存候処、久く不快ニテ何事も任ニ心底ニ兼候故、舶来之プロトヨヂレナム七分入菘瓶呈上仕候、是ハ御案内之通内服者一度ニ十六分氏、日々三度相用候、小子老同年空経仕候処、単ヨヂナム方者効驗相見得申候、且又菘瓶六分入、高橋玄益様へ呈上仕候間、御席御届被ニ成下度奉レ願候、病中深文ニ付、勿々如レ此御座候、以上、

四月廿四日夜

註

・長安ニ湊長安ニ篠山候侍医。天文台訳員。天保九年六月七日歿。

・伊東ニ伊東玄朴。

・プロトヨヂレナムニヨードの原液。

・単ヨヂナムニただのヨヂナム。
本状は筆跡から大槻俊斎に相違なし。宛先は堀内素堂と考えられる。湊長安歿年の状か。

第一三五号文書 林洞海書状 堀内忠龍宛

(端裏)

「堀内忠龍様

林洞海」

拝読仕候、昨日は遠方態々御枉駕被レ下成候処、他出中ニ而拝迎不レ仕失敬御海恕可レ被レ下候、扱御著述幼々精義御願相濟候ニ付、第二篇明春御梓行被レ成度ニ付而は、ヒユヘラント痘瘡篇御推録分成候薬方等、余りさつと致ニ付、穆私篤之薬方御附被レ成度、小生草稿も御座候ハハ、差上候様被レ仰下候得共、未夕草稿も無御座、今後門生中ニレットル写書致者御座候間、ボック篇文ケ急ニ為レ写差上候而も宜候、乍然御承知之通、西洋の近頃は別而牛痘計ニ相成候様子御座候故、モストも天然痘はさつと致候而、殊ニ療法之処さつと過候而、薬品ハ出候得共薬方一方も無御座候、右之通ニ而も宜候ハハ、筆耕人も貧生ニ御座候故相欲申候間、早速為レ写差上可申候、又泰然之ヒユヘラント經驗は私も写置候間、御用立可申候、一当春幼々精義一冊頂戴仕候処、未御札不申上候、又失鳩答を半斤程金老枚替被ニ仰下承知仕候、いつれ此方方為レ持

差上可レ申候、御著之精義望人御座候ハハ、御願可ニ申上候、以上

十一月十八日

註

・林洞海ニ小倉の医、天保十四年に江戸で開業。万延元年奥医師。翌年侍医・法眼。明治二十八年二月二日病歿。八十三歳。
・幼々精義ニ堀内素堂の訳本。原書は Christoph Wilhelm Hufeland (1762—1836) フォーランドの蘭訳本。天保十年冬稿了。弘化二年秋出版。第一輯は小児疾病の原病論、第二輯は痘瘡論。

・穆私篤ニモスト = G. F. Most.

・レットル = Letter 綴り。

・ポック篇 = Kokken 天然痘。

・泰然 = 佐藤泰然。

・失鳩答 = シキユータ = 毒人参。

第一三六号文書 林洞海書状 堀内忠亮宛

(端裏書)

「堀内忠亮様

差上置候

林洞海

」

其後は久敷御疎情罷過候、益御清適奉レ賀候、陳者、昨冬御門人相願置候失鳩答エキス、未夕御国許より到来不レ仕候哉、

若到来仕候ハハ、壹斤ニ而も、半斤ニ而も御分配奉レ願度、代金も其節直ニ被ニ仰聞ニ被レ下度、ヘラトナエキスも正真之品ニ御座候ハハ、半斤計相願度、書余は拝顔可ニ申上候、以上、二月廿一日

註

・林洞海 = 第一三五文書の註参照。

・失鳩答 = シキユータ = cicuta 朝鮮毒人参。鎮静剤。

・ヘラトナ = Belladonna = 莨菪。

第一三九号文書 林洞海書状 堀内忠亮宛

(端裏)

「堀内忠亮様

林洞海

過日御覽被レ下レ成候カシク丸、来四日天氣宜敷御座候へは、早朝でもオベラチーに相懸候間、伊東迄仰出可レ被レ下候、不ニ天氣ニ御座候へハ、くらく寒く御座候間、六日と相定申候、一御多用中恐入候得共、ワートル巻又々今日有孿子へ相頼候間、御覽被レ下候而何分とも乍ニ御面倒ニ御十分御加筆可レ被レ下奉レ願候、以上、

九月朔日

有合菓子巻箱呈上仕候、以上、

註

・林洞海Ⅱ第一三五号文書の註参照。

・カンクルⅡkanker 癌腫。

・オペラチーⅡoperative 手術。

・ワートルⅡWalter。洞海は天保十一年に訖し、安政三年に『窳篤児薬性論』と題して刊行。

第一四五号文書 湊長安書状 堀内忠龍宛

(端裏)

「堀内忠龍様

湊 長安」

第一四四号文書 戸塚静海書状 堀内忠亮宛

(端裏)

「堀内忠亮様

戸塚静海

奉復

華墨拝誦仕候、霖雨秋冷相催候、愈御佳適奉_レ敬賀_二候、然は過日御内話之書生御遣し被_レ下面会仕候、種々御配慮高誼感仕候、何れ近日舛堂委曲可_二申上_二候、扱又先日差上候書籍篤と御覽被_レ下度候、書余拝顔申上度、早々拝答不備、

八月十九日

註

・戸塚静海Ⅱ松平薩摩守侍医。名は維泰。安政五年、徳川家定の病篤きとき挙げられて奥医師となる。明治九年一月歿。七十八歳。

月迫御多用奉_レ察候、愈御清栄被_レ成_レ御座_二奉_二大賀_一候、陳者此福寿草昨年も献上仕候間、不_二相変_一当年も献上仕度候、生くさ白魚相添差上申候、右御頭様方江も御評議被_レ下、可_レ然之儀_二御座候_一ハハ、御上ケ被_レ下度相願申候、尤先達而御舛進之節ハ引書中ニ而、恐悦ニモ不_二罷出_一候、是亦宜敷御執計候様、被_二仰上_二被_レ下度、此段奉_レ願候、以上、
十二月廿九日

註

・湊 長安Ⅱ第一二六号文書の註参照。

日本医学学会例会記事

一月例会 一月二十三日(土)

於慶応義塾大学医学部附属病院五階集談室

一 ドイツ大教師ミュレルの著述「東京医学」(2) 小川 鼎三

レオポルド・ミュレルが日本を去って十三年を経た一八八八年に雑誌 *Deutsche Rundschau* に載せた「東京医学」と題する論著は甚だ興味がある。前回にその前半の概要を紹介し検討を加えたが今回は後半(第三、四、五章)をとり扱った。

第三章ではミュレルが明治四年東校に着任して、すぐに医学生に試問をやり、成績が全くだめと判定、全部の生徒が医学の修業を最初からやり直すべしと宣言して、日本がわに大きな衝撃を与えた。そしてさっそくホフマンと共に半分づつ分けて一週十二時間も解剖学の講義をはじめた。土曜日ごとに試験して、修業の見込ありとされた五十九人だけ残して他の者はやめさせた。(いま鉄門クラブの名簿で明治九年の東京医学校卒業生は卅一名とあるので、この五十九人の半分より少し多くが卒業できたとおもう)

ミュレルは右の学級は特別扱いにし、これと平行して正規なドイツの医科大学に近いものを日本に作ることを図り、その予科教育をドイツの *Realgymnasium* と合致させようとした。そのため数学、物理、化学、動物学、ラテン語、ドイツ語の教師を精選してドイツから迎え、或いは日本に來ているドイツ人を転勤させ

たりした。開成所すなわち南校の校長(名前をあげていないがフルベッキである)は錠前屋が本職で、日本人の機嫌をとることはかりやり、その教師の選択雇用がめちやくちやだど非難している。ミュレルの構想では医学教育は予科七年、本科五年を要し、成績優秀な卒業生を三年間ドイツに留学させて講師の資格を得させる。日本人は十五年間もかかっては大変だといったが、いま(一八八八年)は自分が主張した通りになってきた。

病院には日本がわの考える「学問のある」医者が沢山いたが、彼らは基礎的知識に欠けるので、ほとんど役に立たない。しかし解剖の助手田口氏はすぐれた人で、いまベルリンに來ているが、近ごろ欧州の医学雑誌に甚だよい論文を発表した。(田口和美のドイツ留学は一八八七年五月より翌八八年十月まで)

第四章。年配の医者や文部省の役人が抵抗したが、文部卿大木(喬任)氏がよく理解し支持したので、医学校の整備ができた。予科三年、本科五年の学則が定められ、各学年の教科内容がこの論文に載っている。予科の第一年がドイツ語、算数、地理総説、高等和漢学となっており、他の所でドイツ語を修めたものはこの学年を略し得ると但し書がついている。また本科の第三年(全体の第六年で大学の第五と第六セメステル)に *Pathologie u. Therapie* とあるのが、今日の内科総論と各論に当るとおもう。

学年制度であつて、各学年の終りの試験に及第しない者は原級に止まる。全コースを終えたとき大試験がある。外国語は専らドイツ語であつて、予科の終りには通訳を要せず、本科第二年の終りには学生がドイツ語をよく話し書くことができるようにする。

試験の席に日本の高官やドイツ公使館員が陪席したとある。

教場の改善では紙の障子をガラスに換えたり、机と椅子、スト
ープを備えたりした。図書館や薬局の整備は困難な仕事であった。
日本人に時間の観念と時間を守ることを教えた。週制度にして日
曜を休みとした。従来の日本のやり方では授業の時間割が組みな
い。

日本人の洋装はしばしば噴飯ものである。平常の生活で男も女
も体の全部または一部を人にみせて恥かしがらない。「我々にお
けるギリシアの彫刻のように」とあるが、裸で平気な点が彫刻の
ようだという意味だろう。その風習は殊に女では変ってきたとい
う。

第五章。一八七四年八月に自分らと日本政府との契約がされた。
日本がわは私どもになお続けて医学校で教育や診療をやつてもら
いたい。しかし新しい規則で長官はすべて日本人ということにな
つたから、医学校の校長はただ形式的に日本人にするが、実際は
元のままで、校長と提携してやつてもらいたいといった。その口
先に乗らず、自分は拒絶した。この拒絶が正しかつたことはペ
ルリンでドクターの学位をとつた若い日本人が一八七六年に東京
医学校の長になったのもわかる。その人は欧州だつたらせいぜ
い助手 *Unterarzt* であらう。それが自分の上に立つとは！（こ
の日本人は池田謙齋にちがいない）

ミュレルとホフマンは一八七五年十一月末で皇室の侍医に任
ぜられた。こんどは宮内省に属したわけだが、ドイツから一八七
四年の末に後任者（内科ウエルニヒと外科シュルツェ）が着いて

も、なお暫く彼らは医学校の仕事をいっしょにやり、七五年の
復活祭以後は全く医学校から身をひいた。木戸(孝允)が卒中で倒
れ、岩倉(具視)が刺客におそわれて彼らの治療をうけた。初めの
三年間の契約ができたとき彼らは天皇から日本刀を下賜された。

ミュレルが甚だ不満な一件としているのは東京医学校は彼ら
が去るや否や洋医速成のための通学生制度を明治八年五月に作っ
たことである。後にそれは別課生とよばれ、日本人教授が日本語
をもって教えたのである。別課を設けたのはミュレルの主義に
は大いに反したが、日本では当時焦眉の急であつた洋方医の不足
をそれによりある程度補い得たのであり、別課卒業生から偉い医
者がかなり多く生れたのは周知のことである。

日本人の医者はまだ実力がないのに西洋を外観的にまねる傾き
があるとして、一軒の医療器械店が聴診器二千個を売ったことや
、検眼鏡何百個がとぶように売れたことを述べて、検眼鏡の使い
方も知らないのにと嘲けるのである。

ドイツに範をとつた明治日本の医学の基礎をしっかりと据えた
ミュレルの努力と功績は確かに甚だ大きい。彼はこの論文でそ
れを誇っているのは当然だが、独善的な言動も所々に感ぜられる。
日本を去るに当って天皇、皇后両陛下は彼ら夫妻を浜御殿に招
いて、大いにその労をねぎらつたし、その他にも盛大な歓送会が
次々と開かれた。ミュレル夫妻は一八七五年十二月廿五日、横
浜をたつて帰国の途についた。

二 十九世紀後半のドイツ医学教育を探る 岡島 道夫

一八六九年に北ドイツは各州を統一する医師免許規則を施行し、在学年限、必須科目、試験の細目を定めた。当時の在学年限は十学期(五年)で、五学期終了時に医師前期試験を行い、第十学期に医師試験を受けることができた。医師試験は解剖、生理、病理、外科眼科、内科、産婦人科、衛生の七科目 (Abschnitt) よりなり、各科目は一ないし五の Teil に分かれていた。各 Teil ごとに合格が決定し、不合格のときはその Teil だけを定められた日に再受験することになっていた。

医師免許規則は一九〇一年に改正され、在学年限が一学期延長され、卒後一年間の指定病院での実地修練が義務づけられたが (Praktisches Jahr)、これが米国のインターンの母体となっていくことはあまり知られていない。試験科目は一九二四年に十四に増え、在学年限は一九二七年に一学期延長された。一九五三年の改正により医師試験は十二科目に整理され、卒後の実地修練は二年に延長されたが、このときに再試験の扱いは大きく変わり、不合格科目の数が多いたときは他科目の合格も無効となり、全科目を再受験せねばならぬという考え方が導入された。

さらに免許規則は一九七二年から根本的に改正されることになり、 bedside teaching が取入れられ、実習が一層強化されるが、その反面ドイツの伝統であった Hauptvorlesung は必須からはずされることになる。また従来すべて口答であった試験は multiple choice 方式に改められ、全国一斉に実施されるようになる。

このように十九世紀後半にまでさかのぼって歴史の変遷をみてくると、内容において米国に遅れをとってしまったことはあっても、ドイツの医学教育は医学の進歩や社会の変化に歩調を合わせようとして、二〇一三〇年間隔でその制度を大きく改革してきた事実がとらえられる。医学教育の内容をみると、現在の日本はドイツと米国の中間ではなく、両国を含めた欧米の医学という枠から遠く離れており、この隔絶の中に日本が今抱えている矛盾が発生しているようにも見受けられる。

このような隔絶が明治の初期からあったものなのか、それとも百年の歳月のうちに形成されてきたのか、この辺の事情を明らかにすることが今後の課題として残されている。過去の日本の体質を正しく把握することが、将来の改革を考える上で極めて重要であると思われる。

二月例会 二月二十日(土)

於朝日講堂

伊東玄朴歿後百年記念講演会

一 お玉ヶ池種痘所と種痘法の伝来

小川 鼎三

伊東玄朴は安政12年12月28日に生れた。これを太陽曆にするとい八〇一年二月十一日である。これは十九世紀の第一年である。亡くなったとき数え年の72歳であるが、満歳70歳と9日ということになる。ヨーロッパの医学の歴史をみると、同じ年に生れた人々に、ドイツ医学の興隆の基を築いたヨハネス・ミュラーがいる。

これから、私は日本に、ジェンナーの牛痘接種法がどういうふうにして伝わってきたか、それから、お玉ヶ池痘種所が江戸に設けられて、結局それが現在の東京大学医学部に続いたこと、それに関した伊東玄朴の大きな功績を述べる。

英国のジェンナーが牛痘接種により人の天然痘を防ぐ方法を発見したのは一七九六年である。この年の五月十四日にフィブスという8歳の少年に乳絞り女のサラ・ネルメスの手にできた牛痘の汁をとって植えた。この少年は植えてから7日目に発病、9日目に食欲不振、軽い寒気、頭痛を訴え、夜中に少し不安状態であったが、10日目に全快した。その後、9月1日に人の天然痘の種を植えたが何も変化が起らなかった。数ヶ月後に再び人の天然痘を植えて変化がなかった。これが実験成功の第一例である。これをロンドンの王立協会に手紙で報告したが、その時は公表されなかった。それから2年後の一七九八年にロンドンで、前述の例の他に20例近くの経験を述べた一冊を自費出版した。

日本ではジェンナーの第一例が自分の息子にやったといわれているが、これは誤りである。一七九八年の本には8歳の健康な少年とあるだけで名前は書いていない。そのため、この間違いが起ったと思う。他の子供達には名前がついているのに第一例だけは名前が書いてないのはちょっと不思議である。

九八年の発表は大きい反響をもたらした。初めには、はげしい反対論もおきた。そのことは当時のイギリスの風刺画でもみられる。牛の病気を人間に植えたために、人間に牛の角が生えてくるといった絵を画いている。しかし、間もなくその有効性は世界に

広く認められたのである。ただ、嚴重な鎮国を布いている当時の日本ではその方法をとり入れることが甚だむづかかった。結局、日本で牛痘法が成功するのは嘉永二年（一八四九）、長崎においてである。そして忽ちに全国に広まった。この長崎での成功、その後の全国への普及に伊東玄朴の果たした役割はきわめて大きい。また、種痘法の成功、効果を土台にして、当時、漢方医たちからひどく圧迫されていた蘭方医たちは反撥して力をのばして行った。この時、伊東玄朴の役目は非常に大きかった。

ここでは、まず種痘法がいつ頃どうして日本に伝ってきたかをみると、現在、知られているところでは、長崎のオランダ通詞の馬場佐十郎が享和二年か三年（一八〇二〜三）に、商館長のヘンドリック・ゾーフから牛痘法の話聞いたのちになって書いている。それが日本人が牛痘法を知った最初だろうとなっている。長場佐十郎は語学の天才として有名な人物である。オランダ語の他に英語、ロシア語もできた。馬場佐十郎のちに北海道でロシア語の簡単な牛痘法の手引書を入手した。それは一八〇三年にペーテルブルグで刊行したものである。彼はこれを訳して文政三年（一八二〇）に「遁花秘訣」と題する一冊にまとめた。中国で天然痘を天花といっただけだったのでその花を遁がれる秘訣という意味である。このロシア語の手引書は中川五郎治が一八〇七年にエトロフでロシア人に捕えられ、五年間シベリアを流浪していたあいだに入手してきたものであった。それを、佐十郎が松前に出張してきた時に見つけて、当時、函館に捕えられていたロシア軍人ゴロニンとその部下のムールに質問しながら、訳した。この遁花秘訣は口

シア語から日本語に訳された日本で最初の本であると同時にジェンナーの種痘法を述べた最初のものである。これは一八二〇年の作である。

隣りの中国では一八〇五年に英国人の医者ピアソンが広東で牛痘接種を始めている。そのあと中国では特に邱浩川が熱心はこの方法を研究し、十余年のあと「引痘略」という本を出した（一八一七）。従って、中国大陸經由の牛痘法の知識も日本に入り、漢方医の中にもこれを知っていた人がいたに違いない。

日本に牛痘法の知識が入り、嘉永二年に成功するまでの間、日本ではどういう種痘法が行われていたのだろうか。長崎では一八二三年に來日した有名なシーボルトが牛痘苗をもってきて日本人の子供に植えたが、成功しない。その後、彼は六年間の長崎滞在中に再び痘苗をとりよせて試みたと思うが、やはりだめであった。シーボルトが大事件を起して日本を追放されたあと、しばらく出島のオランダ商館に医者 の 來任がなかった。一八三九年に來たりシュールという蘭館医も牛痘苗の接種をしたが、これも不成功に終わった。つまり、パタビアからの長い航海の間に牛痘苗が古くなり腐敗したのである。それで人痘接種、つまり、軽い天然痘から種を取って、それを植えるということは非常に古くから行われた方法であるが、特に、日本では一七四〇年代に支那から長崎に來ていた杭州の李仁山という商人により、人痘接種法が伝わった。しかし、天保年間、つまり、一八三〇年代に、日本でいう西洋式の人痘接種、人の天然痘から種をとって、腕か脚に傷をつけて植える方法が少数ながら行われた。支那式の人痘接種は人の天然痘

のかさぶたを粉にして、鼻の中に吹き込む方法であった。英国でもジェンナー以前はかなり盛んに人痘接種が行われた様子である。一八三〇年から一八四〇年代になると、日本の一部の蘭学者たちは外国で非常に良い成績をあげている牛痘法を何とかしてとり入れようと焦慮していた。その活路を切り開いたのが伊東玄朴たちであった。

玄朴は天保二年（一八三一）に鍋島藩の藩医となっている。嘉永元年（一八四八）に出島の蘭館医モーニッケが牛痘苗をもって來日し、これを試みたが不成功であった。この時、鍋島藩医榎林宗建が痘苗はかさぶたを取り寄せた方が成功しやすいだろうと進言した。かさぶたが到着したのが嘉永二年で、早速、これをすりつぶして植えたところ、榎林宗建の息子の建二郎に植えたのが成功し、皆が大変に喜んだ。それで長崎で多くの子供に植え、その翌月に藩主の鍋島直正が宗建を佐賀に招いて自分の息子淳一郎（直大）や貢姫らに種痘させた。長崎で成功した痘苗が江戸在住の鍋島藩医である伊東玄朴のもとに十一月十一日に達した。玄朴は早速、藩邸に住む子供たちに接種をした。また、小児科医の桑田立齋に痘苗を分与した。

当時の医学界は漢方が官学であるため、漢方医がつよい勢力を持っていた。そして、新興の蘭学に圧迫を加えていた。漢方医の中心人物は江戸の医学館を世襲で主宰している多紀氏であった。嘉永二年三月、「幕府に仕える医官は外科と眼科の外は西洋流の医学を用いてはいけない」という命令が幕府から出た。その他、洋書の輸入や翻譯本の出版も幕府の許可を必要とする規則を作っ

た。これは勢力のあった多紀氏が幕府を介して強い圧力を蘭方医にかけてきたのであった。その圧力をはね返したのは種痘法の効力をふまえた蘭方医の反撃であった。その反撃の先頭に立ったのが伊東玄朴であった。

お玉ヶ池種痘所を作ったきっかけは安政四年（一八五七）三月、北海道での天然痘流行に対して幕府は種痘医を公募し、派遣した。このことが江戸での種痘所を作るきっかけとなったと思う。京都、大阪では早くから除痘館ができ、一般に種痘が行われていたが、江戸では將軍のお膝元であり、医学館の目が光っているために、種痘所を設けることも困難であった。それを突き破ったのが種痘所の設置であった。その時の老中の一人が佐倉藩主堀田正睦であった。進歩的で洋学を好む人であった。その下に有力な官僚として、川路聖謨がいた。この人達が北海道に種痘医を送ることを実現させたと思う。

その好機を逸せず、伊東玄朴、戸塚静海、林洞海、三宅良齋らの蘭方医約十人が下谷練堀町の大槻俊齋の家に集まり、種痘所を作る相談をした。そして、川路聖謨の名前で聖謨の拝領した、お玉ヶ池の土地で種痘所を開業して良いかという伺い書を安政四年十二月に幕府に提出した。つまり、勘定奉行が自分の土地を伊東玄朴に貸して、江戸の市民に種痘をやって良いかと伺ったのである。それに対し、老中堀田正睦は翌年一月十五日に許可を与えた。つまり、これは幕府の要人である堀田正睦と川路聖謨、それに政治的手腕に富んでいた蘭方医の伊東玄朴の三人の兼ね合いの事業だったと思う。この許可のでた直後に、堀田正睦は日米通商条約

締結の勅許を得るために京都に向い、川路聖謨もこの年五月に失脚している。また、安政四年二月に反対派の有力者であった多紀元堅が亡くなり、同年十月に多紀安良が亡くなっている。従って、この種痘所の設立は偶然にうまくいったといえる。

幕府の許可がでたので、江戸の蘭方医たちが金を出し合って五百八十両あまりを集めた。その大部分を建物にあてて、神田お玉ヶ池松枝町続きにある川路聖謨の下屋敷の中に私立の種痘所を開いた。安政五年の五月七日である。伊東玄朴の門人、池田多仲（玄仲）が留守居役としてそこに住みこみ、他の蘭方医たちが手分けをして、種痘、診察、鑑定を分担した。ここは種痘所といっても、実際には江戸の蘭方医が集まって西洋医学を研究する場所であり、漢方の医学館に対抗するための橋頭堡であった。これが、のちに発展して東京大学医学部となった。

お玉ヶ池種痘所がはじまって間もなく將軍家定の病気が重くなり、漢方医だけの侍医では手がつかなくなり、急に蘭方医の伊東玄朴と戸塚静海が奥医師に任せられた。それが安政五年七月三日であった。幕府が正式に洋方医を侍医にした最初であり、同時に嘉永二年の蘭方禁止令は解かれたのである。そして、四日後の七月七日にさらに四人の蘭方医（竹内玄同・坪井信良・林洞海・伊東貫齋）が奥医師に任せられたが、その日に將軍家定が亡くなった。しかし、六人の蘭方医はそのまま奥医師にとどまり、西洋医学の勢いが急に伸びた。

ところが好事魔多しで、せっかくの種痘所が設立後わずか半年で、安政五年十一月十五日の未明に神田相生町からおこった火事

で類焼してしまつた。それが神田川をへだてた和泉橋通りに翌年の九月に復活した。この時、多額の寄附が銚子で醤油業をいとなんでいた浜口梧陵からでて、そのおかげで復活ができたといわれる。

種痘所はお玉ヶ池には半年ぐらいしかなかつたが、その後の大きい発展を考へて、お玉ヶ池種痘所跡という記念碑が松枝町に建てられている。

最初、私設で出発した種痘所は一八六〇年には幕府の直轄すなわち国立となり、その翌年には西洋医学所と改称、さらに一八六三年に医学所となつた。この名前の変遷をみても、種痘だけをやっていたのでないことがわかる。西洋医学所となり、また西洋の二字がはぶかれたことは医学の本当のものが西洋にあるという考へ方があつたと思う。

医学所とよばれていた時に幕府が倒れ、維新後、明治政府がその医学所をとりあげて大学東校を明治二年に作り、それがいくたびかの変遷をへて、現在の東京大学医学部につづくのである。

以上、種痘法の伝来とお玉ヶ池種痘所の成立という仕事で伊東玄朴が非常に大きな役割を演じていることを申しあげた次第である。

二 伊東玄朴の人と交友

次号に掲載します

緒方 富雄

三 蘭学とその周辺

司馬遼太郎

三月例会 三月二十七日(土)

於順天堂大学医学部九号館六階集談室

一 戸塚柳溪と静甫(静海より兄柳斎への手紙) 戸塚 芳男
近く、原著として発表の予定。

二 平田篤胤の「志都乃石室」を読んで

酒井 シツ

平田篤胤(一七七六一—一八四三)は国学の四大人の一人に数えられているが、篤胤は他の三人と違って宗教、洋学と広い範囲に興味を持ち、それに関連した書物を残している。

ここにとりあげた「志都乃石室」はまたの名を「医道大意」といって、文化八年に弟子に医道を説いたものに、のちに少し手を加え、刊本としたものである。

篤胤は森羅万象がすべて神のみ心によるものであるから、あらゆる現象を理解し、物の道理を知るために、神および物の由来を知ることが肝要だとしている。

医道大意も、最初に古事紀、万葉集、日本書紀などから医術に係りあることを引用し、医術を司る神は大穴牟遲命と少彦名命であり、この神々の業績を述べている。これらの神々のいた場所が石見の国の志都の岩屋であるので、表題を「志都乃石室」としたと推定される。

この書には篤胤の医術、蘭学、漢方に対する考へがよく現われている。つまり、日本は神産巢日御祖命の作つた国であり、外国

とは自らから違つて、もともとおおらかな、物案ずることもなく、悪疫も流行しない国であつたところ、国柄の悪い漢から仏教、学問、医術が伝わり、日本の質も悪くなつたという。そして、皇国医学を忘れ、和漢の区分もなくなり、人の質も悪くなつたとしている。

また、蘭方に対しては、オランダが物事を合理的に考え、科学が進歩し、医薬も効能あるものが多いことを認めながら、オランダ人は世に真の神がいること、人智に限りあることを知らず、小理にこだわり、幽神の大義を悟らず、そのために、理論は窮屈になり、わが古道の妨げになることも多いとしている。

しかし、ここで蘭方入ることを拒否せず、利点の多い時には害となることも少くないのが世の中の常であり、神がそうさせることだとあっさり認めている。

一方、漢方、仏教に対しては痛烈に批難している。そして、近年、古学の盛んになるに従い、純粹な皇国医学が行われるようになってきたことは喜ばしいといっている。これからみて幕末から明治にかけて、一時、隆盛になつた皇国医学のはじまりはこの辺りにあることがわかる。

さらに、医の由来を考証している。醫の字はもと鑿であるとし、病氣はすべて邪神の所為で、癒すには正しい神の力によるものである。病人はこのことを信じ、呪禁をすれば病氣が治るとしている。もつとも古代では病人は呪禁だけで治つたが、近頃のように入心人が狭しくなると、呪禁を信じないために薬も用いなければいけなくなつてしまつたと言ふ。従つて、今の医者には呪禁を学

ぶ必要はない、薬の使い方をよく学べば良いと述べ、また一般人が呪禁をするからといつて非難することはないと言つている。

また、医者風の風貌について述べている。医者は医薬の知識を充分に持つと同時に風貌もきちんとする必要がある。それは本来はどうでも良いと思われがちだが、患者が信ずることが治療効果をあげるから、留意する必要があるとし、いづれも患者側の心理状態が治療効果に影響することを注意している。

篤胤はたびたび漢方、仏教を非難しているが、当時の町医者がいかに質の悪いものであつたかも記している。この頃は「デモ医者」といつて他に使いものにならない人間が医者になつたという。そして、次のような川柳を引用している。

かごは無点、カナ付は内で読み

康本は駕にのる時はかり入れ

とどめをば他人へゆずる七かげん

変というにげみち医者は明けておき

脈よりも足もとを見て医者にはげ

篤胤はこの書から見る限り、極めて現実的な、合理的なひとで、古学を学び、それから類推して理論を發展させるため、牽強附会になり、当然、矛盾を生ずるが、そこは神の所為、御心で片付けている。しかし、彼の強引な説も現実肯定の立場をとり、彼特有の「……………でござる」といつた断定的な言いまわしは説得力を持つ、従つて、矛盾をすべて神の恩召で片付けるのに反対した人、牽強附会に反発を覚えた人、考証に徹しようとした国学者が篤胤

を非難したことも解るが、戦前まで、一つのイデオロギーとして利用されたことも理解できる。とに角、強烈な、バイタリティに富んだ人だという印象を強くした。

五月例会 五月二十二日(土)

於慶応義塾義塾大学医学部北里図書館第一会議室

一 「鶴齋遺稿」について(一)

大島蘭三郎

原著として本誌に収載。

二 富士川游を語る(4) その生活、趣味、嗜好、娯楽

佐藤 美実

一 生活 先生の考え方や行動はあらゆる面で今日でいう「合理性」の言葉で現わされる。特にこの点生活について明に出ている人は働かざれば食うべからずと口にはせられないがその考は終生守っておられた。故に富裕の家に養子にも行かず、資産家から妻を迎えて物質的援助を受ける安易な方法もとらない。たまたま郷里のものが先生をたよって訪れて助けて貰いたいといつても金品を恵むことはしないで自らの努力で生きることを考えてやり、つまり仕事を与えた。即ち職を与えて食を与えずというやり方であった。身分不相応の生活は自他ともに許さず貧乏なれば貧乏生活をし、豊になれば豊な生活をする。だから先生の生活を見ておるに質素なところもあり、実に贅沢に見えるものもあった。

既に述べたように幼少の頃を広島県の片田舎で生い立ち医者の子

とはいえ学者風の父をもつ家庭の子として育ち住居も堂々たる邸ではなく普通庶民のものの程度であり、私の両親の代々の生活とは余り違はないものと思はれるから大したものではなく、野菜や米麦を主食とし、近くに安川という川があるからそこからの川魚や海も比較的に近かったからたまには海の魚も食饌に上ったであろう。木綿の和服に草鞋、草履又は下駄ばかりで小学校から中学の始めまで二里の畦道を朝晩通学して少年時代は暮した。

二十二才で上京して以来住居は全く東京に移り、歐洲留学の期間を除いてはその生活は殆ど東京を中心とせられた。上京直後の生活は恐らく貧しいものであったであろう。生命保険会社の月給一円と中外医事新報からの僅な手当が生活の基本であったであろう。しかし合理的に適切適応の生活方式をとられたことと思う。

始め東京のどこに居を定められたか、またどんな生活をせられたかは只今私は詳にすることは出来ない。明治二十五年十月伊藤カズ子嬢と結婚せられてからは一戸を構えられておられることは明らかである。それは明治二十六年の春に末弟戴の養父天野星夫宛の手紙が下谷区中根岸八十一番地の住所であることから考えられる。明治二十八年秋には本郷区元町二丁目四十七番地に移転し、明治三十三年九月帰朝してからその翌年の三十四年十一月に本郷西片町九番地(滝廉太郎一家の住んだ家)を購入、居を定められたが此の家こそ先生生涯の中で最も華やかな活動時代の住居となり、日本医学史完成の家である。更に明治四十五年秋鎌倉雪ノ下に一家をもち、始めはこと西片町とに寝泊りしていたが、後には東京の家は仕事場とし専ら鎌倉に起居生活して晩年に及び、

鎌倉で此の世を去られた。当時鎌倉東京間三時間、二等車で通うとは云え普通の人にはなかなか出来ないことであるが何等不平苦痛の声も聞かず淡々たる姿で車中で治療新報の原稿作りや独乙の医学雑誌を読みながら退屈せずに時間を過ごされた。

大正十三年中山大陽堂(化粧品店)が大阪に中山文化研究所を造りその所長に迎えられた。次いで同十四年頃に東京にも出来た。(此の両研究所は後に東京のみの一つになる)この研究所長の仕事が先生の後半生の生活主体である。そして昭和十五年十月始め頃病に倒れるまで鎌倉からここに通った。風呂敷包を持ち道路の周囲を注意しながら夜新橋駅までたどたどしい歩を運ぶ晩年の姿が今もなおわが眼前に浮ぶ。ここに先生生涯の生活上の恩人として三人を挙げる。第一は原田貞吉氏、氏の招きが先生を東京に移り住む原動力であり、氏の経営の中外医事新報社からの給与が先生の東京での生活の根拠であり活動の源泉であった。なお原田貞吉氏の援助により海外留学の資を得たことは先生の生涯を大ならしめた一因である。

第二は中山太一氏である。氏が中山文化研究所を設けその主任として充分な生活費と活動資金を惜しみなく提供して思う存分先生後半生の活動をほしほしにさせられた。

第三は小田平義氏である。氏は先生門下生として大をなした人であるが終生先生のそばにいてその活動の援助をなし物心両様より先生につくした人で、氏なくば先生後半生の活躍は余程制約されたことと思う。

大正七年五月私が先生を訪れてから先生の終焉までの私の眼で

見た先生の生活を述べる。既に述べたように先生の毎日は読書、原稿書き、講演(説教)であった。家庭内で他人との応接はしない主義であったので私は家庭内の生活の様子は余り知らない。鎌倉を訪問しても先生と話して帰るだけでカズ子夫人にも二三度お目にかかった位である。しかし家は清潔で静かであった。衣食その他一般生活方式は概して質素で清素の感じをもった。食事も粗末な野菜食を主としてとられたという。日頃よく聞かされたのであるが、私は毎日自分で靴を磨いておると、このように身の廻りにひと手を借ることはなかったようである。しかし家を一步出ると食事その他一般に贅沢であり高級であった。中山文化研究所の昼食も地下のレストランからとり寄せ、当時は鳥肉は高級の食品であったがチキンカツをよく摂られたという。よく旅行せられたがいつも二等車又は二等寝台車を用い当時としては贅沢なものでポリーに常に多額のチップを与え、上客であった。(その頃客車は一、二、三等に、戦前後は二、三等に区別されていた。)

又宿はその土地での特級のもので室は特等のものであった。京都では終屋、仙台で針久、名古屋で志な忠、大阪で瓢の家、福岡で水野旅館、広島で官島の岩惣等当時の華族、財閥、陸海軍の泊る宿であった。そして多大の茶代を宿に与え、女中等の使用人には眼をそばたてる程のチップを与えたので先生と同宿するとかみが出迎え以下女中番頭等下えも置かぬ接待であったのを思い出す。高級贅沢な風はわれわれ貧乏人からは見られたが文化生活を意図せられる先生にはその収入に応じ身分相応の生活をしておられここに先生の生活の合理性を見る。しかし晩年は日華事変の

発展とともに世相日一日と深刻困難となり生活形式も次第に窮屈となり、白米、砂糖、味噌、醤油の入手も難しくなった。この時小田平義氏は色々の手段を購じて物資の供給に努め不便なくしたのであった。かく生活形式は困難となり、知己友人は次第に死に絶え、共に語ろうものは僅に日本医史学会会員や郷里広島市の旧友のみとなり、世は戦争一色に塗りつぶされた中に唯だひたすらに信仰に心の安住を求められる老境の姿が先生最後の生活として今日の私の心に残っておる。

二 趣味、嗜好、娯楽 この標題について先生を眺めた時にわれわれ凡人としてまた一般大衆の常識から見てこれというべきものが見あたらない。われわれ俗ぶつから見ると何が楽しみで此の世に生きておられるのであろうかと思つた。絵画、彫刻、骨董など愛玩するマニアでもなく、音楽はわからないし、家や庭づくりの趣味もなく、盆栽をいじくることもなく、和歌俳句も作らず、歌舞伎、演劇、相撲に興味はなく、酒、煙草はきらいだし、女の興味もなく、勝負事がきらいなので囲碁、将棋、トランプ、マージャン、カルタ、玉突をせず、スポーツはやる気もないし、見るのも嫌い、ただ料理に対しては関心をもたれ、それに就いての知識も持たれ、これを玩味し一家の言も持たれた。また常に旅行しておられたので旅行は好きであつたのであろう。殊に京都、広島によく行かれた。京都には藤浪鑑氏や佐伯理一郎氏、半井朴氏等心の触れあつた親友があり、愛郷心の強い人であつた上に友人知己が多かつた関係広島市には晩年まで殆ど毎月のように行かれた。また毎年正月の始めに必ず伊勢神宮に参られ、これは晩年まで数

十年つづいたがここで岡山からの赤沢氏や掛谷氏、広島市の三宅氏その他と落ちあつて参詣後五十鈴川のほとりの茶店で食事するのが一つの楽しみで私も小田平義氏とともに何回かつきあつたことがある。

既に述べたように読書と原稿書きで明け暮れた日常であるし寡黙謹厳の人であつたが時たま心穏やかな安らぎの時に部下のものや氣心のおけない人々とうれしそうに談笑し、ユーモアを交えた楽しい語らいに時を費すことがあつた。若い時に寄席にしばしば立ち入つた時の影響か、その言葉には面白おかしい罪のない、憎めない、ひにく、ひやかし、風刺、人を小馬鹿にしたものが興に應じて飛び出した。この時など先生のたのしいひとときであつたであらう。

しかし先生のほんとうの趣味、嗜好、娯楽は結局この軸にかかれたものであつたであらうと私は思惟する。「閉門即是深山読書 随处浄土」

第72回日本医史学会総会追加討論

去る四月三、四日の両日、東京、神田一ツ橋講堂で開かれた日本医史学会総会の追加討論をここに掲載する。17巻1号に所載した抄録を参考にされたし。

× × ×

明治三年の加賀藩の人体解剖

演者 酒井 恒

討論者 小川 鼎三

明治三年に金沢における解剖で防腐が施され、血管に赤と青の色系が注入されたことは甚だ注目に値すると思う。明治二年八月に東京の医学校で特志解剖の最初として知られている美幾女の解剖が二日間で行われたが、防腐は施された様子がない。金沢のは一ヶ月もかけて解剖したというので、かなりよく成されたものと思う。

江戸時代に作整された木製人体骨骼模型(木骨)について

演者 蒲原 宏

討論者 中山 沃

新宮涼庭の「身幹儀説」というのは残っているのでしょうか。私は涼庭の門人備中の医山田成器の目録中に名前を見たが、遺族の手には残っていない。

解答者 蒲原 弘

新宮涼庭の「身幹儀説」の原本の所在は不明だが、原田謙太郎

氏、山本四郎氏の論文に全文が引用されている。

「遁花秘訣」の一写本について

演者 安井 広

討論者 小川 鼎三

遁花秘訣が新たに一冊みつかり、しかもそれは終りに図を有するもので甚だ興味がふかい。利光仙庵の学問上の系統を知りたいと思う。

討論者 松本 明知

安井先生から本書のコピーを頂戴して、函館本、狩野本、国会本、富士川本、武田の宇田川本などの三種の写本と比較してみたが、図の附されている点などから、富士川本、宇田川本と同列に並ぶ写本であると思う。この点からも本書は「遁花秘訣」の研究に極めて重要な意義をもたらすものと思われる。

久居藩における洋医木村家について 演者 茅原 弘

討論者 小川 鼎三

木村公幹について初めてわかり、ありがたく存じます。オランダ正月の画をかいた市川崑も伊勢の人とあるが、この人のことも何か分っていたら承りたい。

解答 茅原 弘

市川崑についてはまだくわしいことは解っておりませんが、津藩のオランダ方に市川清之助と云う人がおり、この人が崑の子供ではないかと思つて調べております。市川崑は津で出版された磬水夜話に挿画をかいている。

越後新発田藩の口科医佐藤家の記録について

演者 本間 邦則
討論者 大矢 全節

木骨に併せて木歯のことは外国医家にとって非常に興味のあることで、日本人の器用さが木骨の製作となり、木歯という形式で日本人独特の発達を示してきたが、西洋の義歯、即ち、ゴム床義歯の輸入により、この木床義歯がすたれてしまったことは遺憾なことである。今回22回国際医史学会でもこの木床義歯のことについての説明を求められたが、その当時の木歯の技工師たちは大部分職人級の無学の徒で、口伝だけにたよって、その詳しい学問的方法などの記載を残していないし、また木歯を装着している者も故人となったものが多いので、この方面の研究が非常に難しい。幸にも大阪の小野教授の門下でこの方面の研究を発表している方がある。只今の演説はその数少ない研究に新しい一つの重要な一節を加えたものとして、有難く敬聴した。

ダランベールの業績について

演者 巴陵 宣祐
討論者 古川 明

ダランベールが有名な医史学者であることは各種の伝記辞典に掲載されていることで証明される。彼の肖像は一種しかないというところが *Grimal* の伝記辞典に記されている。

パピルス・エドウィン・スミンからヒポクラテスの外科

学の推移

演者 鈴木 哲哉
討論者 大塚 恭男

カルディアの語は心臓であると同時に胃の一部を指す。プラボイらの本によると、エジプトでは胃と心臓には吻合であったと考

えられていたようであり、このあたりにもエジプトのギリシャへの影響があるのではないかと思われる。

解答 鈴木 哲哉
エドウィン・スミス書には胃について書いてないので解らない。ただ、この頃は腱と血管と筋肉の区別がよくつかなかったようである。

第三高等中学校医学部の講義内容

演者 大滝 紀雄
討論者 蒲原 宏

当時の教科書の原本は何か

解答 大滝 紀雄

現在はまだわからない。

討論者 瀬戸 俊一

私の父が第一高等中学校に入学し、千葉医専に変わってから卒業した。そのノートは毛筆で、図式は色彩まで加えてあった。毛筆によるノートと現在の大学の講義と比較して如何なる方策による講義か興味をもっている。

日本の医師免許制度について

演者 安芸 基雄
討論者 今田 見信

明治9年に各県で免許試験が実施されたところ、明治8年に京都と東京で実施され、その合格者が山崎文庫にある衛生年報第四号に掲載されている。

東京受験の第一号は中津藩・東京在住の小幡英之助で第一回は小幡一人しか受けなかつたようである。この小幡は四番目に書かれているから、一番から三番までは京都受験の人のようである。

昭和四十五年度医史学関係論文目録 (二)

医薬ジャーナル

医薬ジャーナル社

回顧・医薬界一九六〇年代

一月号

資料・一九六〇年代の保健医療関連年表

一月号

薬学生のための薬学史概説

高橋真太郎 二月号、三月号、四月号、五月号、六月号、七月号、九月号

わが国近代産業界における製薬

宗田 一 十一月号

東西交渉史のくすり

宗田 一 十二月号

ガンセンター―新潟病院医誌

脊髄腫瘍への挑戦者たち

蒲原 宏 9巻3号 二八一―二八五

今日の医学

東洋の医薬神―黄帝と神農

宗田 一 42号

わが国医師の地位の変遷

宗田 一 44号

心

ボンベ先生

平凡社

渡辺 保

七月号 (昭45・7)

信濃教育

特集 山極勝三郎先生

一〇〇八号

昭和45年11月号

恩師追想

いばらの道

山極勝三郎先生の業績

山極勝三郎先生と東京大学医学部病理学教室

故山極勝三郎博士のタール人工癌実験成功について

ての生物学的意義

教育者としての山極先生と曲川俳句を語る

山極博士の著書と研究論文について

山極先生の思い出―半世紀前の日本病理学界と先生

山極先生の西片町のお宅

山極先生のおもいで

山極先生のこと

恩師山極勝三郎先生の追憶

山極先生の追憶

恩師山極先生の思い出

山極博士をしのぶ

父と私

父を思う

思い出すこと

山極勝三郎先生の生家および養家について

山極勝三郎博士と上田郷友会月報

山極先生の人となり

山極勝三郎博士の業績とノーベル賞

緒方知三郎

釜洞醇太郎

吉田 富三

太田 邦夫

小室 英夫

長沢 米蔵

小林 貞次

岡 治道

金沢 庸治

緒方 富雄

高村庄太郎

福田 保

大野 精七

足立 修

東 俊郎

山極 三郎

別宮 梅子

山口 花子

大谷 貞男

柳沢 文秋

佐藤 佳昭

関 二三雄

山極先生の書簡にふれて
偉人の映像

山極勝三郎の『明治』

山極勝三郎先生

本校クラブ活動と山極勝三郎先生

郷土史クラブの子らととも

山極先生の伝記研究の伝記研究の思い出

山極勝三郎博士略年譜

山極博士の著書および論文目録

山極博士についての研究文献目録

花園大学研究紀要創 (刊号45・3・31)

梶原性全とその周囲

法政史学

“Dr Heinrich Bürger”の生涯について

第二十二巻 九五—一一三

十全同窓会々報

人体解剖学模型

酒井 恒

金沢大学同窓会誌

YOKOHAMA Medical Bulletin Vol. 2, No. 1~2,

Shinnin Kawaguchi und seine Arbeit Kaishihen

T. Tsusaki 37~41

寺沢 嘉和
横山 公俊

宮下 勅夫

青山 茂樹

黒坂 周平

石川 好一

花園大学

山田 重正

三〇九—三四一

石山 禎一

書評

緒方富雄氏著『日本におけるヒピクラテス賛美』を讀みて

第一八回日本医学会総会の公開講演の一つとして、「日本におけるヒポクラテス」と題する緒方富雄氏の講演が行なわれた(一九七一年四月五日、国立教育会館にて)。これと同時に、梅沢記念館では「日本人とヒポクラテス画像展」が開かれて、同講演でとりあげられた数多くのヒポクラテスの画像と賛が一堂に陳列された。これら資料の写真とその研究の詳細をまとめられたのが表記の著書であり、「日本のヒポクラテス画像と賛の研究序説」という副題がついている。ここにのせられたおびただしい数にのぼるヒポクラテスの画像と賛とは西洋医学の末技だけを追い求めることに飽きたらず、その背後にあるエトヴァスを追求しようとした先人たちの貴重な遺産といふべきであろう。

その皮切りに大槻玄沢の名がみえるのも、彼の「採長補短説」をめぐる論議との関聯において意義深く思われる。ほかには桂川甫賢、宇田川榕庵、坪井信道らが特にきわ立った存在であるが、中でも甫賢と榕庵は自ら画筆を執ったという点で一層興味をひく。二人が余りにも対称的なヒポクラテス像を画いているからである。それが原画の相異によることは云うまでもないが、原画を撰択し

たのはほかならぬ作者自身である。因みに榕庵の方の原画は分つたが、甫賢のそれは未詳であるという。甫賢の画いた「少し左向きでアコヒゲとクチヒゲの豊かな像は思索するヒボクラテスであり、榕庵の「ヒゲの濃い真左向き禿頭老人」の像は行動するヒボクラテスを示しているように筆者には思われた。

著者はこれら画像と賛に周到な考証を加え体系を与えられたのであるが、なお今後へのこされた問題も少くない。たとえば大槻玄沢に感銘を与えたヒボクラテス図を載せているという「コルネイキの書」とは、はたして何か、というような大きな問題が未解決である。医学史と美術史の二領域にまたがるこの難テーマにとりくまれ、多くの新知見を発掘された著者に深い敬意を表するとともに、将来、残された問題の解決を俟って、更に御教示の筆を執られるよう切望するものである。

発行所・日本医事新報社 頒価八〇〇〇円

(大塚恭男)

変貌する労働環境(労働科学叢書28)

三浦 豊彦著

本書は永年にわたって、この方面の最高の権威者である著者が精力的に集められた労働環境の資料を整理し、まとめられたものである。その内容は、粉塵環境、有害物環境、高温環境、および局所振動環境の4章に分かれており各環境の歴史的变化を述べ、終りに今後の問題点をそれぞれについてあげている。内容を理解するに必要な図や表も多いので、労働衛生の専門家でなくても、この方面に関心を持っている人ならば誰でも理解できるほど、平易に書かれている。

勿論本書は、労働環境の変遷を医学的にみた場合を主眼点にして書かれたものであるが、環境が改善されるにいたるまでの労働者の運動やこれに抵抗する経営者の働きかけ、さらにこれに関連する社会情勢なども、かなり収録されている。また第一章の粉塵と第三章の高温環境では、これらの環境で長い間働いた人々との対話の記録(聞き書き)がのせられている。これらは、当時の労働者の生活および労働環境を説明するのにまことに適切な資料であると同時に、本書を学問的に偏せず、誰にでも読み易くしている大きな原因となっている。このような細かい配慮は、他の章においても随時みられる。

本書は三百六十頁にわたって書かれていが、第一章の粉塵環境が、その半分をとり、残りの頁数を有害物環境、高温環境、局所振動環境が大体三分に分している。これは労働環境の中で占める粉塵の重要性からみて当然であろう。文献も豊富に記載されているので、この方面の研究者にとっては、欠くことの出来ないものである。

筆者はこれを通読して、日本の労働環境の改善がいかに遅々たるものかを知り、今後これを改善するには、労働者の団結がいかに重要であるかを改めて知った次第である。

(杉田 暉道)

片桐一男氏著『杉田玄白』を読む

待望久しかった片桐一男氏の『杉田玄白』が吉川弘文館の人物叢書の一つとして刊行された。平素より著者の温厚な人柄に親し

み、その重厚な学風に敬意をいだいている一人として、この本の門出に心からなる御祝いの言葉を申しあげたい。

この叢書の刊行の辞にあるように、本書は杉田玄白の「正確な史実」を綴ることを第一の目的としている。本書はよくその目的をはたし得ているが、しかも通読してみても非常に魅力のある文章となっているのは、史実の客観的描出の行間にはじみでた著者の杉田玄白観の故であらう。

特に感銘の深かった一つは、『解体新書』の企画より上木に至るプロセスであり、いま一つは玄白と建部清庵との交流である。いずれも有名な話であるが、このような形で通観する機会を得てあらたに教えられる点がまことに多かった。当時のアウトサイダーであった玄白らは、『解体新書』上木にあたって、内には学問の研鑽を重ねつつ、外には種々の方策を講じて、よくその目的達成にこぎつけたのであり、この間にあって、玄白の現実主義的な考え方や、よい意味での政治性が遺憾なく発揮されている。また清庵との交流においては、一転して、玄白の性格の中の情に感じやすい人間的な一面が現出している。

まさに本書の魅力の一つは片桐氏の杉田玄白観の故であろうという趣旨のことを述べたが、『医学のあゆみ』七七巻九号で、緒方富雄先生が同じようなことを書いておられる。ただし緒方先生は「主観的な描写をしているのは、読んでおもしろいが、歴史家としていかなるものであろうか」と述べておられる。本書中に玄白に対する片桐氏の sympathy が入りすぎているとの御指摘であろう。片桐氏もこの点は恐らく考慮されていたに相違なく、「は

しがきの中で、『しかし、論は私のもっとも苦手とするところである』という表現によって、その執筆態度を示しておられる。だが、一方では「私なりに、玄白と心の旅をしてみたい」と述べておられるように、玄白に対する sympathy が抑えがたい力が文字となってくる心情を吐露しておられる。私個人としては、たとえ客観性が要求される伝記のようなものでも、多かれ少なかれ史家の主観が混入することは避けられず、従って、それはそれなりに、あるいは、時によっては、むしろその故にこそ一層意義がある場合もあり得ると考えている。本書の場合、片桐氏の個性が強くでて、むしろ成功した例といえるのではないだろうか。

そのことと関聯してくるが、漢方医学に関心を持ち、とりわけ古方派の活動をきわめて高く評価している現在の私の立場としては、片桐氏の所論、とくに漢方医学に言及された部分については、それを全面的に受け入れることは不可能である。しかし、これは本書の個々の条文に対する批判ではなく、もう少し本質的な考え方の相異にもとづくものである。その点についてはここで評論することはしないが、いずれ機会をみて、私の考えも聞いていただき、更に御教示をも仰ぎたいと思っている。

本書は固定しかかっていた私の杉田玄白観を大きくゆさぶってくれた。私は、これを機会にあらためて玄白の著作を虚心に読んでみたいと思っている。

(大塚恭男)

(発行・吉川弘文館、定価八〇〇円)

新刊紹介

安西安周先生遺稿「日本医道論」

この本は昨年、安西先生が亡くなられた後、「漢方と臨床」に11回にわたって連載されたものを一冊にまとめたものである。先生の経歴はここに記すまでもないが、浅田流の漢方を学び、後進の指導にあたる傍ら、医学界にも数々の業績を残された。特に、「日本儒医の研究」は貴重な文献となっている。この本が出版された経緯と内容を矢数道明先生が本書の冒頭に詳しく書かれているのでそれをここに引用させていただく。

安西安周先生の遺稿

「日本医道論」の掲載について

矢数道明

安西安周先生は、八年間に及ぶ脳軟化症の療養生活によく耐えてこられたが、去る四月四日老衰症状加わり、享年七十九の一生を畢えられた。すでに本誌上「日本古医学派考」「われらの先駆者」等の二大連載物を始め、多くの貴重な寄稿をいただいていたが、先生の学勲は、明治漢方最後の巨頭、浅田宗伯の直流を伝える数多くの著述と、儒医一本の老大な史伝編纂の大業績に集約されるものと思われる。

先生は晩年横浜市程ヶ谷郊外の新開地、女婿宅の一室に隠棲され、酒を忘れた寂しい、しかし極めて静かな数年を過ごされた。その告別式の後で、ご遺族に対し、若しご遺稿でもあれば、先生の

最後を飾るようご紹介したい旨を申しあげておいた。

すると先般、これこそ先生の精魂をこめられた大作と思われる旧稿を持参された。先生は生前ご家族に対して「この原稿は十分念入りにまとめてあるから、できうれば何とかしてこのまま一冊の本にて欲しい」と述懐されていた由である。

本稿は安西先生が漢方に転身されて数年後、いまから四十年ほど前の昭和初頭に筆を起し、昭和三年十一月に脱稿されたもので、総数四三四枚に及び、和紙原稿用紙に終始一貫毛筆を以て認められた一大雄篇である。表紙の中央には「両全堂医言」と大書され、右側に皇国隠医安西安周著としてあるが、中央の文字は抹消され、左側に昭和廿一年八月に「神州医道論」と改題した旨が附言してある。しかし最終的には表題の如く「日本医道論」と三たび題名が改められた。それは当時敗戦により神州の語はタブーとされたためである。

本稿は総論章、各論七章より成り、全篇を通覧して驚くことは、四十年前の所論であるにも拘わらず、現下の日本医道復活振興論として、完璧の筆を進められ、脈々胸を打つ迫力に満ち溢れていることである。本稿こそは先生の漢方転向時代の初一念であり、畢生の念願であったと思われる。

いまこれを十二回に分けて掲載し、終了後は先生の遺言に忠えてこれを単行本として、「日本医道論」の真面目として現世代に贈り、永く後世に伝えたいと思うものである。

本書は東亜医学協会（東京都新宿区新小川町二一〇、電話二六〇一一四七三）で実費五〇〇円で頒布している。

川本裕司・中谷一二共著 「近世日本の化学の始祖 川本 幸民伝」

幕末の洋学者川本幸民の伝記については、戦後設立された顕彰会が企画し刊行された「蘭学者川本幸民」(小沢清躬著、昭23)がある以外は未定稿の稿本類あるいはそれに準拠した小冊子があるにすぎなかったが、幸民百年忌を迎える当り、著者に後裔と郷土史家というよき人を得て、その協同作業によって、現在までの諸氏の研究成果をふまえ、さらに新資料を発掘・追加して、最も詳細な幸民伝となっている。

ただ、おしむらくは、初刷に誤植がかなり散見されることと、誤証と思われるものが目につく。例えば、坪井信道が緒方洪庵門に入った(P45)という師弟が逆になっているのや、「和蘭問答」(享保九年の蘭人江戸参府のときの問答書、今村市兵衛ら通記筆記)を建部清庵、杉田玄白らの「和蘭医事問答」と混同している(P143)ことなどである。

また、明治になって陸軍文庫として刊行された「化学読本」が稿本の「化学新書」の増訂版だとする説が踏襲されていて(P188)、P126に紹介されている両書の原書の関連記事と統一を欠く。

さらに、「化学」の呼称についての見解については、新資料の「裕軒隨筆」を引いて、嘉永四年説を新提示している。しかし、この記事の年代考証については一まつ不安がありそうだ。むしろ新資料の「万有化学」開版見致から「化学新書」以前に化学を冠した幸民の書のあったことがわかり、司馬凌海の「七新葉説」

(万延元年五月稿)と相前後して化学の呼称が出現する点を与えて、この使用を誘因したもの——中国における使用例の伝播の影響——を無視できないだろう。

ともあれ、本書を足場に、幸民伝研究の一層の進展を期待し、著者らの労を謝したい。(宗田 一)

B6版、二六二頁、定価八〇〇円。発行所 共立出版KK。

石原 明、杉田暉道、長門谷洋治共著

看護史——系統看護学講座 別巻5——

この本は高等看護学校の教科書であり、石原氏の著わした看護史を改訂したものである。看護史は文化史、社会史、宗教史と深い繋がりを持つだけに、それらに通暁することを必要とするが、この本は改訂前もまよりの良い好著であった。ただ、石原氏の得意とするところが中世であるために、教科書として使うには近代から現在にかけて、補うことが要求されていた。今度の改訂に長門谷氏が加わり、その時、大いに改善された。また、仏教に係わることには杉田氏が筆を加えたと聞く。それに挿絵が全面的に変えられ、本文の組方もスマートになって面目を一新している。挿絵では、以前のもので残して欲しかったものも二、三あったが、数に制限があったのだろう。

これまで、日本の近代看護史は中里龍瑛氏、雪永政枝氏、木下安子氏、土曜会や芽の会のメンバーにより、着々と明らかにされてきた。この本では一応、これらを簡潔にまとめあげて、今まで

誤まり伝えられたものも匡している。だが、看護史はまだ調べなければならぬ点も多く、定説となつてゐるものも、今一度見直す必要があるのではないかと、ここ数年看護史を担当した結果、感じさせられてゐる。

とかく、単独で書いた本の改訂に何人か加わると本のバランスがくずれ、失敗する例が多いが、この本では成巧している。

この本は看護史の教科書であるが、通読しても面白く、古くは看護は医療から分化していなかったことから、医学史に興味をもつ人にも面白い本である。特に、挿絵はさすがに石原先生の本とうなづける珍しいものがある。

(発行所・医学書院、定価一〇〇〇円)

(酒井 シツ)

第二三回国際医史学会について

第二三回国際医史学会議出席について標記会議が明年九月二日〜九日まで英国、ロンドンにて開催されます。

既に会議説明書等入手され御出席の検討をされていらっしゃる先生方も多数おありかとお察し致します。現在此の会議に關し色々連絡を取つてゐる国際会議情報センターの話によりますと、七、八名の先生方は大変興味をお持ちとか聞いております。

昨今の航空運賃の規定によりますと、御出席される先生方を御一緒に主グループに致しますと、割引運賃を利用することが出来ます。参考のために運賃の説明を致しますと、

1 ○ 東京〜ロンドン往復二等 ¥488,000

※一人で旅行した場合の普通運賃です。

2 ○ グループ十名以上に切りますと東京〜ロンドンの運賃が ¥308,250 となります。

※北の場合はグループ旅行になりますので日本出発前にホテル代、その他をまとめて支払うことにあります。

3 ○ グループ二五名以上になりますと東京〜ロンドンの運賃が ¥244,000 となります。

※グループの場合は全行程全員同一行動となっております。

グループ旅行の方が旅費としては格安になりますので御利用されたら如何かと存じ御案内をしました。

問合せは、

お問い合わせは：

国際会議出席のコンサルタント 国際会議情報センター

〒101-1 東京都千代田区内神田三ー一〇一七・

神田駅前アツミビル

電話 東京 (〇三) 二五六―九〇六七―八

日本医史学会々則

第一条 本会は日本医史学会と称する。

第二条 本会は医史を研究しその普及をはかることを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

一、年一回、総会を開く。

二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発行し、これを会員にわかす。

三、随時、地方会、例会を開き、研究発表、展覧などを行なう。

四、日本の医史学界を代表して内外関係学術団体との連絡協力をはかる。

五、その他の事業。

第四条 本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようとするものは、理事または評議員の紹介を経て会員となることができる。

第五条 会員は会費として年額二〇〇〇円を前納する。ただし外国に居住する会員は年額一〇ドルとする。

会員は研究発表および本会の事業に参加することができる。

本会に名誉会員と賛助（維持）会員をおくことができる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者とし評議員会の議をへて推せんする。

第六条 本会に次の役員をおく。

一、役員は理事長、会長、理事、監事、幹事とする。

二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代表する。

三、会長は年一回の総会を主催し、その任期は総会終了の日までとする。

会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。

四、理事は若干名とし、理事長を補佐し会務の遂行にあたる。

理事、監事は評議員の中より評議員会の推せんにより理事長が委嘱する。

五、本会の実務を処理するため、常任理事二名、幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は

会員より理事長が任命する。

六、役員は任期は二年とし重任を妨げない。(ただし会長を除く)

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条 評議員は若干名とし、普通会员の中より理事会の推薦により総会で決める。

評議員会は本会の重要な事項を議決する。任期は役員に準ずる。

第八条 本会の事務所は順天堂大学医学部医史学研究室室内(東京都文京区本郷二の一の一)に置く。

第九条 本会は理事長の承認により支部または地方会を設けることができる。

第十条 会則の変更は総会の承諾を要する。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行情日 年四回(三月、六月、九月、十二月)末日とする。

投稿資格 原則として本会々員に限る。

原稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表

題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

原稿枚数 表題、著者名、本文(表、図版等を除く)で五

印刷ページ(四百字原稿用紙で大体十二枚)までは無料とし、それを越えた分は実費を著者の負担とする。但し欧文原者においては三印刷ページまでを無料とする。図表の製版代は実費を徴収する。

校正 原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集部にて行なう。

別刷 投稿者には論文掲載紙を五部無料贈呈する。別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先 東京都文京区本郷二丁目の一

順天堂大学医学部医史学研究室内 日本医史学会

編集委員 大島蘭三郎(委員長) 石原 明 杉田暉道

大塚恭男 酒井シヅ 沢井貫太郎

は、政府外で行われる科学研究を援助する全体的な機関が必要なことは明らかです。科学研究と教育への国家的関心は国立研究所を作ることで最も促進されるというのが私の判断です。」と報告文を結びました。ブッシュ博士の提案した型とははなれたものとなりはしましたが、医学部門は 1946 年以來の National Institute of Health (NIH) の拡充という形で実行されました。1950年代のはじめ神経疾患および精神衛生の分野で部門研究所が作られ、外部への研究、教育の援助および、神経と行動科学の全域に亘って基礎および臨床研究の連合プログラムを開発しました。大学に基盤をおく脳研究所について紹介するため、1959年私が関係して設立されたカリフォルニア大学ロスアンゼルス分校 (UCLA) の脳研究所の概要をお伝えします、所員は 100 人を越え、その研究分野は神経科学の全域に亘っています。大学にこのような研究所をおくことの重要性は、大学院生など後継者の教育に加えて、かつてのドイツの諸大学の研究所の果たした役割と同じことが指摘できます。開設以來 12 年間に、そこで働いた外国人は総人員の約 1/3 で、432 人で、37ヶ国に及んでいます。大部分の人達はその後母国にもどっています。地域別にいきますと、128 人がアジア、114 人が西ヨーロッパ、100 人がイギリス、50人が南アフリカ、30人が東ヨーロッパとソ連、10人が中近東と北アフリカから訪れた人達です。ひとつの国からの最多は日本で 93 人です。大帝國についてのべられている金言を引用するなら「すべての道は西へと進む——ロスアンゼルスから日本へ。」というわけです。事実そのようになりつつあるのは嬉しいことです。

各国の脳研究所の国際的連絡は 1959 年パリで International Brain Research Organization (IBRO) の計画がねられ、1961年、全世界的な規模での会合がもたれることで果されました。この IBRO の目的は「全国的、そして国際的規模で実際面での協力を増すこと。異なった文化背景をもつ科学者達の間での情報とアイデアの交換を促進すること、開発途上にある国々に脳研究所を設立すること。脳に関する研究から得られる知識や恩恵をすべての国々に伝えること。」です。

脳研究の近代の歴史はこのように全回転をしてきました。その将来が成功に満ちたものであることを心から願ってやみません。

(広沢一成抄訳)

神経科学の発展における研究機関の役割

H. W. マグーン

現在開催されている第18回日本医学会総会に招待下さった日本医史学会に感謝いたします。医史学については全くの素人ですので脳の研究に於ける成長の社会学とでもいうものについて述べてみます。

研究所という考え方は個人の傑出した能力を中心として発達した 18 世紀までの科学とは対称的に、組織の力、総合力を重視する方向をもつもので、19 世紀にドイツではじまり、他の国々に拡まって行きました。

脳の研究に関しては 1901 年、パリで開かれた国際学士院会議で国際脳研究委員会の設立と各国に中央的な脳研究所を作ることが決議されました。そして、1908 年までには 8 ケ所の研究所（ウイン、マドリッド、フランクフルト、ライプツヒヒ、チューリッヒ、ペテルスブルク、フィラデルフィア、アムステルダム）が国際脳研究委員会に加盟し、各国からこれらの研究所へ研究生が集散し、全世界的に脳研究のレベルを上げました。日本の脳研究所も、ウィーンのオーベルシュタイナーの許で研究を行っていた三宅博士の手で創設され、現在、この学会の会長である小川博士、その後継者である時実博士、草間博士の指導の下に、我々の脳に関する知識に貢献しています。

脳研究所の拡大は戦争という障害にも拘らず続きました。フォクト夫妻の活動を例にとりますと、1902 年にはベルリン大学に神経生物学実験室を作り、第一次大戦後はベルリン・ブッフにウイヘルム皇帝脳研究所を作りました。1937 年にはノイシュタットに別の研究所を作りました。この間、1924 年にはレーニンの脳を標本とするため、モスクワに、今日の脳研究所の基となる研究所を作りました。ドイツ国内にある上述の研究所は今日、マックスプランク研究所の一部として各地にあります。カナダでは 1934 年にモントリオール神経研究所が設立され、シェリントンに学んだベンフィールドは特に神経病理学に力をそそぎ、1940 年に、この研究所はマックギル大衆医学部と合併しました。アメリカでは 1919 年、ハーヴェ・クッシングが第一次大戦後のアメリカに神経の外科的治療を中心とする神経学の国立研究所設立を目指しましたが、これは稔りませんでした。第二次大戦も終局に向った 1944 年 11 月、ルーズベルト大統領は科学技術研究所長のブッシュ博士に戦時研究の平和利用についての意見を求めました。ブッシュ博士は「科学、果しない未開地」と題する報告文をもってトルーマン大統領に答えました。「疾病に対する戦いの進歩は新しい科学知識の流れに依存しています。新しい産物、企業そして職業へは自然の法則に関する知識をたえず加えること、そして、その知識を実際的な目的へと応用することが必要です。この大切な新知識は基礎的研究からのみ得られるものです。科学の進歩なしには近代世界の国家として我々の健康・繁栄そして安全の保証は達成されません。」とはじまり「連邦政府は若い世代に新しい科学知識の創造と科学的才能の開発を促進する責任をもつべきであります。この責任を有効に遂行するために

South America, 30 from East Europe and the U.S.S.R., and 10 from the Near East and North Africa. I am particularly pleased to be able to tell you that the largest number from any single country were the 93 from Japan. To paraphrase an earlier historical axiom about Empire, "Westward moves the course of research—from Los Angeles to Japan." As this trend continues, our young scientists will soon all be coming to work with you in Japan and, as a matter of fact, I am pleased to note that this is already taking place.

In relation to this international note, with the continuation, revival, expansion, and addition of brain research institutes in many countries since the turn of the century, when this movement gained initial identity and momentum through the activities of the International Brain Research Commission, one concluding step remained to complete the sequence of development in the pattern it began. This gap was filled, in 1959, again in Paris, when a study group drawn from a number of countries formulated the main outlines of an International Brain Research Organization, or IBRO, which became affiliated with UNESCO in the following year and held the first meeting of its Executive Committee in 1961. Just sixty years, therefore, after the initial International Brain Research Commission became operative in 1901 (and was subsequently dissolved), in 1961 a second International Brain Research Organization initiated, among other activities, current efforts: "to increase interdisciplinary collaboration on a national and international scale; to accelerate the interchange of information and ideas between scientists of different cultural backgrounds; to assist in the establishment of brain research in developing countries; and to distribute to all countries the knowledge and benefits that may accrue from research upon the brain."

The modern history of brain research has thus come full cycle—may its successful future be insured.

The growth of the National Institutes of Health is of special interest for, by fiscal '71, its total budget had reached a high of \$1.6 billion. In the early 1950's, component Institutes were established in the fields of neurological diseases and mental health. In addition to providing extramural support for research and training, these Institutes have also developed a coordinated intramural program of basic and clinical research in the full range of the neural and behavioral sciences. This intramural program supports a large staff of career investigators and provides as well for the participation of visiting Research Associates. Though not so identified, this intramural program is actually a close approximation of the National Neurological Institute envisioned earlier by Harvey Cushing. Since the total fiscal 1971 appropriation for the most for neurological diseases amounts to \$105 million, and the intramural program expends 10%, the latter's annual budget must be about \$10 million, which is precisely Cushing's earlier estimate of the cost of such an operation, obviously, this is not "looked upon as fantastic" today.

To provide a comparative view of a contemporary university-based brain research institute in the United States, I shall be chauvinistic in brief description of the Brain Research Institute at the University of California, Los Angeles. Established in 1959, out of earlier associations in Chicago of its Director, Dr. John French, with the Illinois Neuropsychiatric Institute, and myself with Professor Ranson's Institute of Neurology at Northwestern Medical School, the Los Angeles Institute now has a little more than a hundred members, all of whom hold either faculty or research appointments in some 15 participating departments of the University. These members are selected by the Director and his Advisory Committee on the basis of their research productivity, which ranges over most of the neurosciences. In addition to their other activities, all members are responsible for the preceptorial education of graduate students and postdoctoral fellows who are preparing for career involvement in fields of brain research.

It is this last feature, in particular, that emphasizes the importance of maintaining such research institutes in university settings, for their need is as great today as in 19th Century Germany. Dr. French has recently assembled data concerning the graduate students, postdoctorals, and visiting scientists who have been associated with the Brain Research Institute during the little more than a decade since its founding in 1959. This group numbers 1,376, of whom approximately a third each have been students, postdoctorals, or more mature scientists. Those from abroad number 432, or about a third of the total. They came from, and with very few exceptions later returned to, 37 different countries. By regions, 128 were from Asia, 114 from Western Europe, 100 from the United Kingdom, 50 from

New products, new industries and more jobs require continuous additions to knowledge of the laws of nature and the application of that knowledge to practical purposes. This essential new knowledge can be obtained only through basic research. Without scientific progress, no amount of achievement in other directions can insure our health, prosperity and security as a nation in the modern world."

The Report concluded: "The Federal Government should accept new responsibilities for promoting the creation of new scientific knowledge and the development of scientific talent in our youth. It is my judgement that the national interest in scientific research and education can best be promoted by the creation of a National Research Foundation."

Bush proposed that this agency consist of three main divisions: a Central Division of Natural Sciences, relating to basic research; on one side of which was to be a Division of Medical Research, relating to the health professions; and on the other a Division of National Defense, relating to technology and engineering. He urged that these functions be centered in a single agency, saying: "Science is fundamentally a unitary thing. Separation of the sciences into tight compartments, as would occur if more than one agency were involved, would retard and not advance scientific knowledge as a whole."

In many respects, these proposals appealed to the principles of our 18th century Constitution. They embodied the strong faith of the Enlightenment, that "Reason and science, freed from earlier definitions of traditional values, would advance the political freedom and social well-being in our nation." The Report's emphasis upon the centralization of these activities in a single foundation, however, conflicted strongly with concepts of individual initiative and competitive free enterprise, so distinctive of our egalitarian credo.

As it turned out, the goals of the Report have since been achieved, not as proposed but through a multiplication of Federal agencies and a decentralization of decision-making. The central Division of Natural Sciences of the Report was implemented by the establishment in 1950 of an autonomous National Science Foundation. The Division of Medical Research gained expression by major expansion of the already existing National Institutes of Health from 1946 on. Instead of a single Division of National Defense, an Atomic Energy Commission in 1946 and a National Aeronautics and Space Administration in 1958 were added to already existing units. Support for advanced education was provided by each of these agencies, and by the U. S. Office of Education as well. In fiscal 1971, the total national support of research, development and related training by these and other Federal agencies amounted to \$ 15.8 billion.

such an institute might cost ten million dollars, this was looked upon as fantastic. Unhappily, to make the story short, we met with opposition from influential quarters. The undertaking finally was abandoned, and we one and all drifted back to our former positions. Disappointed as we were, I like to think the seed did not fall on wholly barren ground, and that our long-forgotten project may have eased the way for McGill to establish its unit which, let us hope, will set an example to be emulated by large university centers elsewhere."

For reasons that are difficult to understand, national interest in supporting research in the sciences and their professions in the United States seems to reach a threshold leading to implementation only during or immediately following the country's involvement in a major war. Like the system of science-oriented Land Grant Colleges and State Universities mentioned earlier, our National Academy of Sciences was also established in 1862, during the darkest days of the country's Civil War. At the next available occasion, the Academy's implementive arm, the National Research Council, was established in 1920, immediately after World War I. Analogously, following World War II, events of immense importance for research in the sciences and their professions were initiated in the United States.

As the tragedies of the Second World War approached their end; in November 1944, shortly before his death, President Franklin D. Roosevelt wrote a letter to Vannevar Bush, who before the war was professor of engineering at the Massachusetts Institute of Technology. Roosevelt's letter read, "Dear Dr. Bush: The Office of Scientific Research and Development, of which you are the Director, represents a unique experiment of teamwork and cooperation in coordinating scientific research and applying existing scientific knowledge to the solution of technical problems paramount in war.

"There is, however, no reason why the lessons to be found in this experiment cannot be profitably employed in times of peace. The information, the techniques, and the research experience developed by the Office of Scientific Research and Development should be used in the days of peace ahead for the improvement of the national health, the creation of new enterprises bringing new jobs, and the betterment of the national standards of living.

"New frontiers of the mind are before us, and if they are pioneered with vision, boldness, and drive, we can create a fuller and more fruitful employment and a fuller and more fruitful life."

Bush's subsequent reply to President Truman, Roosevelt's successor, was in the form of a report entitled "Science, the Endless Frontier." Its text began: "Progress in the war against disease depends upon a flow of new scientific knowledge.

dedicated, is the achievement of a greater understanding of the neurological ills to which man is heir, so that physicians may come to the bedside with healing in their hands." The provision of research laboratories was also significant for, as Penfield remarked, "No one could become familiar with neurological problems, and with the handicaps imposed upon workers in this field, without concluding that adequate laboratories were essential to further progress. For any constructive ideas that I may have contributed, I have to thank the guiding influence of the men under whom it has been my good fortune to work. Most important was the initial influence of Sherrington. In his laboratory at Oxford, to search for the hidden truths of neurology became a habit of mind, a coloring to all one's thoughts." Additionally, provision was made for Research Fellows, of whom Penfield said, "The important work of research is carried on by young men who have finished all preliminary training and who have not yet undertaken positions of responsibility. Some of them are voluntary assistants, others are on a research stipend. They may be wandering students from any part of the world. If well chosen, the Research Fellows are the most important part of the staff of an Institute of this sort."

Coming last to my own country, at the opening ceremonies of the Montreal Institute, Penfield's colleague in neurosurgery, Harvey Cushing, then neurosurgeon at Harvard Medical School, recalled his earlier efforts to establish a major National Institute of Neurology in the United States in 1919. "As World War I drew to a close," Cushing said, "a small group of overseas medical officers, whose official positions had thrown them together, found themselves disinclined to return to their former humdrum professorial tasks. In talking the matter over, they conceived the idea of founding a National Institute of Neurology, whose primary purpose was to aid the government in supervising the further treatment of the disorders and injuries of the nervous system sustained by our soldiers. We looked forward not only to having suitable wards for organic, psychopathic, infectious and neurosurgical disorders, but also an operating suite and proper laboratories for neuropathological investigation and experimentation.

"It was our ambition to have the organization grow into a postgraduate school for those whose interests pointed towards neurology or anyone of its many bypaths. Were such an institute to be put in operation and kept out of politics, we, on our part, as whole-time servants, free from the distractions of private practice, agreed to devote the remainder of our working lives in the effort to make it a success.

"In retrospect," he continued, "the government might have been saved some hundred of millions of dollars that have since been expended on the care of these very patients. But when it was suggested that the erection and maintenance of

To return to the initial Central Institutes, many of their resources, some of the institutes themselves, and the identity which the International Brain Research Commission had provided their development, were swept away in the holocaust of World War One. Following the war, however, the impetus of the initial movement was gradually restored. The Institute at Vienna was revived in 1938 and, as a measure of its seniority, its 75th anniversary was celebrated in 1957. The institute at Amsterdam continued and its 50th anniversary was celebrated in 1959. The institutes at Zurich and Philadelphia also continued, as did that of Bechterew which, after 1920, became the State institute of Brain Research in Leningrad. Upon Cajal's retirement from the University of Madrid, the Spanish government established a large new institute Cajal, completed in 1932, whose programs, interrupted later by the Spanish Civil War, are currently being restored.

The tendency for brain research institutes to reproduce offspring, already noted, is nowhere better illustrated than by the fecundity of those associated with Oscar Vogt and his wife Cecille. They had established a Neurobiological Laboratory at the University of Berlin in 1902 and, after the first war, a large multidisciplinary Kaiser Wilhelm institute for Brain Research in Berlin-Buch. Forced to leave in 1937, they established still another institute at Neustadt. On the death of Lenin in 1924, Vogt was called to Moscow and commissioned to arrange facilities for appropriate study of the Soviet leader's brain. The mansion of a former capitalist was converted to laboratories, a group of Soviet scientists was trained, and in the course of two and a half years Lenin's brain was cut in complete section for microscopic study. This Moscow Brain Institute gained independent status in 1929 and today includes a number of flourishing research departments.

Within Germany itself, further offspring of the Vogts' institute are currently proliferating in a veritable chain reaction, through the Max Planck Gesellschaft's establishment of a multi-departmental institute für Hirnforschung, with widely distributed units. In addition to continuing the program at Neustadt, comparative studies are proceeding at Giessen, behavioral research at Seewiesen, neurophysiology at Göttingen and Munich, neurochemistry at Marburg, and general neurology at Koln. Most interestingly, in relation to the earlier institute of Edinger, still another unit at Frankfurt is again devoted to the study of Neuroanatomy and pathology.

Moving now to America, in Canada, the Montreal Neurological Institute was opened in 1934, six years after its director, Wilder Penfield, had joined McGill University to introduce neurosurgery and neurological research at its medical school. High motivation and purpose contributed importantly to the many achievements of the Montreal Institute. In Penfield's words, "The task to which this Institute is

of Academies held in Paris in 1901, the Royal Academy of Sciences of Saxony in the person of Wilhelm His, professor of anatomy at Leipzig, formally moved to encourage increased research upon the brain.

The Association sanctioned the establishment of an International Brain Research Commission, dedicated to promoting study of the structure and function of the central nervous system. This Brain Research Commission hoped, through the influence of the national academies, to convince the various governments of the importance of increasing international activities in this field, primarily by establishing central institutes for brain research in each country where special collections of investigative material and other resources could be accumulated and facilities be made available for their study.

By 1908, eight already existing or new research institutes had been made associates of the International Brain Research Commission and later became designated as central or National Institutes: at Vienna, Madrid, Frankfurt, Leipzig, Zurich, St. Petersburg, Philadelphia and Amsterdam. With this action of the International Brain Research Commission, the status of these centers was much improved. While previously occupying crowded and often borrowed space, they were accorded more extensive facilities and usually assigned a supporting budget and university affiliation as well. The encouragement and support of the International Brain Research Commission thus led to great improvement in the resources and programs of these institutes.

Like the physiological institutes in the German universities before them, these newly-established Central Institutes for Brain Research rapidly attracted large numbers of advanced students, postdoctorals and visiting scientists from many countries, who participated for varying periods of time in their activities. Among these early visitors was Dr. Koichi Miyake from Japan, who from 1904 to 1907 studied in Obersteiner's Institute in Vienna. On returning to Japan, Miyake continued his research and was appointed professor of psychiatry at Tokyo University Medical School in 1925. On approaching retirement in 1936, he again visited Europe and the U. S. A. to inspect their brain research institutes, and became inspired with the need to found such an institution in Japan. On his return, with support provided by a wealthy silk merchant, Mr. Horikoshi, a Laboratory of Brain Research was established at Tokyo University Medical School and Emeritus Professor Miyake became its first director. This Laboratory was expanded as the Institute of Brain Research in 1953 and, under the directorship of your Society's President, Dr. Ogawa, and his successors, Dr. Tokizane and Dr. Kusama, it has continued to provide major contributions to our knowledge of the brain.

activities in such institutes, these young investigators returned to their home countries to introduce in them this German model of organized research.

In the latter half of the 19th Century, steps were taken to apply this pattern of group research of the German universities to the solution of practical problems outside these institutions. An agricultural experiment station was established in Saxony in 1851, to extend Liebig's chemical studies to the analysis of soil, water, fertilizers, pesticides and foodstuffs for the improvement of agriculture and, by 1880, the number of such stations in Germany had increased to 50.

Concomitantly, in the United States, the Morrill Act in 1862 established a system of publicly-supported Land-Grant Colleges and State Universities in which, without excluding other scientific and classical fields, educational emphasis was directed to the study of "agriculture and the mechanic arts," to promote, as the Act read, "the practical education of the industrial classes in the several pursuits and professions of life." In 1887, follow-up Congressional action provided for the establishment of agricultural experiment stations at each of these institutions to promote investigation of the principles and applications of agricultural science.

A second area of development leading to the establishment of research institutes in the latter 19th Century stemmed from investigative advances in microbiology and their application to immuno-therapy in the improvement of public health. In Germany, the achievements of Koch were recognized in 1880 by the establishment in Berlin of an Institute for Infectious Diseases under Koch's direction. In France, Pasteur's discoveries led the French Academy to open an international subscription for establishment of the Pasteur Institute, inaugurated in Paris in 1888. By the turn of the century, other such centers had been established in St. Petersburg, London, and New York.

The young Japanese bacteriologist, Kitasato, was a major figure in this stream. He worked with Koch for six years and was associated with von Bering in the discovery of diphtheria and tetanus antitoxins. On his return to Japan, Kitasato founded the Institute of Infectious Diseases in Tokyo and became its Director in 1901. Later, one of his greatest students, Noguchi, became a key member of the Rockefeller Institute in New York.

By the turn of the century, these ranging developments had brought the concept of research institutes to widespread public attention, and had demonstrated the great advance of investigative activity which their establishment made possible. It was at this point that institutes for brain research, a number of which had been developing locally through the initiative of individual investigators, first received general recognition and support. At the inaugural assembly of the International Association

The Role of Organized Research Units in Development of the Neurosciences*²

by

H. W. Magoun*

I am most appreciative of this kind invitation of the Japan Society of Medical History to participate in its program at the current 18th Japan Medical Congress. As an amateur admirer of your field, instead of focusing upon substantive advances in the history of medicine, I should like to review with you some features of what might be called the sociology of growth in the health sciences, with emphasis upon the role of organized research units in advancing the development of our knowledge of the brain.

Today, the establishment of research institutes forms a widespread pattern for advancing growth in many fields of science, which contrasts markedly with the mode of classical times and the Renaissance, when the foundations of modern science were established by the isolated efforts of outstanding individuals. The rise of scientific academies in the Enlightenment of the 17th and 18th Centuries provided initial agencies for promoting research and the communication of scientific findings. The actual beginning organization of research activities themselves, however, first gained substantial development in the 19th Century German universities and from them spread to other settings and countries.

In their competition for distinguished faculty, the German universities established research laboratories or institutes associated with their professorial chairs and under the direction of the professor. A succession of what we would today call advanced graduate students, postdoctorals, and visiting scientists flocked to such combined professor-research directors as Liebig in Chemistry at Giessen, Johannes Muller and DuBois Reymond in physiology at Berlin, and Karl Ludwig in physiology at Leipzig. Over an interval of some 30 years, Ludwig had 250 such students and associates, each of whose work he planned, guided collaboratively and, in many instances, published under the student's name. On completing their research

* Dean of the Graduate Division, University of California at Los Angeles

*² Paper presented at the 72nd General Meeting of the Japanese Society of Medical History, in Tokyo, 3. April, 1971.

Saito Yotatsu, a Physician of Akita Feudal Clan

Akitomo MATSUKI, M. D.

In this paper the author will provide a short biography of Yotatsu Saito (1793-1858) who was a representative physician of the Akita feudal clan. In 1817 he went to Edo to study classical Sino-Japanese medicine called Ko-iho under Sho-o-Mine for several years.

After returning to Akita from Edo, he took the leadership among many physicians of this clan and founded a private medical school in Akita. His students numbered 233.

One of his pupils, Yuzo Shiratori of Hakodate who had learned a method of vaccination from Goroji Nakagawa informed him about the effectiveness of the method against small pox in about 1840; Saito approved of and administered it widely in the Akita district where many inhabitants suffering from frequent flourishings of variola epidemics at that time. It was the first case in Japan that the clan performed vaccination systematically for inhabitants. The results were quite satisfactory. He deserves to be highly regarded as the first to promote the use of the vaccination method in the Akita district.

(Dept. of Anesthesiology, Hirosaki University, School of Medicine,

Hirosaki, Aomori, Japan.)

Z. MATSUDA, S. YOKOI und T. ISHIKAWA ausgeführt und sie zeigten die Atmungsorgane, die Baueingeweide, die urogenitalen Organe, das Gehirn und Rückenmark, die Muskeln, die Gefäße und die Knochen an der einen Leiche und noch dazu die Operationstechniken nach G. J. AGATZ an der anderen.

Diese Ausführung dauerte über einen Monat lang und die Zuschauer, die teils praktische Aerzte in der Stadt, teils Studenten und Aerzte der Igakukan-schule waren, verwunderten sich sehr darüber, die inneren Teile des menschlichen Körpers zum erstenmal anzusehen.

(Anatomisches Institut der Medizinischen Fakultät der Universität Kanazawa)

The History of Epidemics and Scurvy in Hokkaido before the Meiji Era—Part 1

Akitomo MATSUKI

The present study is undertaken to elaborate on the history of important diseases in Hokkaido before the Meiji Era as a part of the study of "Medical History in Hokkaido before the Meiji Era". This paper consists of two parts. In part 1 frequent prevalences of small pox, measles, influenza etc, are described. The earliest description of the flourishing of epidemics was observed in 1472 (3rd year of Bunmei), but the details remained unknown. The variola epidemics were most frequent and prevailed widely among the inhabitants of Hokkaido and occurred 16 times during the 233 years from 1624 to 1857.

The scurvy occurred among the soldiers of the Tsuguru feudal clan and so on, who were dispatched there and then wintered at Itrup and Kunashiri Island during Bunka-period (1804-1814). A detail of it is mentioned; about a thousand soldiers died of the disease during that time.

Part II is a chronology of the important diseases in Hokkaido before the Meiji Era which will appear in the next issue.

Two wooden models reproduced by Okamoto Onosaburo, the skillful sculptor in Edo, were copies from the model presented to Sugita Rikkyo from Hoshino Ryoetsu Jr..

The details of the three wooden models belonging to the Kagami group have been described through my recent study. Kagami Bunken offered the original wooden model chiseled by Tanaka, the famous sculptor in Osaka, to the Seiju Kan of Edo in February 28th 1819, and this original wooden model is now preserved in the Tokyo University Faculty of Medicine, but several parts of it were lost during an exhibition in Europe.

Another smaller one used by Kagami Bunken is now preserved by Dr. Taro Takemi in Tokyo. And also, another one belonging to Kagami group had been made by Ikeuchi, the famous sculptor in Osaka. This model is known through the description written by Okuda Banri, the pupil of Kagami Bunken. In 1821, Okuda Banri had offered this wooden model and his description on the treatment of fractures and dislocations to the Nagoya Igakkan (medical school) for the materials of medical education, but these were lost at the time of the Meiji Restoration. According to these facts mentioned above, it should be remembered that these wooden models of the human skeleton remaining today are the most important in evidences for the reception of the European medicine through the Dutch-learning the Edo period of Japan.

On the other hand, the author wishes to emphasize that these wooden models of the human skeleton remaining today are highly prized medical treasures for the medical history of Japan and these treasures should be surely handed down to posterity.

(Lecturer of Niigata University)

Die erste Zergliederung der menschlichen Körper in dem Kaga-Clan

Hisashi SAKAI

In Juli, 1870 wurden zwei männliche Leichen vom Falschmünzer zum erstenmal in dem Kaga-Clan zergliedert.

Zwei Urkunden, die von Herrn Z. MATSUDA darüber geschrieben wurden, waren schon früher gefunden worden. Den beiden Schriften nach war diese Zergliederung die erste in dem Kaga-Clan. Zuerst wurden die Leichen durch die Gefäßinjektion des fäulniswidrigen Mittels antiseptisch behandelt. Die Zergliederung wurde durch

The Wooden Models of the Human Skeleton made during the Edo Period in Japan

Hiroshi KAMBARA, M. D.,

It was revealed that nine wooden models of the human skeleton had been made by the early years of the 19th century from the closing years of the 18th century, but only three of the models actually remain today. It was well known that these wooden models were divided into two groups, namely the Hoshino group and the Kagami group, from the view point of the relation between instructors and sculptors and from the ideas of instructors.

Two noted orthopedic surgeons who were stimulated by the European medicine through the Dutch-learning, both Hoshino Ryoetsu (1745-1802) in Hiroshima and Kagami Bunken (1754-1819) in Osaka, did let two skillful sculptors make wooden models of the human skeleton each by themselves. These models were strictly made up through the results of human dissection under the influences of the European anatomy.

These models of the human skeleton were usually employed to teach functional anatomy of the skeletal system for the treatment of fractures and dislocations.

The original wooden model of the Hoshino group chiseled by Harada Koji in Hiroshima is now well preserved by Dr. Fumihiko Goto in Hiroshima. This original model fortunately survived the atomic explosion in 1945. After my recent study on wooden models of the human skeleton in Japan, it was revealed that the five models belonged to the Hoshino group and except for the original one, had been made in the early years of the 19th century.

The first copy also made by Harada Koji had been offered to the Seiju Kan, the feudal medical school of Edo, in 1800. However, this first copy was unfortunately destroyed in the great fire of 1806.

Soon after the death of both Hoshino Ryoetsu and Harada Koji, another two copies were made by Sashimonoya Kidenji, the famous sculptor in Hiroshima, under the instruction of Hoshino Ryoetsu Jr.. One of these was presented to Sugita Rikkyo in Edo, and another one appears to have been presented to Shingu Ryotei in Kyoto.

〈日本医事新報別刷集シリーズ〉

4 カラー アトラス 皮膚疾患100例

|||||
B 5判 112頁
カラー写真 100葉
定 価 1,800円
送 料 共
|||||

千葉大学名誉教授 竹内 勝著

日常頻繁にみられる代表的な皮膚疾患約 100例を大判カラー写真によって紹介し、疾患毎に症状、治療法、鑑別のポイントを解説するとともに局所療法を加えたもの。

5 カラー グセララ 外来における簡易検査

|||||
B 5判 64頁
カラー写真 126葉
定 価 1,200円
送 料 70円
|||||

順天堂大学教授 小酒井 望・同助教授 林 康之 共著

病態の把握に、正しい治療方針の決定に、臨床検査は今や日常診療上欠くことのできない情報源。外来において最も頻繁に行なわれる尿、血液、便の簡易定性検査を簡潔に要領よく、美しいカラー写真126葉をもって構成・解説した本書は、他に類をみない“絵でみる臨床検査”の決定版です。実地医家、医学生各位の座右において診療内容の向上、知識の整理にお役立て下さい。

6 カラー アトラス 直腸鏡のみかた

|||||
B 5判 28頁
カラー写真 85葉
定 価 500円
送 料 45円
|||||

東邦大学教授 小平 正著

直腸疾患の増加が注目されています。この時に当り外来診察の実際、器具の操作など直腸鏡使用法の基本からポリープ、ポリポーズ、潰瘍性大腸炎、直腸癌など直腸主要病変所見を、病理組織像、摘出標本と対比しながら鮮明カラー写真85葉を中心に解説した本書は、内科、外科、産婦人科臨床医家の必携書と確信します。

日本医事新報社

〒101-91 東京都千代田区神田駿河台 2-9
電話 (292) 1551 (大代表)・振替東京25171

蘭学の家

桂川の人々 今泉源吉著

続篇 定価 4,000円

内容 第一章 森島中良 第二章 五代国宝
第三章 文化甫賢

最終篇 定価 4,800円

内容 第一章 『和蘭字彙』刊行まで
第二章 明治維新まで
第三章 甫周病没まで

ご会員特別奉仕一割引

1巻お買上賜りましたご会員先生方へ是非ともご通読頂きたい、と存じ正篇ご購入頂きました、御礼をかねまして、ご案内申し上げます。

篠崎書林

日本医史学会役員氏名 (五十音順)

理事長 小川 鼎三
 常任理事 山形 敏一
 常任理事 石原 明 大鳥蘭三郎
 會計監事 宗田 一
 理事 事

赤松 金芳 阿知波五郎 石川 光昭
 今田 見信 内山 孝一 大久保利謙
 大塚 敬節 大矢 全節 緒方 富雄
 岡西 為人 蒲原 宏 佐藤 美実
 杉 靖三郎 鈴木 正夫 鈴木 勝
 宗田 一 竹内 薫兵 津崎 孝道
 戸苅近太郎 中野 操 三木 栄
 矢数 道明 吉岡 博人 和田 正系
 幹 事

大塚 恭男 酒井 シツ 沢井貫太郎
 杉田 暉道 谷津 三雄

日本医史学会評議員氏名 (五十音順)

赤松 金芳 安芸 基雄 阿知波五郎
 石田 憲吾 石川 光昭 今市 正義
 今田 見信 岩治 勇一 内山 孝一
 大久保利謙 大塚 敬節 大塚 恭男
 王丸 勇 大矢 全節 緒方 富雄
 岡西 為人 片桐 一男 川島 恂二
 蒲原 宏 金城 清松 久志本常孝
 榊原修紀田郎 酒井 シツ 佐藤 美実

清水藤太郎 杉 靖三郎 杉田 暉道
 鈴木 正夫 鈴木 勝 鈴木 宜民
 宗田 一 高木圭二郎 高山 担三
 竹内 薫兵 田中 助一 津崎 孝道
 津田 進三 戸刈近太郎 中泉 啓正
 中山 米造 中沢 修 中西 行
 中山 沃 長門谷洋治 中野 操
 服部 敏良 福島 義一 藤野恒三郎
 丸山 博 松本 明知 三浦 豊彦
 三木 栄 三廻 俊一 森 優
 谷津 三雄 山形 敏一 矢数 道明
 山下 喜明 山田 平太 吉岡 博人
 和田 正系 以上

大塚恭男氏渡欧 (評議員)

大塚氏は七月十九日から二十七日にかけ、ウィーンの郊外 Wartenstein で開かれた東洋医学のシンポジウムに日本から只一人招待された。大塚氏は更にドイツの医学の現状、史蹟を探訪されて八月二十二日に帰国の予定であり、九月の例会で、その模様を伺うことになっている。

編集後記

毎回のことながら、発刊日が予定より遅れてしまった。今回は、原著に力作が重なり、また、例会記事が長くなったことか

ら、以外に頁数がふえ、うれしい悲鳴をあげている。

この号から新しい試みとして、英文抄録を巻末にまとめ、欧文読者の便宜をはかった。編集の仕方には、雅拙さが残り、見苦しい所が何か所もあって本当に申し訳なく思っている。会員諸氏の厳しいご批判を待っています。

尚、現在、編集委員の手許にある原稿が少なくなってきました。次号の締切りは九月半ばです。投稿をお願いします。

昭和四十六年六月二十五日 印刷
 昭和四十六年六月三十日 発行

日本医史学雑誌

第十六巻 二号

編集者代表 大 鳥 蘭 三 郎
 発行者 日本医史学会
 代表者 小 川 鼎 三
 印刷者 五協印刷有限公司
 発行者 日本医史学会

東京都文京区本郷二丁目二番
 順天堂大学医学部医史学
 研究室内
 郵便番号 一一三番
 振替東京 一五二五〇番

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japanese Society of Medical History

Vol. 17. No. 2

June 1971

CONTENTS

Original Articles

- The Wooden Models of the Human Skeleton made
during the Edo Period in Japan
..... Hiroshi KAMBARA...(1)
- Die erste Zergliederung der menschlichen Körper
in dem Kaga-ClanHisashi SAKAI...(2)
- Remarks on the Isai-Iko, Poems by SUGITA GEMPAKU
..... Ranzaburo OHTORI...(34)
- The History of Epidemics and Scurvy in Hokkaido
before the Meiji Era. Part 1
..... Akitomo MATSUKI...(3)
- Saito Yotatsu, a Physician of Akita Feudal Clan
..... Akitomo MATSUKI...(4)
- The Role of Organized Research Units in Development
of the NeurosciencesH. W. MAGOUN...(5)
- Materials**.....(59)
- Notes from Monthly Meetings**.....(69)
- Miscellaneous**(81)

The Japanese Society of Medical History
Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2~1~1, Bunkyo-ku, Tokyo.